出雲市駅付近連続
立体交差事業地内

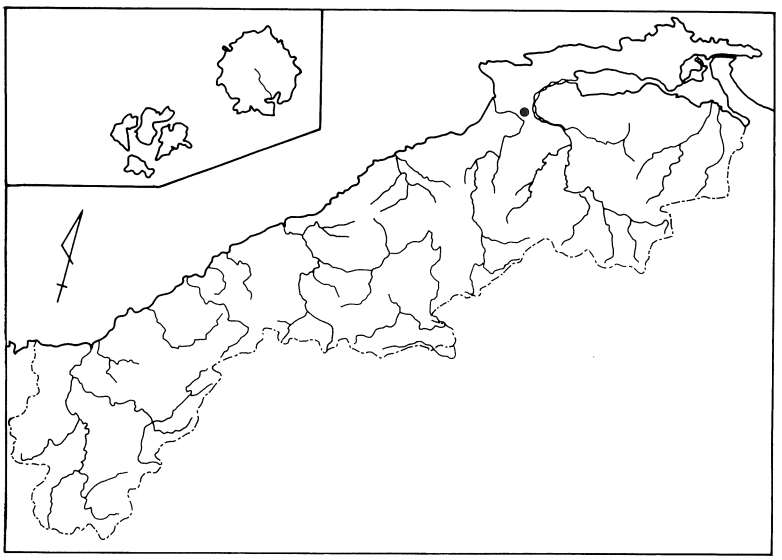
天神遺跡第7次発掘調査報告書

1997年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

出雲市駅付近連続立体交差事業地内

天神遺跡第７次発掘調査報告書



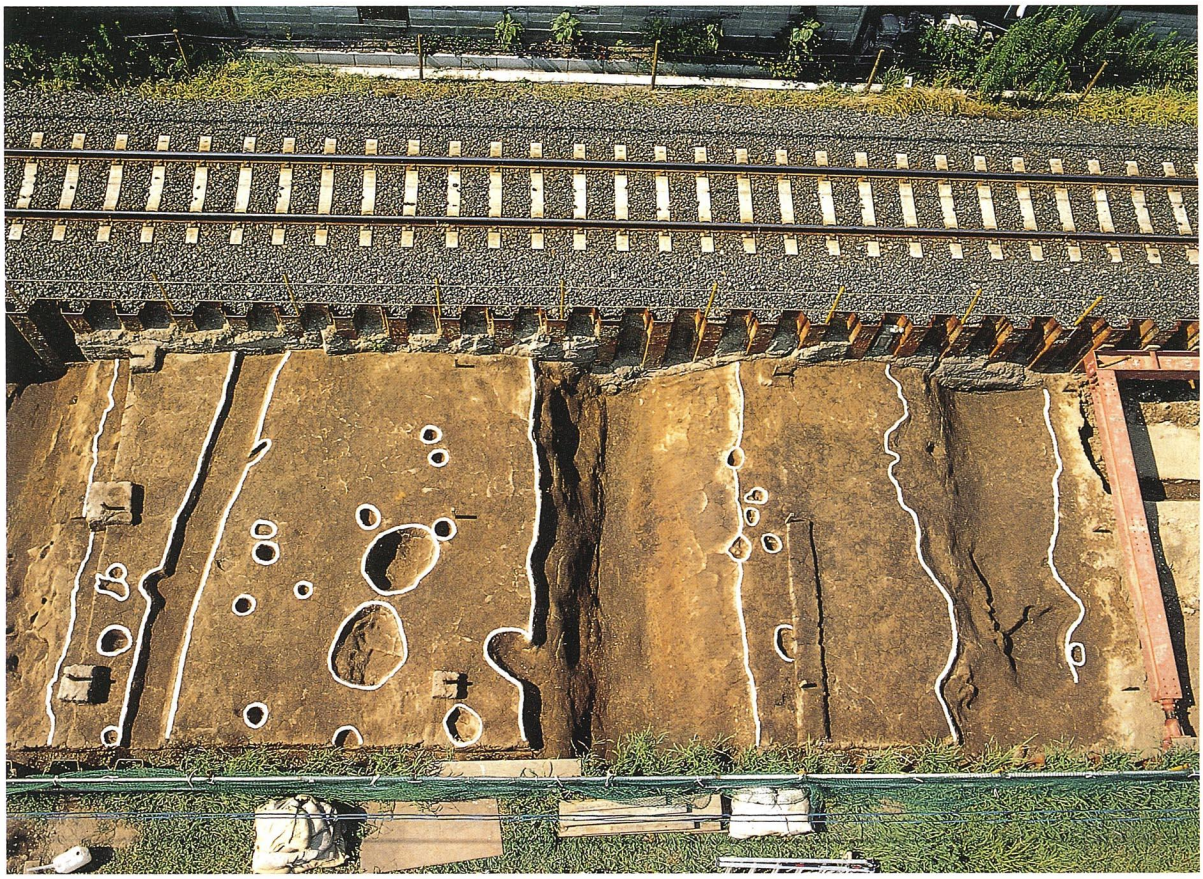
天神遺跡位置図

1997年3月

島根県出雲土木建築事務所
出雲市教育委員会

① 発掘調査区周辺空中写真

② B区遺構空中写真（写真左よりSD05、SD06、SD02、SK01、SK02）



③ B区遺構空中写真（写真左よりSD02、SK01、SK02、SD03、SD04）

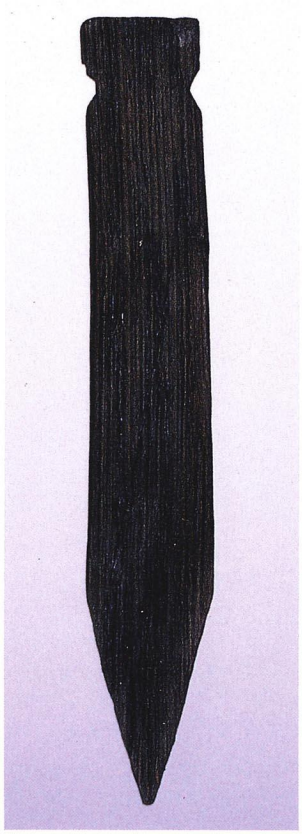
④　B区SD05断面

⑤　B区SD06遺物出土状況

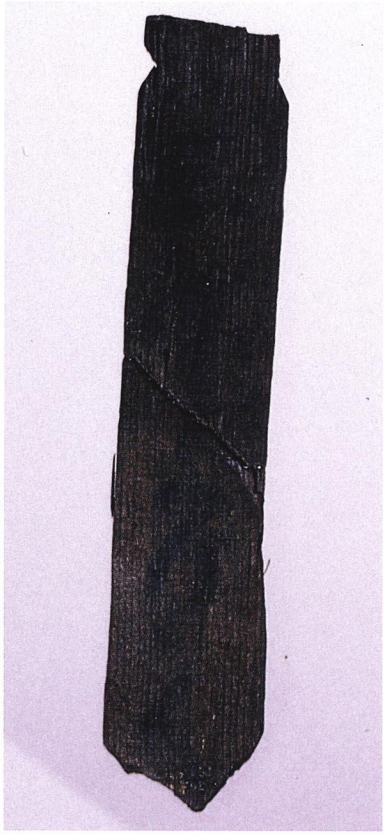
⑥　C区木製品出土状況

⑦　C区出土鍬未成品

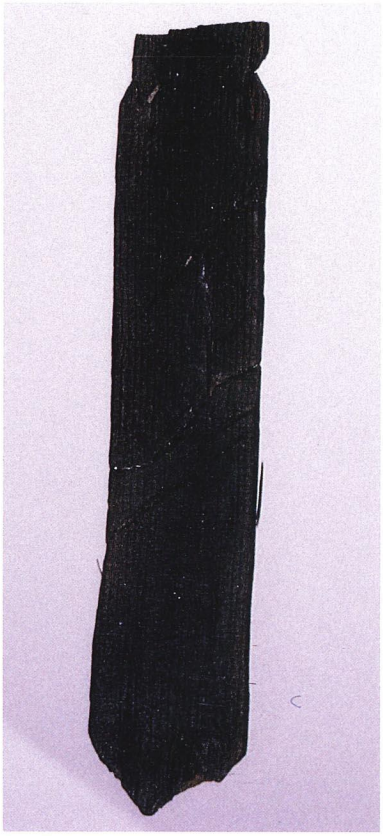
⑧　D区石敷遺構検出状況



⑨



⑩



⑪

D区出土墨書木札

はじめに

出雲市教育委員会では、平成６年度に出雲土木建築事務所の委託を受け、出雲市駅付近連続立体交差事業地内に所在する天神遺跡の発掘調査を実施致しました。

その結果、弥生時代から近世に至るまでの多数の遺構、遺物を検出し、この地域におけるひとびとのくらしを知る貴重な資料を得ることができました。

特に、弥生時代中期～古墳時代前期初頭の環濠と考えられる溝が４条確認されたことや、弥生時代の農耕具や食器などの木製品が出土したことは、報道機関にも大いに取り上げられました。本書はその報告書ですが、出雲平野の歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、今回の調査にあたり、ご協力を賜りました地元の皆様をはじめ関係各位に、衷心より御礼申し上げます。

平成９年３月

出雲市教育委員会

教育長　多　久　　博

例　　言

1．本書は、出雲土木建築事務所の委託を受けて、出雲市教育委員会が平成６年度に実施した天神遺跡発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、下記の期間において実施した。
平成６年（1995）５月16日～平成６年（1995）10月31日

3．発掘調査を行った地番は、次の通りである。
出雲市塩冶有原町３丁目38番地ほか

4．調査は、次の組織で行った。

平成６年度
〔調査指導者〕足立　克己（島根県教育委員会文化課文化財保護主事）、広江　耕史（同　主事）
〔事　務　局〕野津　建一（文化・スポーツ課長）、新宮　雅子（同　課長補佐）
〔調　査　員〕川上　稔　（文化・スポーツ課係長）、岸　道三（同　主事）
三原　一将（同　主事）、米田美江子（同　嘱託員）

平成７年度
〔調査指導員〕岩橋　孝典（島根県教育委員会文化課主事）
〔事　務　局〕野津　建一（文化・スポーツ課長）、新宮　雅子（同　課長補佐）
〔調　査　員〕川上　　稔（文化・スポーツ課係長）、岸　　道三（同　主事）
米田美江子（同　嘱託員）

平成８年度
〔調査指導員〕岩橋　孝典（島根県教育委員会文化財課主事）
〔事　務　局〕後藤　政司（文化振興課長）
〔調　査　員〕川上　　稔（文化振興課係長）、岸　　道三（同　主事）
高橋　智也（同　主事）、藤永　照隆（同　主事）、米田美江子（同　嘱託員）

5．本書で使用した遺構略号は次の通りである。
ＳＤ－溝、ＳＫ－土坑、Ｐ－ピット、ＳＸ－落ち込み状遺構

6．本書で使用した方位は磁北を示す。

7．本書に掲載した「試掘トレンチ位置図」、「発掘調査区及び位置図」は出雲土木建築事務所作成のものを浄写して使用した。

8．　本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

9．　本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸が大部分を行ったが一部については米田、川上、高橋、藤永が行った。なお、文責は目次に表記した。

10．本書の執筆はＡ区を米田、Ｂ、Ｃ区を岸、Ｄ区を川上が行い、編集は上記調査員の協力を得て岸が行った。

11．石器の石材鑑定については、山本　順三（文化振興課　副主任学芸員）が行った。

12．出土木製品の保存処理については、（財）元興寺文化財研究所、（株）吉田生物研究所に委託し、これを行った。

13．調査にあたっては、出雲土木建築事務所、ＪＲ工事事務所及びＪＲ出雲鉄道部から多大な協力を得た。

14．発掘調査及び遺物整理にあたり次の方々に御指導、御協力を賜った。

田中　義昭（島根大学法文学部教授）、徳岡　隆夫（島根大学理学部教授）
池田　満雄（島根考古学会会長）、山崎　純夫（福岡市教育委員会係長）
浅岡　俊夫（六甲山麓遺跡調査会）、西尾　克己（島根県教育委員会文化財課係長）
内田　律雄（島根県埋蔵文化財調査センター係長）、赤澤　秀則（鹿島町教育委員会主任主事）
岡　　宏三（島根県古代文化センター主事）、平石　　充（島根県古代文化センター主事）
守岡　正司（島根県埋蔵文化財調査センター主事）

15．発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。

佐藤　保信　　鐘推　蔵吉　　吾郷　要子　　米山　清司　　吉川　善美　　園山　　薫
岡　　省吉　　片山　　修　　前島　正喜　　奥田　広信　　高根　常代　　藤原　恒治
吹野　初子　　陶山　　潤　　吉田　　栄　　小玉　　勇　　中野　治夫　　井上　政司
安食　　勉　　荒木恵理子

16．遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事していただいた。

吹野　初子　　鵜口　令子　　遠藤　恭子　　飯國　陽子　　川谷　真弓　　太田　和子
荒木恵理子　　石川　桂子　　岡野　和栄　　岡　こずえ

本　文　目　次

Ⅰ　位置と環境 ……（岸）…… 1

Ⅱ　７次に亘る発掘調査 ……（岸）…… 3

Ⅲ　調査に至る経緯 ……（岸）…… 6

A　区（米田）

1．調査の概要 …… 9

2．遺構と遺物 …… 17

3．小　　結 …… 35

B　区（岸）

1．調査の概要 …… 45

2．遺構と遺物 …… 54

3．小　　結 …… 93

C　区（岸）

1．調査の概要 …… 95

2．遺構と遺物 …… 99

3．小　　結 …… 120

D　区（川上）

1．調査の概要 …… 121

2．遺構と遺物 …… 123

3．小　　結 …… 135

総　括 ……（岸）…… 138

考　察

天神遺跡出土の四分枝木製品 ……（岸）…… 139

天神遺跡出土木簡について ……（岡　宏三・平石　充）…… 145

図　版

A　区 …… 図版１～10

B　区 …… 図版11～32

C　区 …… 図版33～44

D　区 …… 図版45～60

挿　図　目　次

Ⅰ．位置と環境

第１図　天神遺跡周辺の遺跡 …… 1

Ⅱ．発掘調査と遺跡の範囲

第２図　天神遺跡の発掘調査例位置図 … 5

Ⅲ．調査に至る経緯

第３図　試掘トレンチ位置図 …… 6

第４図　発掘調査区及び位置図 …… 7

Ａ区の調査

第５図　Ａ区１～３Ｇｒ遺構平面図
及び土層断面図 …… 11・12

第６図　Ａ区４～６Ｇｒ遺構平面図
及び土層断面図 …… 13・14

第７図　Ａ区７～９Ｇｒ遺構平面図
及び土層断面図 …… 15・16

第８図　ＳＤ０１実測図 …… 17

第９図　ＳＤ０２実測図 …… 18

第10図　ＳＤ０２遺物実測図 …… 18

第11図　ＳＤ０３実測図 …… 19

第12図　ＳＤ０３（Ａ－３～７）及び
12層中（Ａ－8）出土遺物実測図 … 20

第13図　ＳＤ０４実測図 …… 21

第14図　ＳＤ０４出土遺物実測図 …… 21

第15図　ＳＤ０５実測図 …… 21

第16図　ＳＤ０５出土遺物実測図 …… 21

第17図　道状遺構実測図 …… 22

第18図　ＳＤ０６実測図 …… 22

第19図　ＳＤ０６出土遺物実測図 …… 22

第20図　ＳＤ０７・０８・０９実測図 …… 23

第21図　ＳＤ０７出土遺物実測図 …… 23

第22図　ＳＤ１０実測図 …… 24

第23図　ＳＤ１１実測図 …… 24

第24図　ＳＤ１２実測図 …… 24

第25図　ＳＤ１３実測図 …… 25

第26図　ＳＤ１４実測図 …… 25

第27図　ＳＤ１４出土遺物実測図 …… 25

第28図　大溝１実測図 …… 26

第29図　大溝１出土遺物実測図 …… 27

第30図　大溝２実測図 …… 29

第31図　大溝１出土遺物実測図 …… 28

第32図　ＳＤ１５実測図 …… 30

第33図　ＳＤ15（Ａ－25～31）及び土坑１
（Ａ－32）出土遺物実測図 …… 31

第34図　土坑１実測図 …… 31

第35図　弥生土器古式土師器実測図 …… 32

第36図　土師器実測図 …… 32

第37図　須恵器実測図 …… 33

第38図　陶磁器実測図 …… 34

第39図　石製品実測図 …… 34

Ｂ区の調査

第40図　Ｂ区遺構配置図（1）…… 47・48

第41図　Ｂ区遺構配置図（2）…… 49・50

第42図　Ｂ区遺構配置図（3）…… 51・52

第43図　東側砂層落ち込み部
セクション図 …… 53

第44図　ＳＤ０１実測図 …… 54

第45図　ＳＫ０４実測図 …… 55

第46図　ＳＫ０３実測図 …… 55

第47図　Ｐ２５実測図 …… 56

第48図　Ｐ２５出土遺物実測図 …… 56

第49図　ＳＤ０４出土遺物実測図 …… 56

第50図　ＳＤ０４実測図 …… 57

第51図　ＳＤ０６実測図 …… 59

第52図　ＳＤ０６遺物出土状況
実測図（上層） …… 60

第53図　ＳＤ０６遺物出土状況
実測図（中層） …… 61

第54図　ＳＤ０６遺物出土状況
実測図（下層） …… 62

第55図　ＳＤ０６出土遺物実測図（1）… 65
第56図　ＳＤ０６出土遺物実測図（2）… 66
第57図　ＳＤ０６出土遺物実測図（3）… 67
第58図　ＳＤ０６出土遺物実測図（4）… 68
第59図　ＳＤ０６出土遺物実測図（5）… 69
第60図　ＳＤ０６出土遺物実測図（6）… 70
第61図　ＳＤ０６出土遺物実測図（7）… 71
第62図　ＳＤ０６出土遺物実測図（8）… 72
第63図　ＳＤ０６出土遺物実測図（9）… 74
第64図　ＳＤ０６出土遺物実測図（10）… 75
第65図　ＳＤ０２実測図 …… 76
第66図　ＳＤ０２出土遺物実測図 …… 76
第67図　ＳＤ０３実測図 …… 77
第68図　ＳＤ０５実測図 …… 78
第69図　ＳＤ０５出土遺物実測図 …… 79
第70図　土塁状遺構セクション図 …… 80
第71図　ＳＫ０１実測図 …… 80
第72図　ＳＫ０１遺物出土状況実測図 … 81
第73図　ＳＫ０１出土遺物実測図 …… 81
第74図　ＳＫ０２実測図 …… 82
第75図　ＳＫ０２遺物出土状況実測図 … 83
第76図　Ｐ１７実測図 …… 83

Ｃ区の調査

第77図　用水路改設に伴う
　　立会調査遺構実測図 …… 96
第78図　Ｃ区堆積土層図 …… 97・98
第79図　ＳＤ０１実測図 …… 99
第80図　ＳＤ０１遺物出土状況実測図 … 100
第81図　黒色粘土中遺物出土状況
　　実測図 …… 101
第82図　黒色粘土中出土土器実測図 …… 102
第83図　木製品実測図（1）…… 105・106
第84図　木製品実測図（2）…… 107
第85図　木製品実測図（3）…… 108
第86図　木製品実測図（4）…… 109
第87図　木製品実測図（5）…… 110
第88図　木製品実測図（6）…… 111
第89図　木製品実測図（7）…… 113・114
第90図　木製品実測図（8）…… 115
第91図　Ｃ区遺構外出土遺物実測図 …… 116

Ｄ区の調査

調査区の概要

第92図　土層断面実測図
　　（Ｃ１－Ｃ８） …… 122
第93図　土層断面実測図
　　（Ｃ８－Ｃ10、Ｃ４南北） …… 123
第94図　畝状遺構実測図
　　（Ｃ１－Ｃ５） …… 124
第95図　畝状遺構（Ｃ５－Ｃ８）
　　道状遺構実測図 …… 125
第96図　道状遺構 …… 126
第97図　道状遺構断面実測図 …… 126
第98図　石敷遺構実測図 …… 127・128
第99図　石敷遺構出土遺物実測図 …… 129
第100図　墨書木札出土状況実測図 …… 130
第101図　墨書木札実測図 …… 131
第102図　Ｄ区出土土器実測図（1）…… 132
第103図　Ｄ区出土土器実測図（2）…… 133
第104図　その他の出土遺物（1）…… 134
第105図　その他の出土遺物（2）…… 134

考察

第106図　天神遺跡周辺の遺跡 …… 139
第107図　遺物出土状況実測図 …… 140
第108図　笠骨の型式分類 …… 141
第109図　蓋の骨組復元図 …… 141
第110図　天神遺跡出土四分枝
　　木製品実測図 …… 142
第111図　蓋の笠骨と考えられる
　　木製品の出土分布図 …… 143
第112図　天神遺跡出土木簡実測図 …… 146

Ⅰ　位置と環境

(1) 位　　置

天神遺跡は、出雲市天神町及び塩冶有原町を中心とする広範囲な地域に所在し、これまでの発掘調査によって、弥生時代中期中葉頃から近世に至るまでの大複合集落遺跡であることがわかっている。現在では、山陰屈指の規模を有する出雲平野のほぼ中央、ＪＲ出雲市駅から西方約１㎞ほど離れた地域に広がり、そのほとんどが宅地として利用されている。

出雲平野をとりまく地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海には、それぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野は、この二大河川によって形成された沖積平野となっている。

第１図　天神遺跡周辺の遺跡

1.天神遺跡　2.白枝荒神遺跡　3.小山遺跡　4.矢野遺跡　5.大塚古墳　6.石臼古墳　7.山持川川岸遺跡　8.鳶ヶ巣城跡　9.平林寺山古墳群
10.膳棚山古墳群　11.大寺古墳　12.荻杼古墓　13.斐伊川鉄橋遺跡　14.西谷墳墓群　15.大念寺古墳　16.塚山古墳　17.平家丸城跡
18.角田遺跡　19.神門寺境内廃寺　20.上塩冶築山古墳　21.築山遺跡　22.上塩冶横穴墓群　23.大井谷城跡　24.半分城跡　25.三田谷遺跡
26.小坂古墳　27.刈山古墳群　28.半分古墳　29.地蔵山古墳　30.栗栖城跡　31.放れ山古墳　32.大梶古墳　33.古志本郷遺跡
34.田畑遺跡　35.妙蓮寺山古墳　36.浄土寺山城跡　37.地蔵堂横穴墓群　38.宝塚古墳　39.福知寺横穴墓群　40.小浜山横穴墓群
41.知井宮多聞院遺跡　42.山地古墳　43.上長浜貝塚　44.正蓮寺周辺遺跡　45.出雲大社境内遺跡　46.原山遺跡　47.菱根遺跡

しかしながら、遺跡が形成され始めた頃の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川が、当時は西流して、『出雲国風土記』に記されているように入海のような状況を呈していた「神門水海（かむどのみづうみ）」と呼ばれる潟湖（現在の神西湖）に注いでいたようである。また、宍道湖の汀線も現在よりかなり西にあったものと考えられている。このような地形のもと、天神遺跡は入海の河口部に近い神戸川北岸の旧自然堤防上に立地していたと考えられ、少なくとも鎌倉時代の初期頃までは同様な景観であったと考えられる。

(2) 歴史的環境

出雲平野には、数多くの遺跡が存在している。中でも天神遺跡の所在する塩冶地区は、出雲市内でも最も埋蔵文化財の密集する地域となっている。神戸川右岸に形成され、南北に長く延びる旧自然堤防上には、神門寺付近遺跡、塩冶小学校付近遺跡、弓原遺跡、高西遺跡など、それぞれを区分するのが難しいほど連結して遺跡が密集している。

出雲平野における遺跡の初現は、平野の北にある縄文時代早期初頭の菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にあり、縄文時代早期末の上長浜貝塚に遡るが、これに続く遺跡は確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北には出雲大社境内遺跡や原山遺跡（大社町）が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷遺跡でも多量の遺物が出土し、生活の場となっていたことが近年の発掘調査によりわかってきている。また、平野中央部の矢野遺跡からも少量の遺物が発見されている。しかし、縄文時代における生活の場は主に平野の縁辺部にあり、狩猟・漁撈を中心として生活を営んでいた様子が窺える。

弥生時代には、矢野遺跡などで前期の遺物が確認されているが規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡をはじめとして、古志本郷遺跡、正蓮寺周辺遺跡、田畑遺跡などの大集落遺跡が出現する。その中には矢野遺跡、知井宮多聞院遺跡など、貝塚を伴う例もあり、地域的な特色となっている。なお、遺跡の拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。また、弥生時代後期には、四隅突出型墳丘墓７基を含む西谷墳墓群が南の丘陵上に築造される。この中には、突出部を入れると一辺60ｍもあるような３号墓など大形のものもあり、この時期には、ある程度共同体的結合が図られ、その首長の権力が強大になってきたことが窺える。

古墳時代になると、中期の遺跡や古墳は少ないが、後期後半には今市大念寺古墳、上塩冶築山古墳、地蔵山古墳など横穴式石室を有する大規模な古墳が築造される。また、南の丘陵斜面には上塩冶横穴墓群、小浜山横穴墓群など大規模な横穴群が築かれ、東部出雲の安来平野、意宇平野に並ぶ勢力が存在していたことが窺える。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内廃寺、長者原廃寺などの私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓、菅沢古墓などの初期火葬墓があり、いち早く仏教文化が取り入れられていたことが窺える。

また、奈良時代に編纂された『出雲国風土記』には、天神遺跡周辺の様子について、次のように記載されている。「或るは土地豊かに沃えて土穀・桑・稔り款枝に、百姓の膏腴の薗なり。或るは土地豊かに沃えて、草水叢り生ひたり。」というように、農業に適した豊かな肥沃地であったようである。

II　7次に亘る発掘調査

天神遺跡では、これまでに種々の開発に伴って7次、19ヵ所の発掘調査が行われている。（第2図）

(1)　海上地区土地区画整理事業に伴う発掘調査（第1次発掘調査、1971年）[1]

道路新設部分6ヵ所について行われた発掘調査である。第1調査地区では、柱穴を伴う竪穴遺構のほか、弥生時代中期後半の壺棺墓が検出されている。器高58cmを測る壺棺が、長さ約1.5m、深さ約50cmの墓坑に横にして埋納されていた。第2調査地区では、弥生中期後半頃の溝状遺構が検出されており、短頸壺や鋸歯文のある石製紡錘車などが出土している。第3調査地区では、弥生時代中期後半頃の溝状遺構や古墳時代の土坑のほか、ピットなどを検出している。第4調査地区では、古墳時代後期以降と推定される溝状遺構が検出され、土師器高坏やまりなどが出土している。また、天神遺跡発見の端緒となった第5調査地区では、古墳時代後期の掘立柱建物跡と考えられる柱穴を10以上検出し、須恵器や土師器の壺などが出土している。第6調査地区では、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物跡3棟や溝状、棚状遺構などが検出されている。中でも奈良時代の掘立柱建物跡の柱穴は径約70cm、深さ約40cmを測る大形のものであり、付近で墨書土器が出土していることから、地方官衙跡（郡家、郷倉、駅など）の可能性が指摘されている。

(2)　島根医大教職員宿舎建設に伴う発掘調査（第2次発掘調査、1975年）[2]

官舎部分3ヵ所について発掘調査が行われている。第1調査区では、弥生時代中期中葉の土坑墓と推定される遺構を14基検出しているほか、弥生時代中期中葉から古墳時代後期にかけての溝状遺構などを検出している。溝状遺構の中には「コ」の字状を呈するものがあり、方形周溝墓としての可能性が指摘されている。また、第2調査区では、古墳時代後期から近世にかけての掘立柱建物跡6棟と溝状遺構4などを検出している。特に古墳時代後期頃にあたる掘立柱建物跡の柱穴は、径1m～1.2mと大形で、2間×4間の総柱となるものもふくまれており、1971年の調査を裏付けるように、郡衙など官衙跡的遺構である可能性を示唆している。また、これまで弥生中期の土器編年を前、後半に2区分していたのに対し、この調査で出土した土器などが契機となって、弥生時代中期を前葉、中葉、後葉に3区分できる貴重な資料となっている。

(3)　出雲考古学研究会による自主発掘調査（第3次発掘調査、1978年）[3]

天神遺跡周辺を開発の波から守るため、その性格を捉えることを目的とした発掘調査であり、天神天満宮南側の3ヵ所で行われている。Ｂ－1区では古墳時代中期と考えられる土器溜を検出し、土師器高坏、埦には赤色塗彩され、暗文が施されたものが多く、周囲から土製の勾玉や丸玉などが出土していることから、祭祀性の強い遺構と考えられている。また、平安時代頃と考えられる掘立柱建物跡の柱穴は、径80cm～1mに及ぶ大形のもので、同区から緑釉陶器が出土していることや1971年の調査時に隣接した畑地内から墨書土器が出土していることから考えて、官衙的な建物群の一部と解されている。Ａ－2区、Ａ－4区の調査では溝状遺構、ピットなどを検出しているが、時期、性格ともに不明とされている。なお、付近で出土した墨書土器は、この調査時に「旱天」と判読できることがわかっている。

(4) 建設省職員宿舎建設に伴う発掘調査（第4次発掘調査、1981年）[4]

職員宿舎の建物部分、約200㎡について発掘調査を行っている。遺構は、奈良時代のものと推定される掘立柱建物跡2棟や平安時代と推定される土坑、中世から近世にかけての溝状遺構などが検出されている。特に、中世の溝状遺構の中には、それぞれが方形に囲繞するものがあって、2棟以上の建物跡を溝によって区画していたものと推定されている。なお、出土遺物には、須恵器、土師器、古銭などがあるが、弥生土器は認められていない。

(5) 建設省新庁舎建設に伴う発掘調査（第5次発掘調査、1985年～1986年）[5]

庁舎部分、約300㎡について発掘調査が行われている。遺構は、弥生時代中期から中世にかけての溝状遺構や土坑状遺構が複雑な切り合い関係をもって検出されている。特に、弥生時代中期中葉の土坑墓と考えられる遺構には、管玉などの副葬品を有するものもあり、この地域における社会的階級を考えるうえで貴重な資料となっている。また、調査範囲が限られているため全容は不明であるが、平面形が方形を呈し、床面に側溝が認められる古墳時代後期の竪穴住居跡と考えられるような遺構が検出されており、この調査区周辺に、古墳時代後期の集落跡があることも想定されている。

(6) 塩冶地区遺跡分布調査による遺跡範囲確認調査（第6次発掘調査、1986年）[6]

国庫補助事業として5ヵ所のトレンチを設けて行った発掘調査である。第1トレンチでは、中世の溝状遺構やピットなどを検出している。第2トレンチでは、溝状遺構、土坑、ピットなどを検出しているが、弥生時代中期の溝状遺構の中には、多量の土器が出土し、断面がV字状を呈して集落を囲繞するような環濠の可能性が指摘されているものもある。また、弥生時代中期の遺構としては、土坑も検出されている。第3トレンチでは、溝状遺構、ピットなどが検出されている。遺構の多くは古墳時代後期から中世にかけてのものであるが、少量ながら弥生土器片も確認されている。また、第4トレンチでも、溝状遺構、ピット、落ち込み状遺構など多数の遺構を検出している。時期は奈良時代から近世にかけてのものと考えられている。

(7) 建設省宿舎新築に伴う発掘調査（第8次発掘調査、1994年）[7]

宿舎建物部分と駐車場部分約1,000㎡について発掘調査が行われている。遺構としては溝状遺構、土坑、ピットなどを検出している。時期は、古墳時代後期から近世に至るまでのものであるが、古墳時代後期の遺構は土坑墓1基のみである。なお、溝状遺構の中には、これまでの発掘調査によって指摘されていたように、建物を囲繞する可能性があるものも検出されている。

以上のように天神遺跡は、東西約450m、南北約600mの広範囲に及び、弥生時代中期中葉から近世に至るまでの長期間、連綿と集落が営まれていることが明らかになっている。しかし、遺構、遺物の出土状況から考えると、弥生時代の居住域は遺跡の北東部に集中している傾向にあり、奈良時代以降については、西部や南部に多く検出されている。各時期における生活の場が、複合している地域があるにしても、大局的にみると前述のように二極化していることは、今後も注視していく必要がある。

第２図　天神遺跡の発掘調査例位置図

1.建設省職員宿舎建設工事に伴う調査(1994) 2.出雲市駅付近立体交差事業に伴う調査(1994) 3.建設省新庁舎建築に伴う調査(1985～1986) 4.島根医大教職員宿舎建設に伴う調査(1975第1調査区) 5.(1975、第3調査区) 6.海上地区土地区画整理事業に伴う調査(1971、第1調査地区) 7.(1971、第2調査地区) 8.(1971、第4調査地区) 9.(1971、第3調査地区) 10.建設省職員宿舎建設に伴う調査(1981) 11.(1971、第6調査地区) 12.(1971、第5調査地区) 13.(1975、第2調査区) 14～17,19 塩冶地区遺跡詳細分布調査　18.出雲考古学研究会による調査(1978)

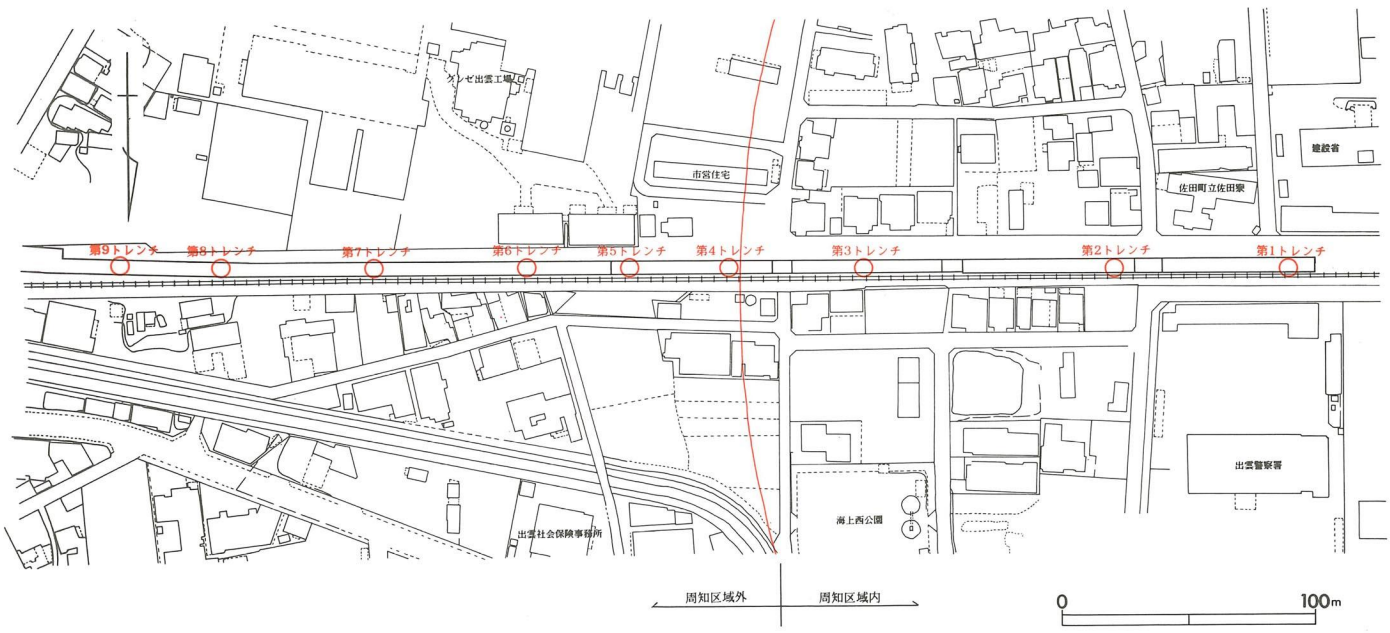
III　調査に至る経緯

平成５年（1993）11月22日、出雲土木建築事務所より出雲市駅付近連続立体調査事業に伴う埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地の一部には周知の遺跡である天神遺跡が含まれているとともに、遺跡の範囲がさらに広がりをもつ可能性があるため、試掘調査によって遺跡の範囲、遺構検出レベルの確認をすることとした。

試掘調査は、平成６年（1994）２月15日から４日間に亘り、周知範囲内に３ヵ所、範囲外に６ヶ所の計９ヵ所のトレンチを設定して行った（第３図）。その結果、周知範囲内のトレンチでは、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器などが検出された。また、周知範囲外に設定した第４、５、６トレンチからも土師器、須恵器、陶磁器などが出土した。しかし、さらに東側に設定した第７～９トレンチでは、遺物、遺構とも検出されなかった。

試掘調査の結果から、事業者である出雲土木建築事務所と出雲市教育委員会、島根県教育委員会の三者で協議を重ね、第１トレンチから第６トレンチに至る全長約270ｍの区間について発掘調査することで合意した。また、調査現場はすぐ北側に平行してＪＲ山陰本線が通っており、大変危険であること、工事の遅延が許されないことから、実際に工事を請負うＪＲ出雲工事事務所とも調査方法、期間などについて協議を重ねた。そして、列車往来時には作業を一時中止し、列車見張員を置くこと、調査期間は平成６年（1994）４月から同年10月までとすること、掘削が深くなる場合は切梁を設置することなどを確認した。

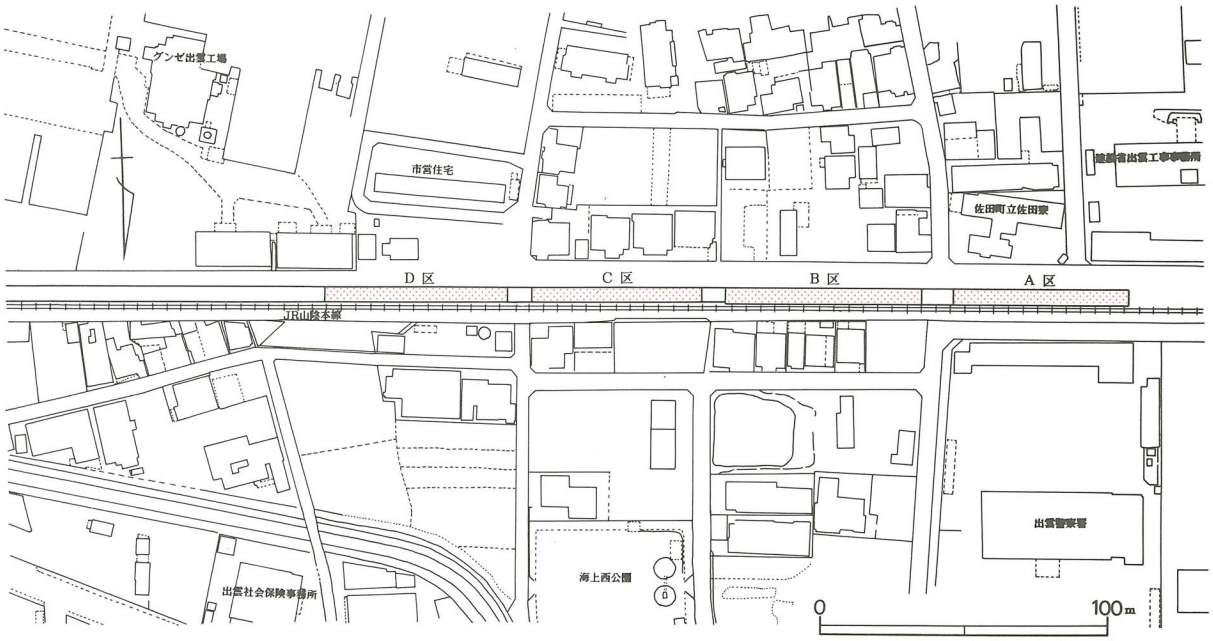
発掘調査に至る手続きについては、まず、埋蔵文化財発掘の通知（文化財保護法第57条の３）が事業者である出雲土木建築事務所から平成６年（1994）３月１日付で提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の通知（同法98条の２）を同年３月15日付で文化庁長官へ提出している。また、事故防止のため、同年５月11日付でＪＲ出雲鉄道部、出雲土木建築事務所、出雲市教



第３図　試掘トレンチ位置図

育委員会の三者で覚書を交わしている。

発掘調査は、平成６年４月から準備を進め、同年５月16日から開始した。区間は全長270ｍにも及ぶため踏切、用水路などで便宜上４区分し、西からそれぞれＡ区～Ｄ区とした（第４図）。また、工事の都合上、Ｂ区から着手し、続いてＣ、Ａ、Ｄ区の順に調査を進めていった。各区の調査面積はＡ区が幅6ｍ×45ｍの270㎡、Ｂ、Ｃ、Ｄ区が６ｍ×50ｍの300㎡であり、総面積は約1,200㎡である。調査地はかつて旧山陰本線が複線となって通っていた所であり、50㎝～80㎝の盛土がしてあったため、重機によって盛土を取り除き、排土した。その後、各区間の東西中央部に５ｍ間隔、南北に2.5ｍ間隔の2.5×５ｍのグリッドを設定したのち、発掘調査を進めていった。そして、猛暑とＡ区、Ｃ区については水処理に悩まされながらも、同年10月31日に調査を終了した。



第４図　発掘調査区及び位置図

註

(1)　「出雲市天神遺跡」　出雲市教育委員会　（1972年）
(2)　「天神遺跡」　出雲市教育委員会　（1977年）
(3)　「天神遺跡の諸問題」　出雲考古学研究会　（『古代出雲を考える』１　1979年）
(4)　「天神遺跡発掘調査報告書」　出雲市教育委員会　（1982年）
(5)　「天神遺跡発掘調査報告書Ⅳ」　出雲市教育委員会　（1986年）
(6)　「塩冶地区遺跡分布調査Ⅱ」　出雲市教育委員会　（1987年）
(7)　「天神遺跡第８次発掘調査報告書」　出雲市教育委員会　（1996年）

A　　区

A区の調査

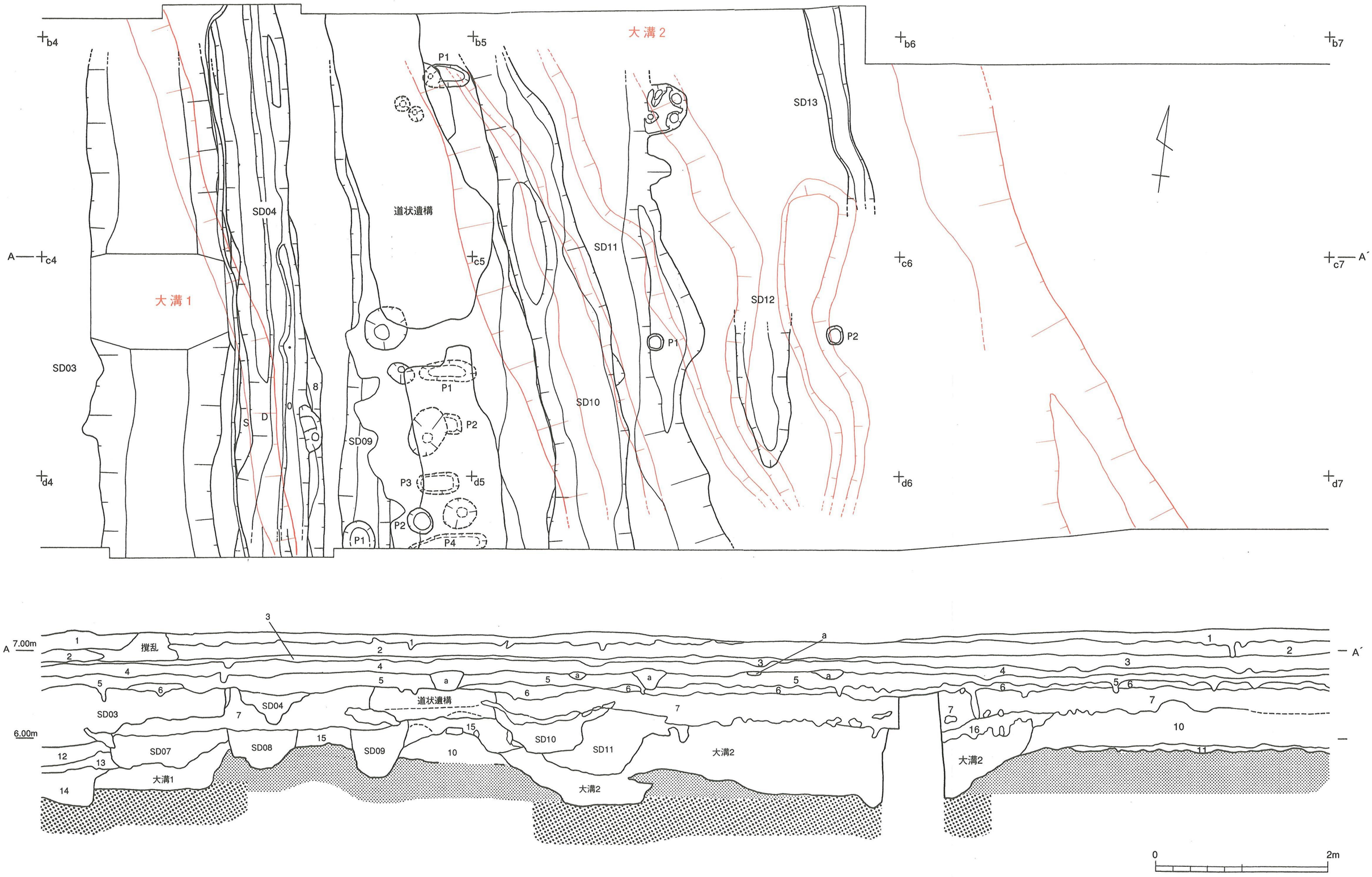
1．調査の概要

A区では、西10mから東にかけて何回かの削平を受けており、遺構面をその都度確認した。最下層には自然流路を利用したと思われるような大溝など弥生時代中期中葉から後葉にかけての大規模な遺構が検出された。次に7層下、5層下にて削平が行われ、それぞれ溝状遺構、柱穴跡などが確認された。柱穴跡は建物となりうるものは皆無であった。1～6層までは耕作土である。以下、上層の面単位に詳細を記載していく。

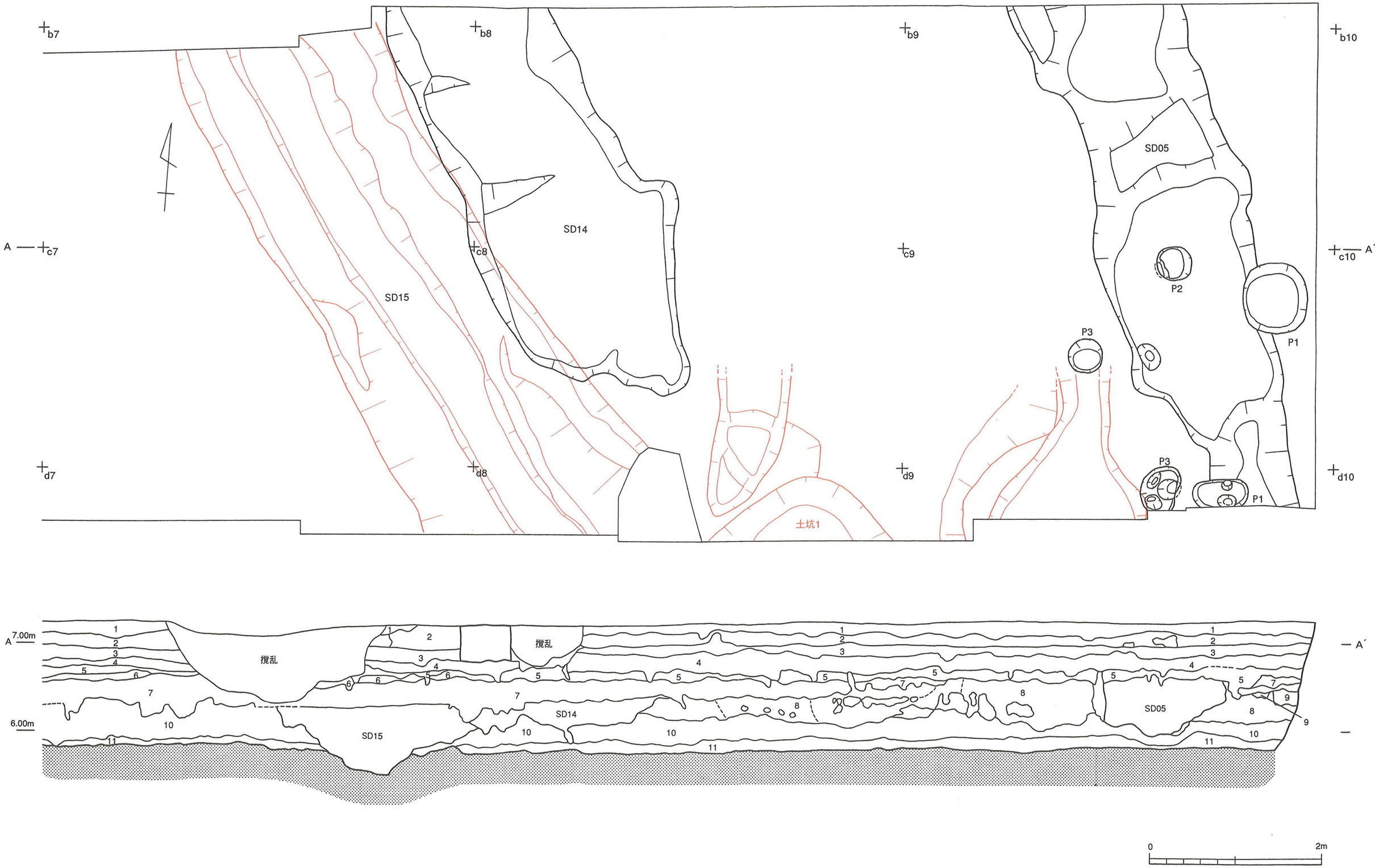
第5～7図土層断面図土色

1層　黄灰色土
2層　灰黄色土
3層　黄灰色土
4層　にぶい赤褐色土
5層　灰褐色土
6層　暗灰褐色土
7層　にぶい黄褐色土
8層　黄褐色土
9層　黄褐色砂質土
10層　青灰色砂
11層　にぶい黄色砂質土
12層　上層―にぶい黄橙色土　下層―黒褐色土
13層　橙色粘土
14層　黒灰色粘土
15層　暗黄褐色土
16層　灰黄褐色土
17層　黄灰色土
a層　明褐灰色土（後世の耕作溝）

第５図　Ａ区１～３Gr遺構平面図及び土層断面図（赤色は弥生時代遺構）



第6図　A区4～6Gr遺構平面図及び土層断面図（赤色は弥生時代遺構）



第7図　A区7～9Gr遺構平面図及び土層断面図（赤色は弥生時代遺構）

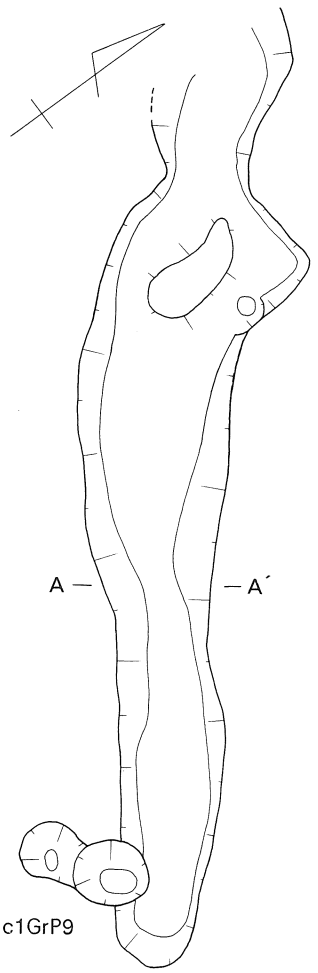
2．遺構と遺物

5層下確認遺構

SD01（第8図）

b・c－1Grで検出し、5層下8層に掘り込んでいる。幅0.5～1.0m、深さ0.09～0.24mでc1Gr内で立ち上がり、N－50°－W方向に延びている。

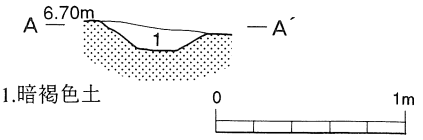
遺物は、土師器の破片が数点出土したのみである。



SD02（第9図、第10図）

a・b－1、c2Grで検出し、5層下8層に掘り込んでいる。幅0.4～0.9m、深さ0.09～0.28mでN－60°－W方向に延びている。西側では3又に分かれ東側はSD03へとおちていく。SD03との新旧関係は不明である。b1Gr内でSD02にほぼ直行するのは堅く締まったところであり道状の遺構の残骸ではないかと思われる。

A－1は白磁の碗の底部である。底部内面に上薬をとるかきとりをおこなっている。小片のため形を復元することはできなかったがSD03出土A－3とほぼ同時期のものである。A－2は弥生土器の底部破片と思われる。小片だけれど焼成後に穿孔している。内外面ともナデ調整で外面には布痕が残っている。その他弥生土器片、土師器片が数点出土している。



第8図　SD01実測図

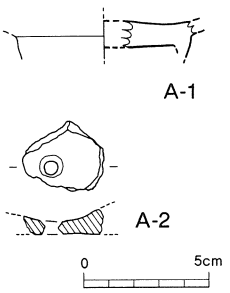
SD03（第11図、第12図）

a～d－2～4Grで検出し、5・6層の下7層に掘り込んでいる。幅7.8～9.0m、深さ0.4～0.5mを測る。西壁はN－35°－W方向に東壁はN－20°－W方向に延びている。またこの下に弥生時代の自然流路を利用した大溝があり、後世に地盤を強化するためか橙色と黒灰色の粘土を敷き固め、その上には少々しまった層が堆積している。

土師器杯（A－3・4）。A－3はほぼ完形で伏せた状態で出土した。底部糸切り痕で板の当たった痕跡が残っている。立ち上がりまっすぐで胴部でわずかに膨らみ口縁部は外反する。12世紀代に位置づけられよう[1]。A－4は底部片である。底部糸切り痕で立ち上がりがまっすぐであるがA－3に比して厚みがあり色調も暗いため安易に杯とは特定できない。時期は不明。

素焼きの擂鉢（A－5・6）。A－5は、口縁部片で端部はわずかにくぼみがあるが平坦に仕上げてあり断面矩形。口縁部付近はナデ調整のみであるが、以下は荒いハケ目のような擂目が施してある。外面は風化し剝落しているため調整は不明である。A－6は、片口部である。端部はわずかにくぼみのある平坦面で断面矩形、両側を固定して外側へ引き出して片口としている。口縁部はナデ調整であるが直ぐ下からは横方向の荒いハケ目のような擂目が施されている。外面は荒い縦方向のハケ目ののち、端部からヨコナデによりハケ目の上部を撫で消している。13世紀以降のものであろう。

Ａ－７は弥生中期中葉の壺の頸部である。頸部に刻目貼付突帯文が４条以上あり、２本１対の棒状の粘土紐を突帯の最下位からその上にかけて貼り付けてある。刻目には規則性はなく連続に刻んではいるが不揃いである。胴部はナデ調整のちに縦ハケ、のちに４～５本単位の沈線を１条突帯に平行させている。内面ナデ調整。この遺物は古い層からの混入品と思われる。その他土師器片、須恵器片、土鍋片、陶磁器片、唐津焼片など。



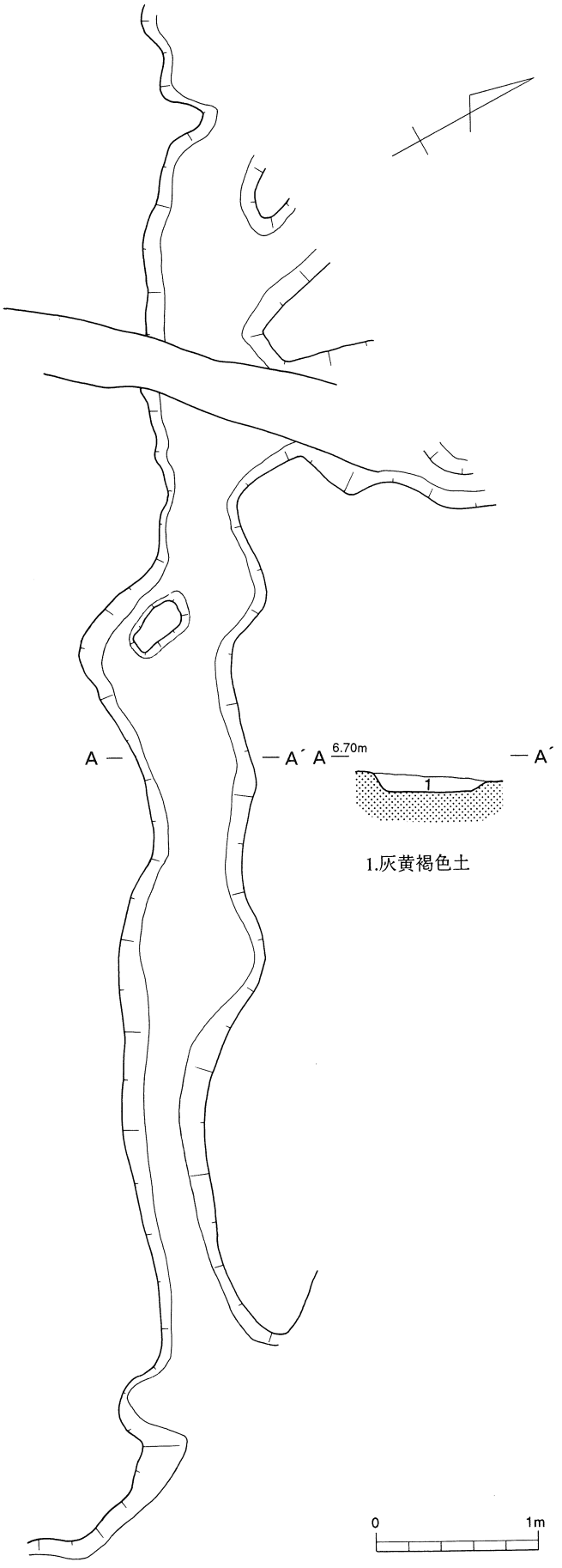
第10図
ＳＤ０２遺物実測図

SD03下12層中出土のＡ－８は土師器甕の口縁部片である。分厚い作りで胎土に砂粒子を多く含んでいる。頸部から外反して立ち上がり、内面は頸部以下ケズリのち頸部及び口縁部ナデ調整、外面は基本的にナデ調整であるが頸部に粘土の貼り付けた痕跡が厚めに残ったようでそれを削ったケズリ痕が残っている。

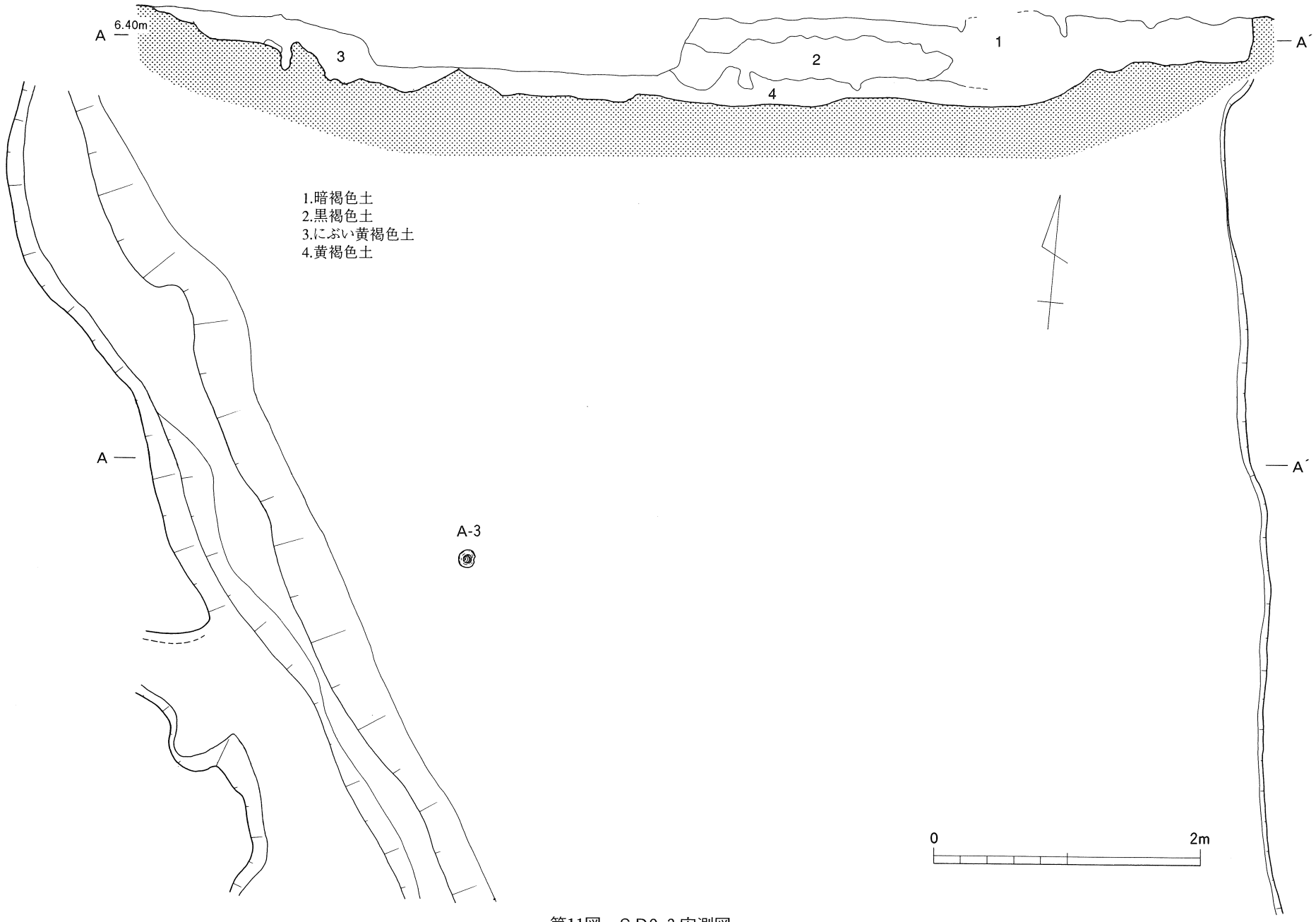
ＳＤ０４（第13図、第14図）

a～d－４Grで検出し、５層下７層に掘り込んでいる。幅0.9～1.1m、深さ0.33～0.38mを測り、Ｎ－10°－Ｗ方向へ延びている。

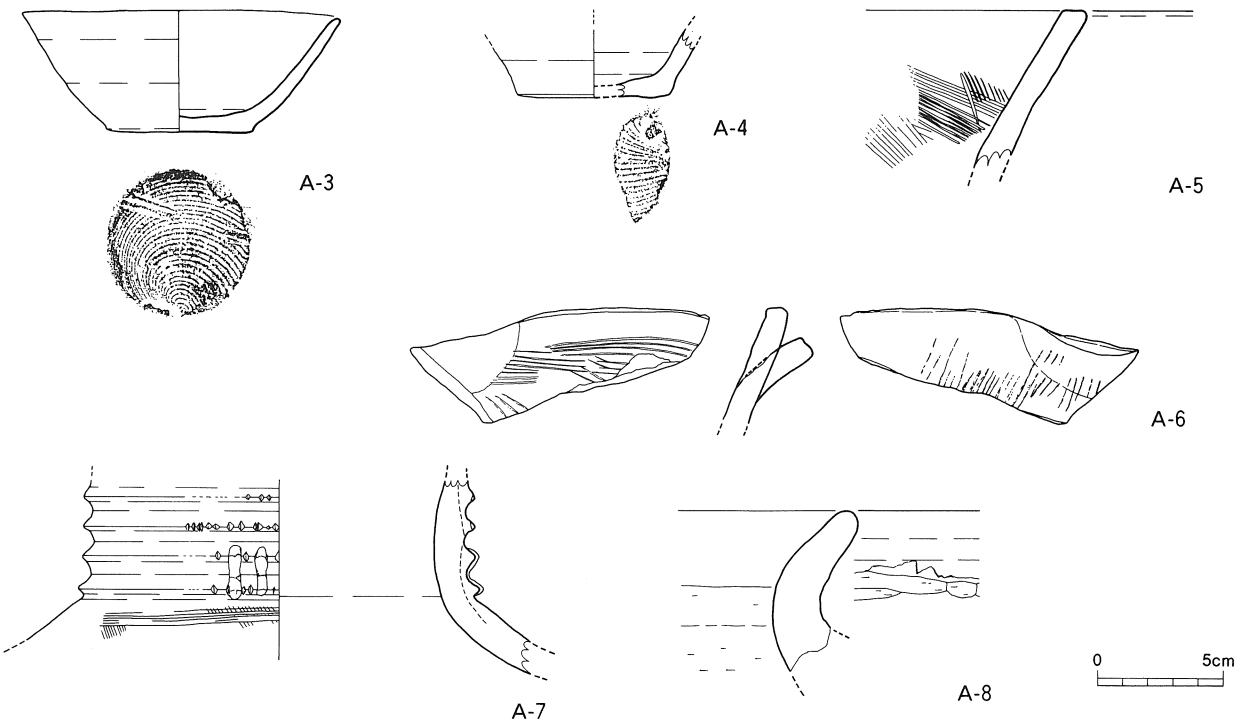
Ａ－９は暗灰緑色の釉のかかった唐津焼の皿の底部である。外面下半部にも上半部から垂れ下がった釉が観察できるが内面よりも明るい色調である。内面には重ね焼き時の砂目積痕が明瞭に残っている。高台が低く外径の稜線は不明瞭である。17世紀前半に位置付けられよう。その他土師器、須恵器の小片が数十点出土している。



第９図　ＳＤ０２実測図



第11図　ＳＤ０３実測図



第12図　ＳＤ０３（Ａ－３～７）及び12層中（Ａ－８）出土遺物実測図

ＳＤ０５（第15図、第16図）

a～d－９Grで検出し、５層下に掘り込んでいる。幅0.9～1.8m、深さ0.19～0.52mを測り、Ｎ－20°－W方向へ延びている。北方向に幅広く南方向に幅が狭くなっていくので南方向で立ち上がるかもしれない。また北端の下がった部分は土坑状を呈しているが性格は不明である。

Ａ－10は磨製の石製品である。石材は砂質の凝灰岩(2)で石鋸かもしれない。半分は欠損している。周縁もかなり剝落しているが、右側縁下方向の裏面への剝離痕は古そうなので一次使用時のものかもしれない。その他須恵器、弥生土器の破片が数十点、土師器片が数点出土している。

道状遺構（第17図）

a～d－４、c・d－５Grで検出し、５層下７層上面より検出した。周囲の堆積土に比べて白っぽくバリバリと締め固めたような範囲が幅0.9～1.5mで帯状にＮ－20°－W方向へ拡がっており、また土層の観察より0.4mの厚さを測った。人工的に締め固めたようなので道状遺構とした。

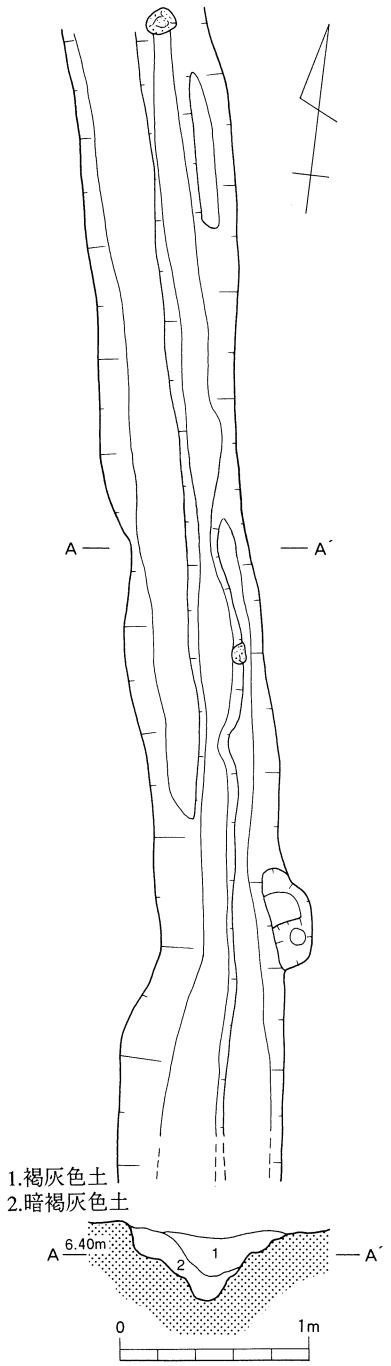
出土遺物は、土師器片、須恵器片数点のみであり、時期を決定するまでにいたらない。

７層下確認遺構

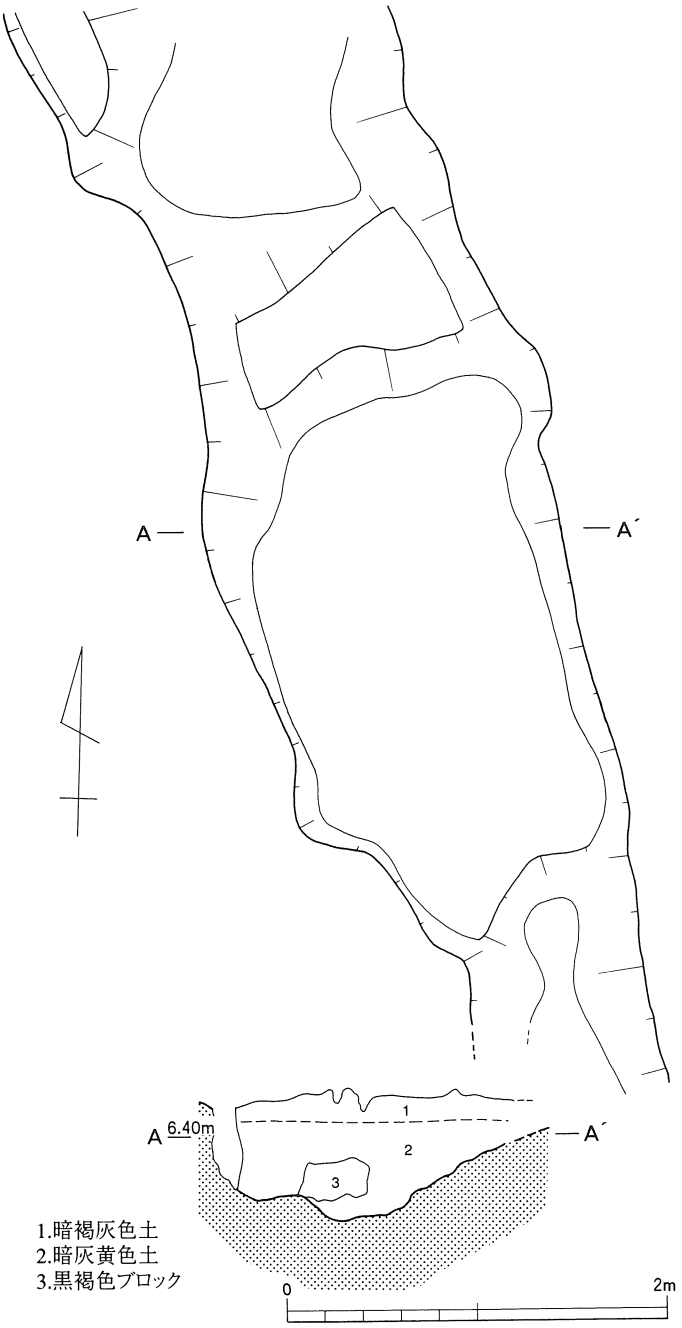
ＳＤ０６（第18図、第19図）

SD03を検出中にa～c－２、a～d－３Grで確認した。SD03の最下層から掘り込まれており履土がSD03の最下層とは違うため一応SD03とは別の遺構とした。幅1.7～1.9m、深さ0.37～0.52mを測りＮ－20°－W方向でSD03に平行しているため側溝のようにも見える。

Ａ－11は弥生中期中葉の甕口縁部片である。頸部から「く」の字に口縁部が曲がり端部は断面矩形

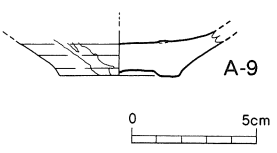


第13図　ＳＤ０４実測図

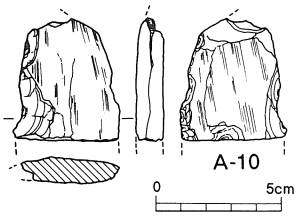


第15図　ＳＤ０５実測図

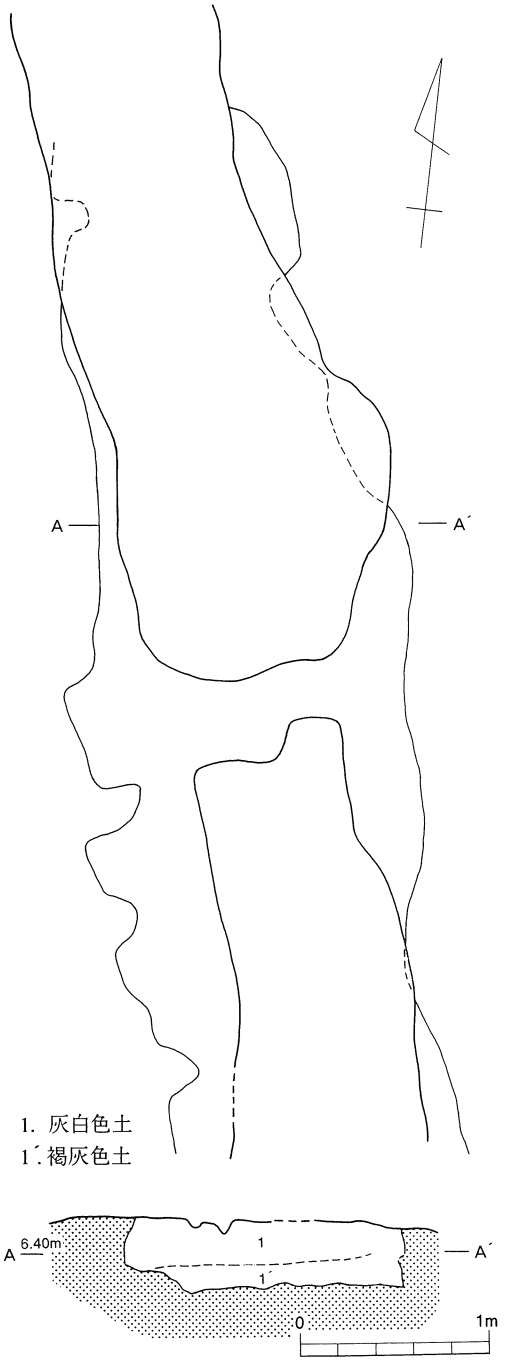
となっている。口縁端部が肥厚し始める直前のものと思われる。内面頸部は明瞭な稜線をなしており調整は現存内では全てナデ調整である。外面口縁端部から口縁２／３にかけて煤が付着している。その他弥生土器胴部片２点のみである。SD06の下には弥生中期の遺構があるためこの３点は全て弥生中期の遺構からの混入品で、SD06としての遺物は皆無である。



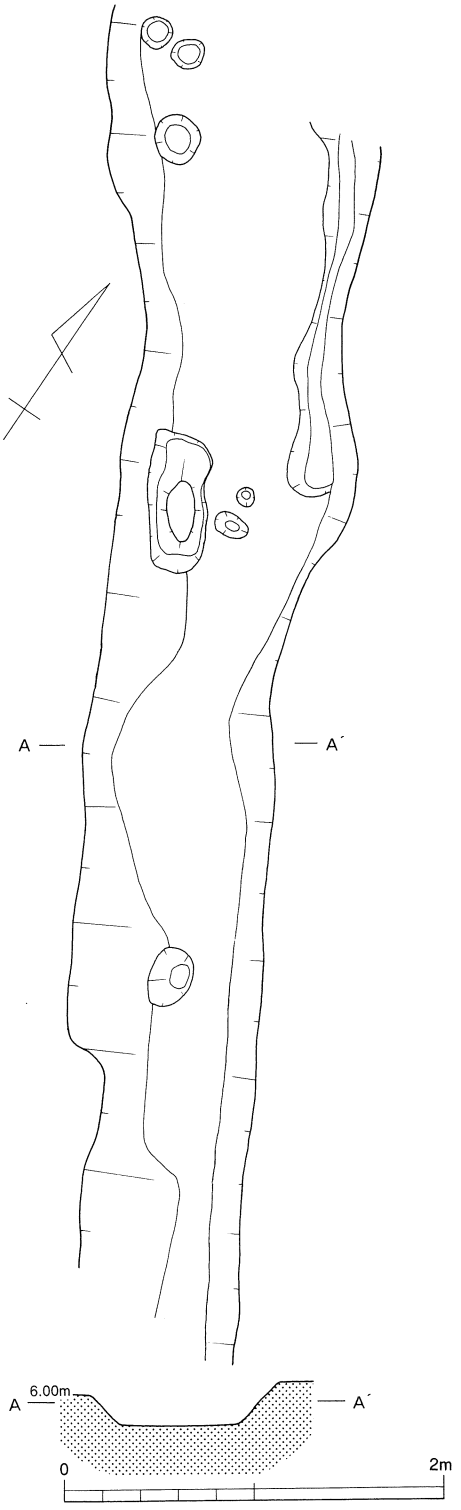
第14図
ＳＤ０４出土遺物実測図



第16図
ＳＤ０５出土遺物実測図



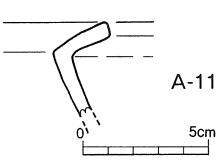
第17図　道状遺構実測図



第18図　ＳＤ０６実測図

ＳＤ０７・０８・０９（第20図、第21図）

b～d－４Gr内で３条の溝が接近して並走している。７層下で削平されているため３条の溝の新旧関係は不明瞭である。SD07は幅1.3～1.6m、深さ0.23～0.39mを測り、SD08は幅0.6～1.0m、深さ0.2～0.66mを測り、N－15°－W方向へ延びている。SD09は幅1.2～1.3m、深さ0.5～0.63mを測り、N－10°－W方向へ延びている。



第19図
ＳＤ０６出土遺物実測図

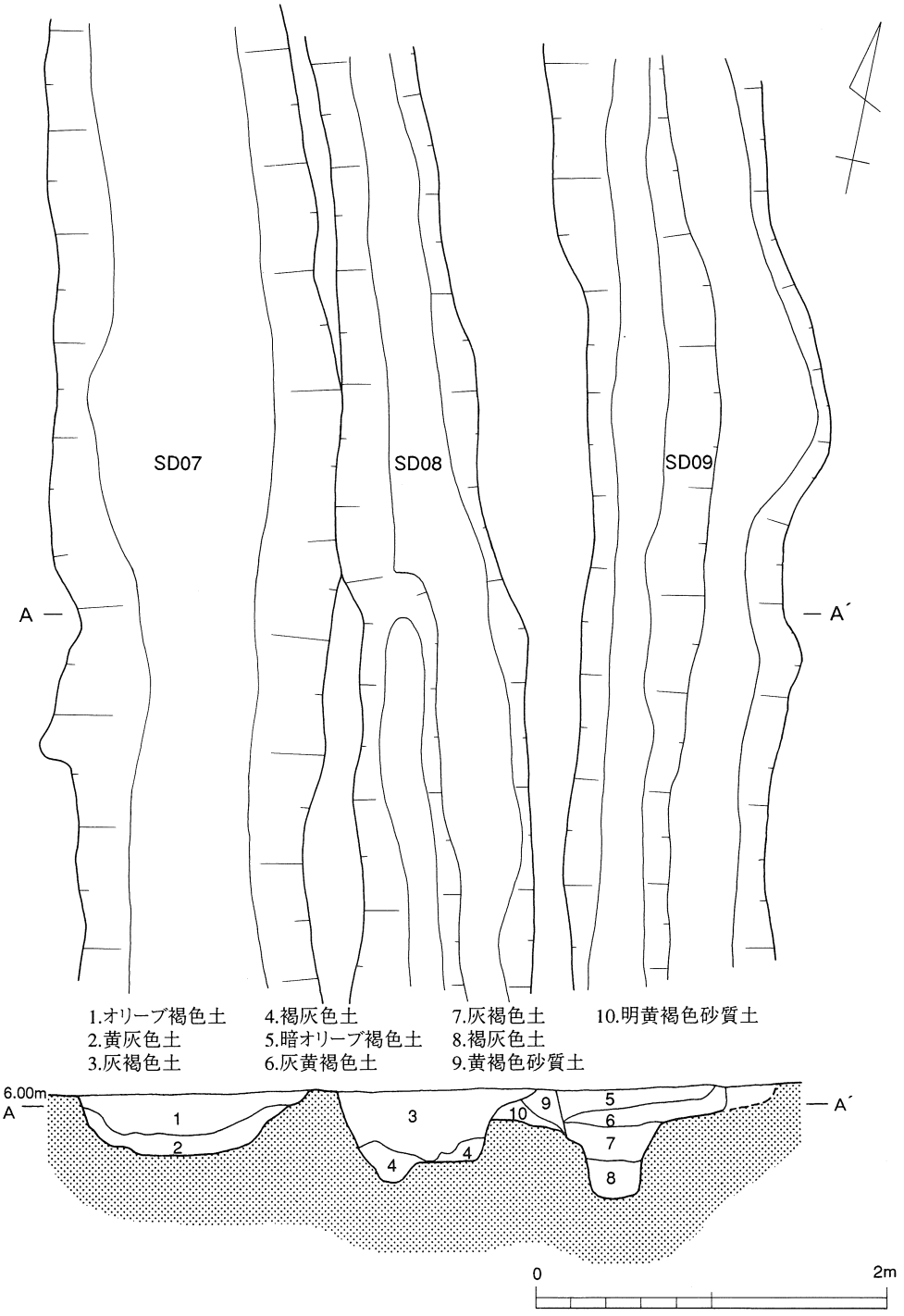
Ａ－12はSD07出土の須恵器の高台付杯の底部である。極低い高台に胴部が直立気味に立ち上がるものと思われる。底部は回転台から切り離したのちにヘラナデ調整（？）を加えているため切り離し方法は不明である。また底部には調整時のヘラ状工具痕が残っ

ている。その他須恵器、土師器、古式土師器の小片が出土したのみである。SD08・09の出土遺物もSD07同様小破片のみである。

SD10（第22図）

b～d－5Grで検出し、7層下より掘り込みSD11を切る。幅0.5～0.9m、深さ0.18～0.31mを測り、N－20°－W方向へ延びている。通し土層断面図より観察するとSD10の上面には堅くなった層がある。これは後世に地盤を強化するために締め固めたものであろう。

出土遺物は、土師器、須恵器の小片が十数点のみである。

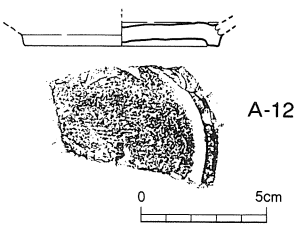


第20図　SD07・08・09実測図

SD11（第23図）

b～d－5Grで検出し、7層下に掘り込み西半分はSD10に切られている。幅1.6～1.9m、深さ0.36～0.5mを測り、N－20°－W方向へ延びている。

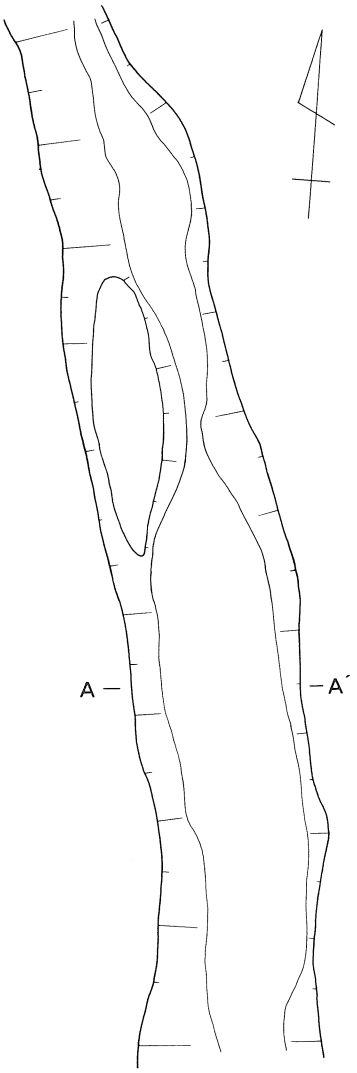
遺物は、土師器、須恵器、弥生土器の破片が数十点出土している。

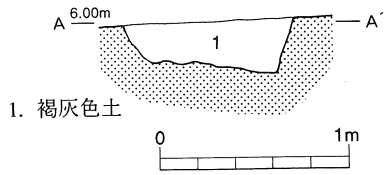


第21図
SD07出土遺物実測図

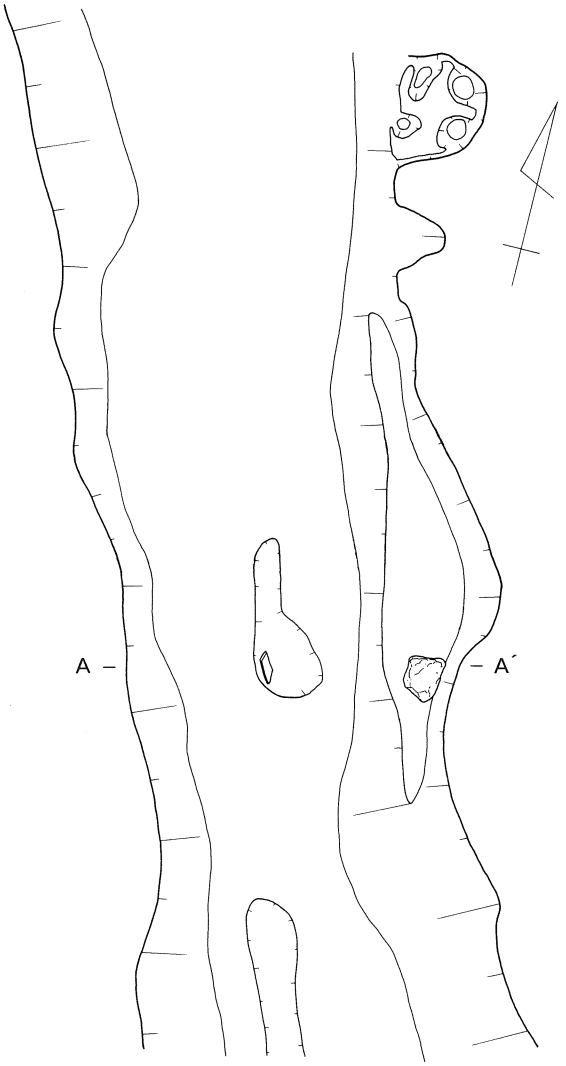
SD12（第24図）

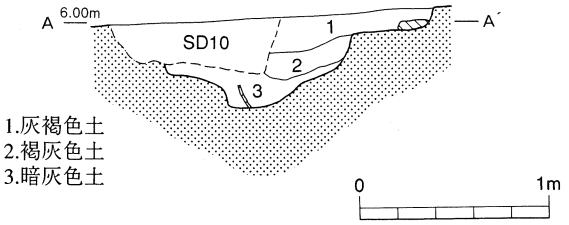
c5Grで検出し、7層下より掘り込んでいる。c5Gr内南方にて立ち上がりを確認したが北方のb5Gr内では確認できなかった。幅0.3～0.64m、深さ0.23mを測り、ほぼ南北方向へ延びている。



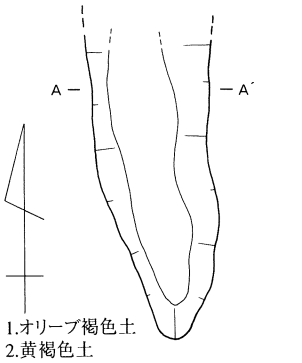


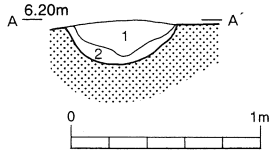
第22図　ＳＤ１０実測図





第23図　ＳＤ１１実測図





第24図　ＳＤ１２実測図

出土遺物は、弥生土器小片が２点のみであるが、SD12の下には弥生中期の遺構があるための混入品と思われる。SD12の遺物は皆無である。

ＳＤ１３（第25図）

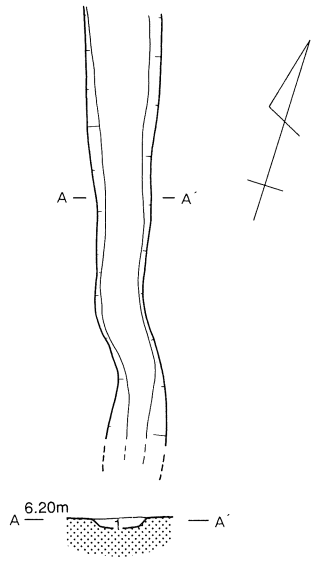
ａ・ｂ－５Ｇｒで検出し、７層下より掘り込んでいる。ａ・ｂ－５Ｇｒ内では確認できるが、ｃ５Ｇｒ内では確認できなかった。幅0.14～0.2m、深さ0.08mを測り、Ｎ－20°－Ｗ方向へ延びている。

出土遺物は皆無であった。

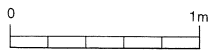
ＳＤ１４（第26図、第27図）

ａ・ｂ－８、ｂ～ｃ－９Ｇｒで検出し、７層下に掘り込んでいる。またSD15及び東側の遺構の覆土と思われる層を切っている。ｃ８Ｇｒ内で立ち上がるが、幅0.9～2.2m、深さ0.16～0.56mを測り、Ｎ－30°－Ｗ方向へ延びている。

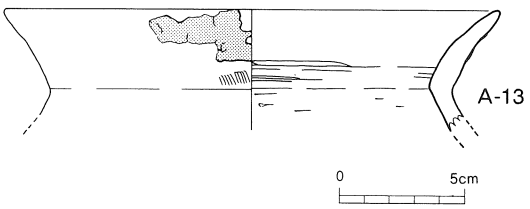
Ａ－13は土師器甕口縁部である。SD15出土の破片と接合したものであるがSD15としては上面での出土であるのでこのSD14からの混入品と思われる。頸部から外傾し1/3上位にてわずかに内湾させ立ち上がる。口縁部ナデ調整だが部分的にハケ目調整痕が残り、頸部以下内面はケズリ調整である。口縁部外面に煤が付着している。その他、土師器の破片を中心に須恵器片２点、弥生土器片が出土している。弥生土器はSD15のものと思われる。



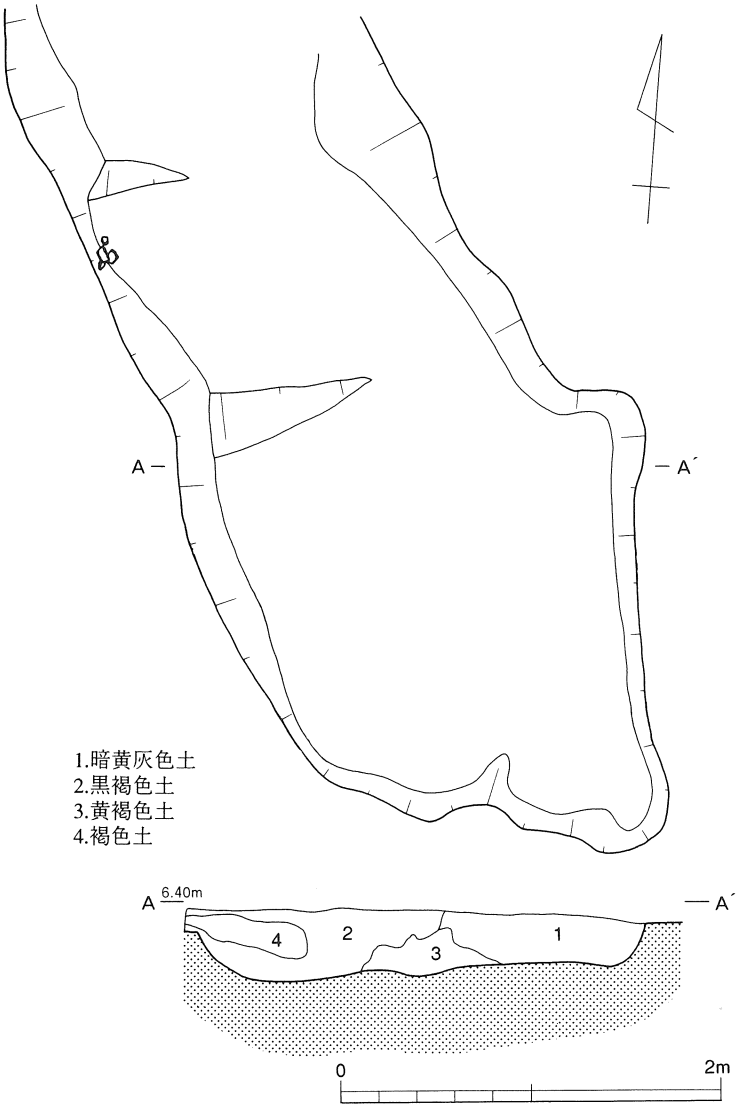
1.褐灰色土



第25図　ＳＤ１３実測図



第27図　ＳＤ１４出土遺物実測図



第26図　ＳＤ１４実測図

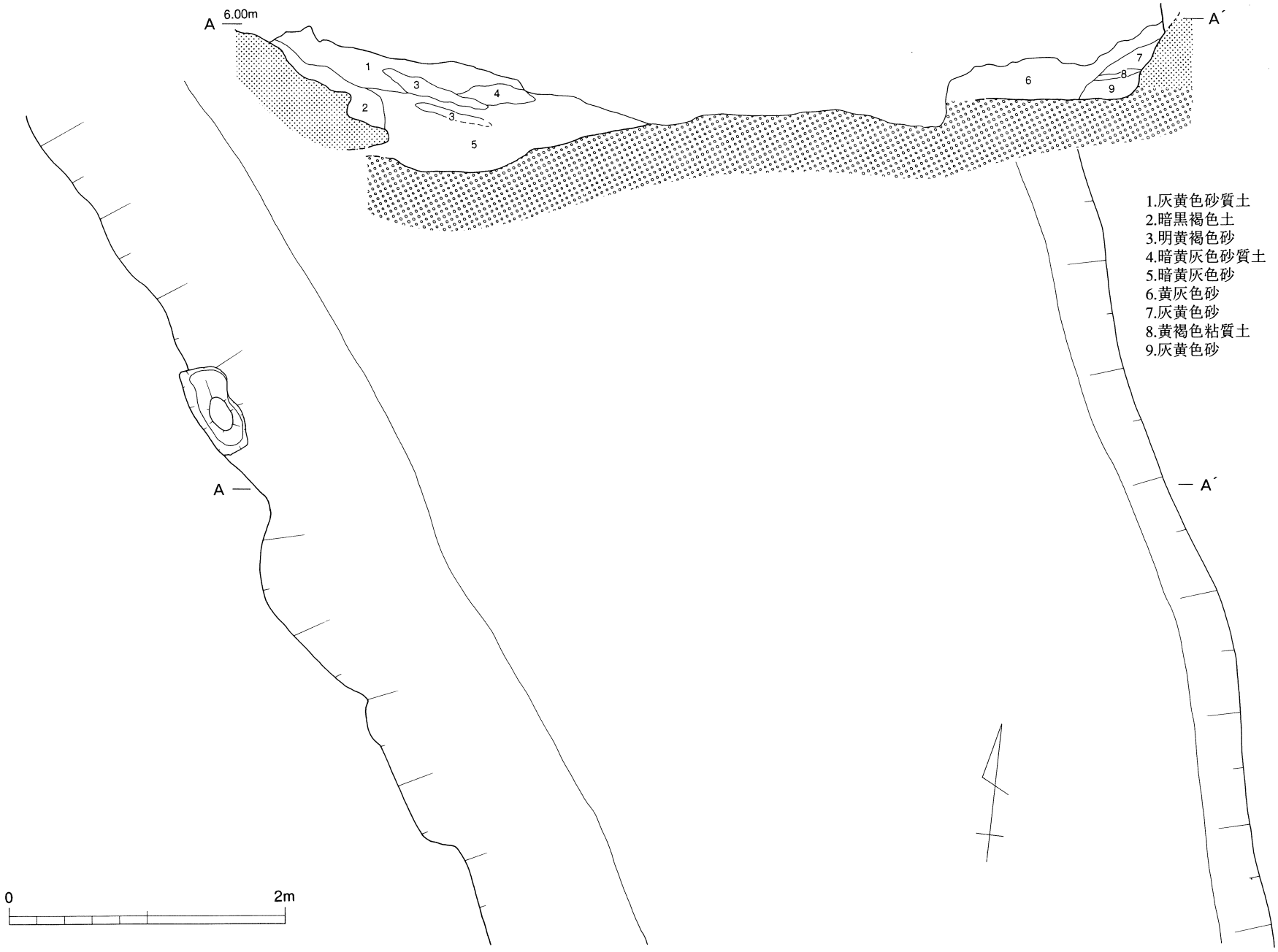
最下層の遺構

大溝１（第28図、第29図）

a・b－２、a～d－３・４Grで検出した。SD03、SD03下12層、13層、14層、SD06、07などに切られて両側の立ち上がりは不明だが、７層の下９層以下に掘り込んでいる。幅6.0m、深さ0.9mを測り、N－20°－Wの方向に延びSD03と並走している。大溝１の底部以下は地山のシルト質層を掘りきって荒砂まで到達している。この荒砂から弥生土器が集中的に出土しているので、大溝１はこの荒砂の自然流路を利用しており、また砂と粘質土が交互に堆積しているので、ある程度の流水状態であったと思われる。

弥生土器壺（Ａ－14・15・16)。Ａ－14は壺の頸部である。「ノ」の字の刻目のある貼付突帯文が４条ある。断面三角形の突出部はあまくなりわずかに丸味を帯びている。外面ナデ調整と思われる。内面頸部以上は横方向のミガキ、頸部以下は剝落しているため不明である。Ａ－15は広口壺の無文の口縁部である。端部はわずかに上下に肥厚している。内外面ともナデ調整と思われる。Ａ－16は口縁が単純に外反するものである。外面は胴部縦方向のハケ調整、以外はナデ調整、内面は不明である。

弥生土器甕（Ａ－17～22)。Ａ－17～19は頸部が「く」の字に屈曲し口縁端部断面矩形のものであ


A
6.00m
A´
1
2
3
4
3
5
6
7
8
9
1.灰黄色砂質土
2.暗黒褐色土
3.明黄褐色砂
4.暗黄灰色砂質土
5.暗黄灰色砂
6.黄灰色砂
7.灰黄色砂
8.黄褐色粘質土
9.灰黄色砂
A
A´
0
2m

第28図　大溝１実測図

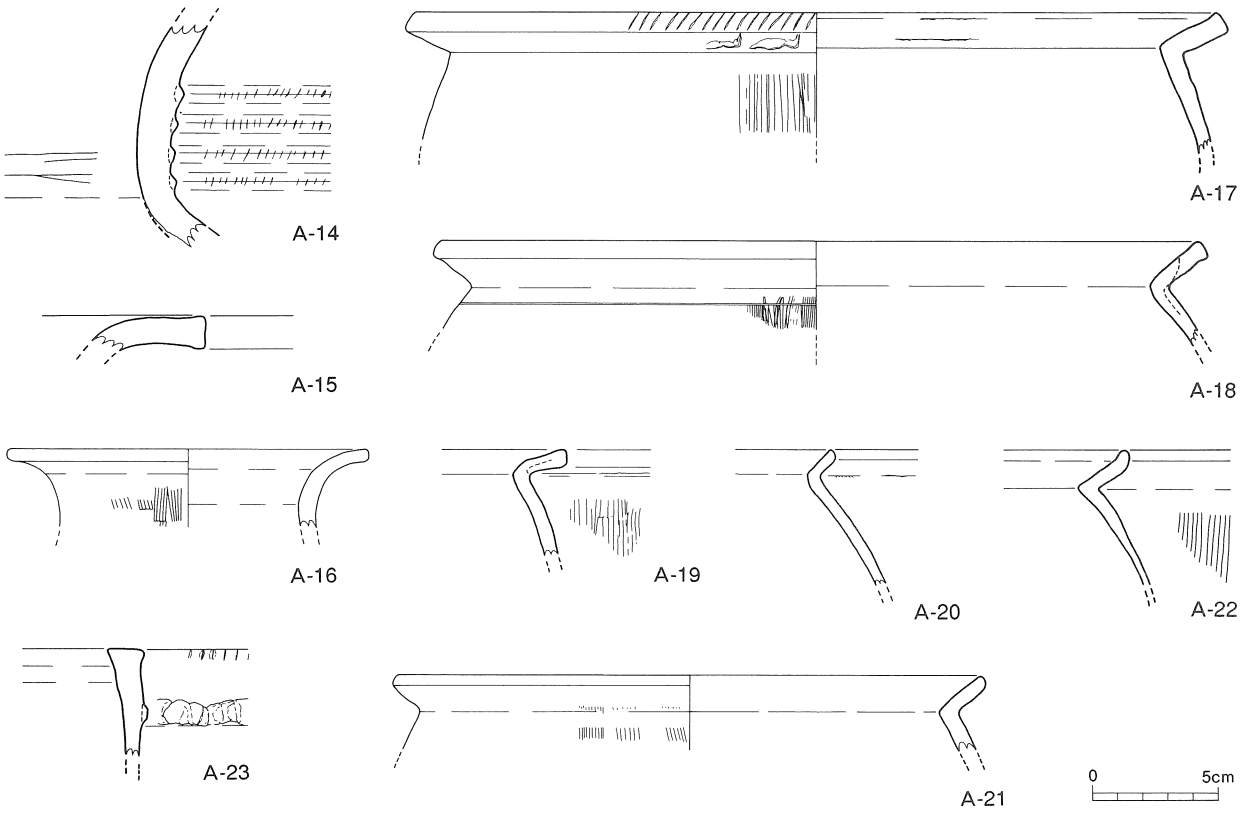
る。胴部外面縦方向のハケ調整、以外はナデ調整と思われる。Ａ－17はわずかに肥厚した端部平坦面にクシ状工具による刺突文が規則的に施されている。外面口縁部には連続２ケの左斜め上方から削りだし連続逆「Ｌ」字様のものが文様的に施されている。８㎝四方の土器片であるため連続的に施されている文様であるか不明である。Ａ－20～22は頸部が「く」の字に屈曲し口縁端部は心持ち上方へ引き上げている。胴部外面はＡ－20は不明だが他は縦方向のハケ調整、以外はナデ調整と思われる。Ａ－17～19よりも古てのものであろう。

Ａ－23は弥生土器鉢の口縁部である。ほぼ直立した胴部から口縁部に移行し、端部は内外に肥厚させ断面逆三角形の平坦面を呈し、口唇部に刻目を施している。また口縁部と胴部の境目に指頭圧痕文帯が施されている。

その他弥生中期中葉の土器片が数十点出土している。

大溝２（第30図、第31図）

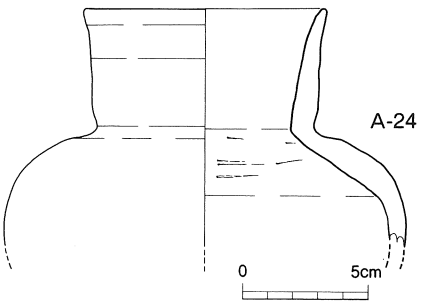
ｂ・ｃ－４、ｂ～ｄ－５・６Grで検出し、７層下９層に掘り込まれている。新しい遺構に切られているため西側の立ち上がりがはっきりしないが９層が自然に東側へ落ち込むところとしたい。大溝２の１層以下は全体に砂質土に変わり色調も灰色が強くなり白っぽくなってくる。また流水があったと思われるような粘質土の薄い層が互層状に入り込んでいる。地山としての９層、シルト質層を掘り込み、底部は荒砂まで達している。中央より西寄りに溝を２条に分けるようなステップ状の面があるため断面はW字状で、幅6.0～6.3m、深さ0.42～0.9mを測り、Ｎ－35°－Ｗ方向へ延びている。大溝１に



第29図　大溝１出土遺物実測図

ほぼ並行している。

Ａ－24は直口壺の上方部である。かなり張り出した胴部から頸部を明瞭に区別するため強いナデによりくびれさせ、そのままわずかに外傾させ外面には膨らみをもたせながら端部を引きのばす。胴部上半は張り出しのために分厚く作られている。外面、内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下胴部上位はケズリ調整である。外面及び内面口縁部には朱塗りが施されている。古墳時代初頭のものなので、大溝２の上位７層の混入品と思われる。その他は全て弥生土器破片であり、詳細な時期の判るものからすると弥生中期中葉から後葉と思われる。



第31図　大溝２出土遺物実測図

ＳＤ１５（第32図、第33図）

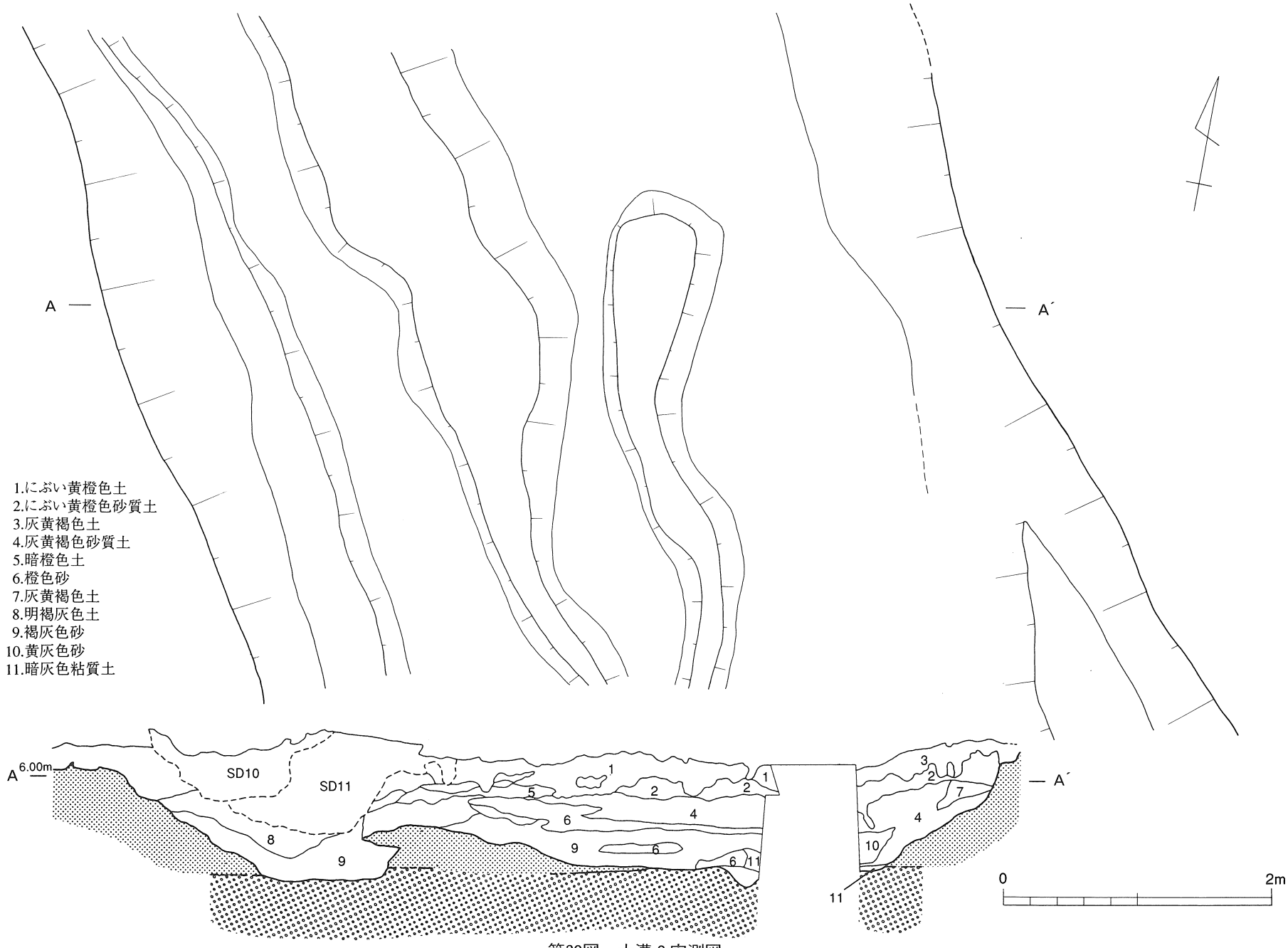
ｂ～ｄ－７・８Grで検出し、７層下９層に掘り込み、SD14に切られている。幅2.3～2.5m、深さ0.65～0.72mを測りＮ－30°－W方向へ延びている。断面は漏斗状を呈している。

Ａ－25は弥生土器壺の口縁部である。大溝２から出土した破片と接合した。外傾してのびる長めの頸部から口縁部に移行し、端部は肥厚し平坦面をつくる。断面の粘土紐の観察より、現状の断面厚さの半分位の粘土紐をのばし、口縁端部で平坦面を作りながら内側に折り曲げ頸部下位まで引き下げて貼り付けるという成形法をとっている。平坦面は無文であるが、口唇部に刻目文がある。頸部には断面三角形刻目貼付突帯文が４条施してある。外面頸部ナデ調整、頸部下で貼付突帯文直下縦ハケのちナデ調整、内面頸部ナデのち部分的に横ハケ調整である。Ａ－26は弥生土器甕口縁部でかなり薄手の器壁を有するものである。「く」の字に外反した口縁部から端部を上方向に引きのばし丸く納めている。Ａ－27・28はしっかりした平底の底部である。内面指押さえナデ調整、Ａ－28は外面胴部縦方向のヘラミガキのち底部近くにふたまわりのナデ調整を施し、底部はナデ調整。Ａ－29は脚部と思われる。外反気味の脚部に上向きに反った裾部がつく。外面指押さえで成形しナデ調整、内面脚部ケズリ、裾部ナデ調整。Ａ－30は一応磨石としておく。握りやすい球状の礫でほぼ全体に研磨痕あり。更に縁辺部には敲打痕があるので、擦り潰しと叩きの両方に使用されたものであろう。石材は変質細粒砂岩。Ａ－31は土師器甕の口縁部片である。分厚く短めの口縁部で、外面及び内面口縁部はナデ調整、内面頸部以下は荒いケズリ調整である。この遺物は上面よりの出土なので７層又はSD14からの混入品と思われる。その他弥生土器片ビニール袋１袋分出土している。

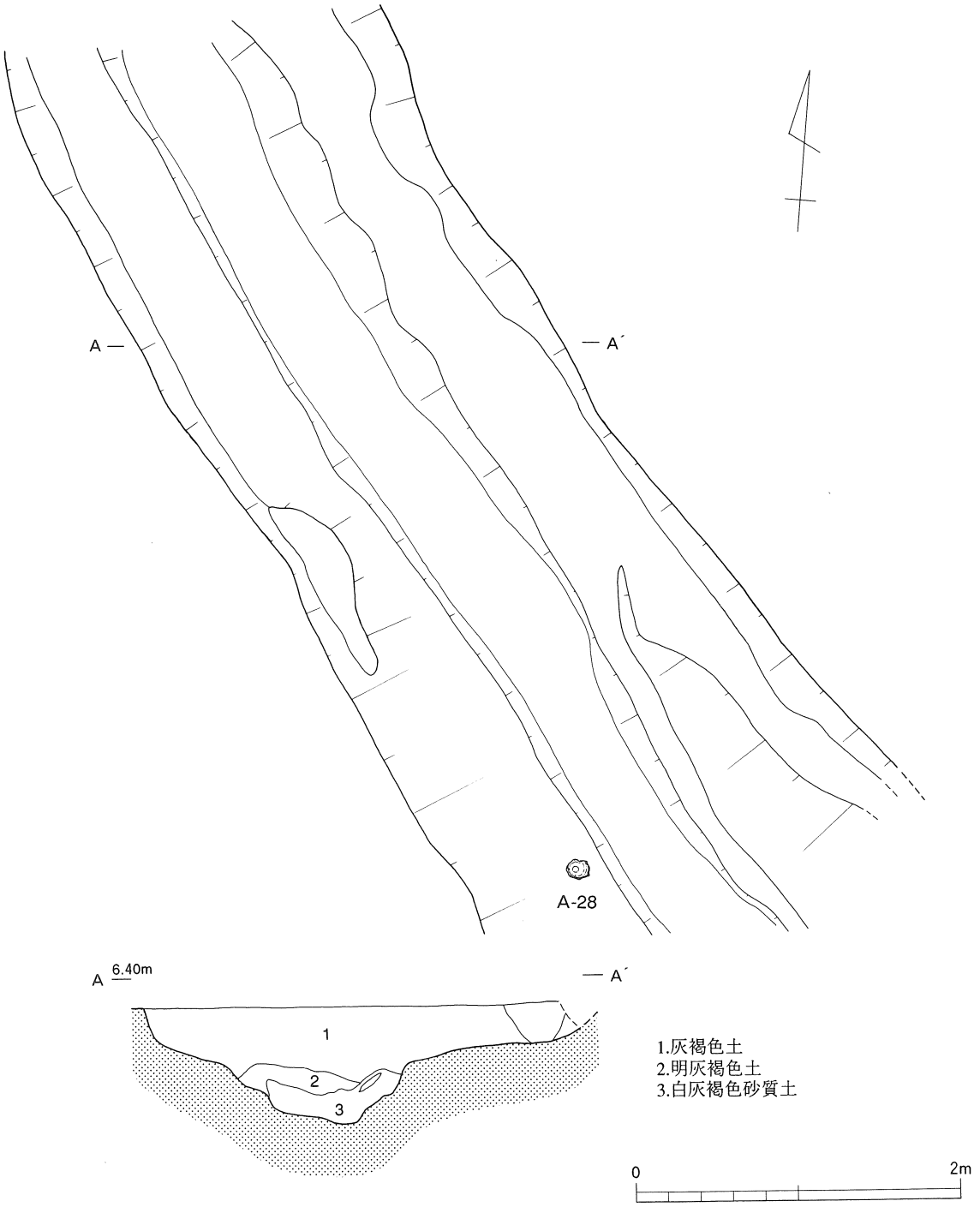
土坑１（第33図、第34図）

ｄ８Grで検出し、８層下より掘り込まれている。ほとんど調査区外へ拡がっていくが現状では径0.8×1.1m以上、深さ0.46mの楕円形であろう。性格は不明である。

Ａ－32は弥生土器壺の頸部であろう。はっきりとした断面三角形の貼付突帯文が現状で２条施してある。外面胴部縦ハケ調整、内面頸部及び胴部はナデ調整、頸部と胴部の境界付近はハケ目が部分的に残っている。その他、弥生土器片が数十点出土している。


A
A´
1.にぶい黄橙色土
2.にぶい黄橙色砂質土
3.灰黄褐色土
4.灰黄褐色砂質土
5.暗橙色土
6.橙色砂
7.灰黄褐色土
8.明褐灰色土
9.褐灰色砂
10.黄灰色砂
11.暗灰色粘質土
6.00m
SD10
SD11
0
2m

第30図　大溝２実測図



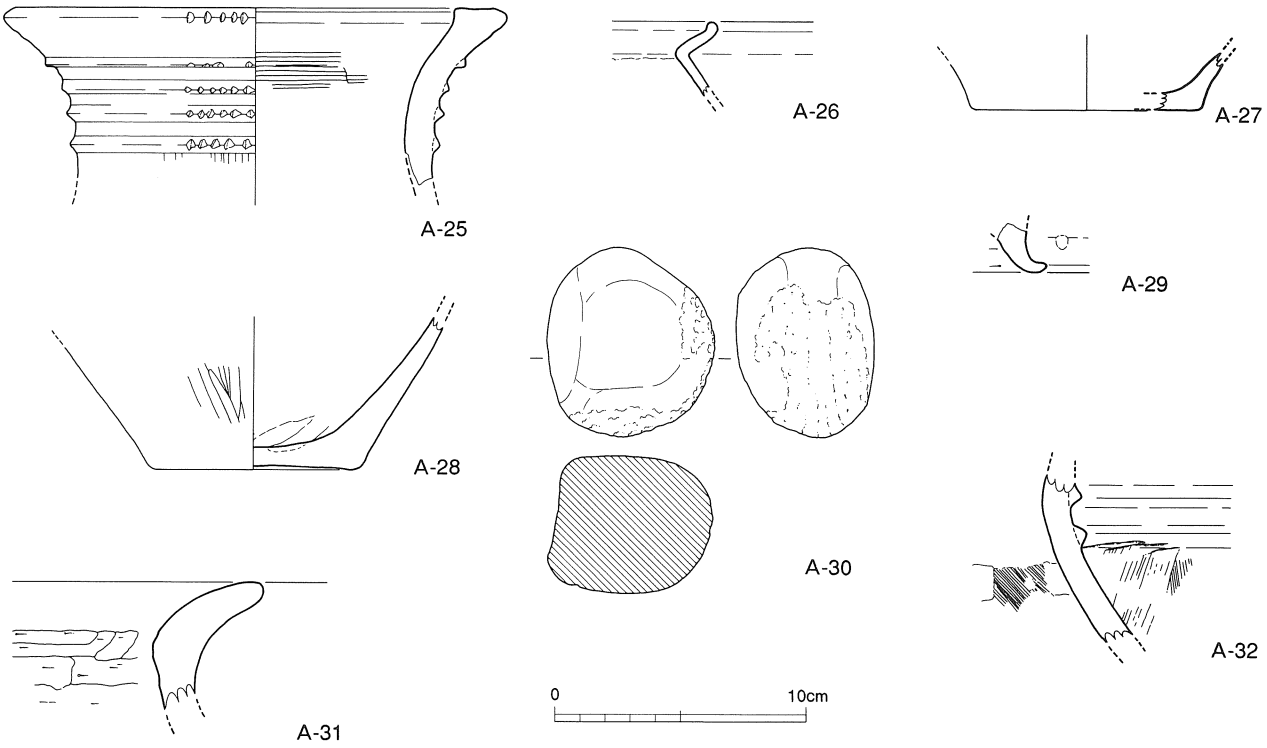
第32図　ＳＤ１５実測図

遺構外出土遺物

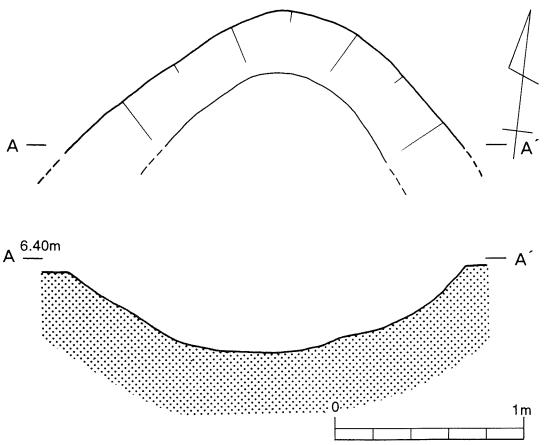
全体土層断面図の１～８層中より出土した遺物である。全層より各種類の遺物が出土しているので遺物の種類毎に記載していく。

弥生土器・古式土師器（第35図）

Ａ－33～36は弥生中期中葉の土器である。Ａ－33は壺の口縁部で、外傾してのびる長めの頸部から口縁部に移行し、端部は肥厚して平坦面をつくる。頸部には断面三角形刻目貼付突帯文が施され、上位３条は剝がれた痕跡があり下位１条のみ残っている。計４条以上であるが、これまでこのタイプの



第33図　ＳＤ１５（Ａ－25～31）及び土坑１（Ａ－32）出土遺物実測図



第34図　土坑１実測図

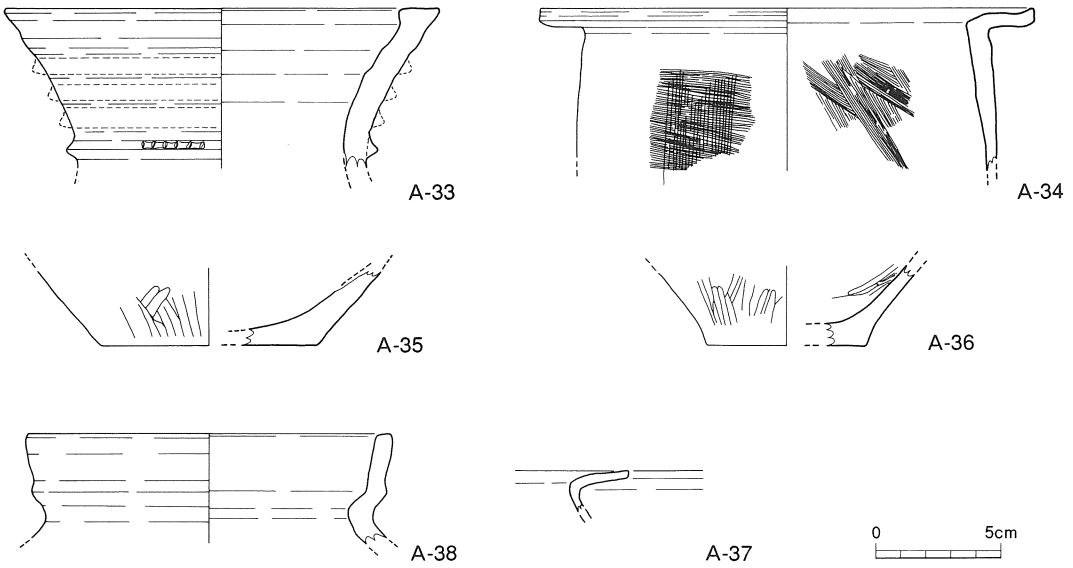
突帯文は４条より多くは施していないため４条が定則であったと思われる。内外面ともナデ調整であるが、内面は1.2㎜幅の強いナデ調整である。Ａ－34は甕の口縁部である。あまり張りのない胴部から「Ｌ」字状に屈曲した口縁部に移行する。端部はわずかに引きのばし気味におえている。頸部以上は内外面ともナデ調整、頸部以下は内外面ともハケ調整で、外面は格子状に内面は斜め縦方向にしている。Ａ－35・36は底部片である。平底で、外面底部以外はミガキ調整である。Ａ－37は甕の口縁部片である。頸部から「く」の字状に外傾している。内外面ともナデ調整。薄手で、焼成良好で断面が灰色となり堅緻なため、弥生中期中葉のものか古式土師器系統のものであるのか不明である。Ａ－38は複合口縁を残している古式土師器の壺の口縁部である。直立気味の立ち上がりから複合口縁を意識して上下の強いナデにより突出部を突出させ、端部は平坦に仕上げている。内外面ともナデ調整である。

土師器（第36図）

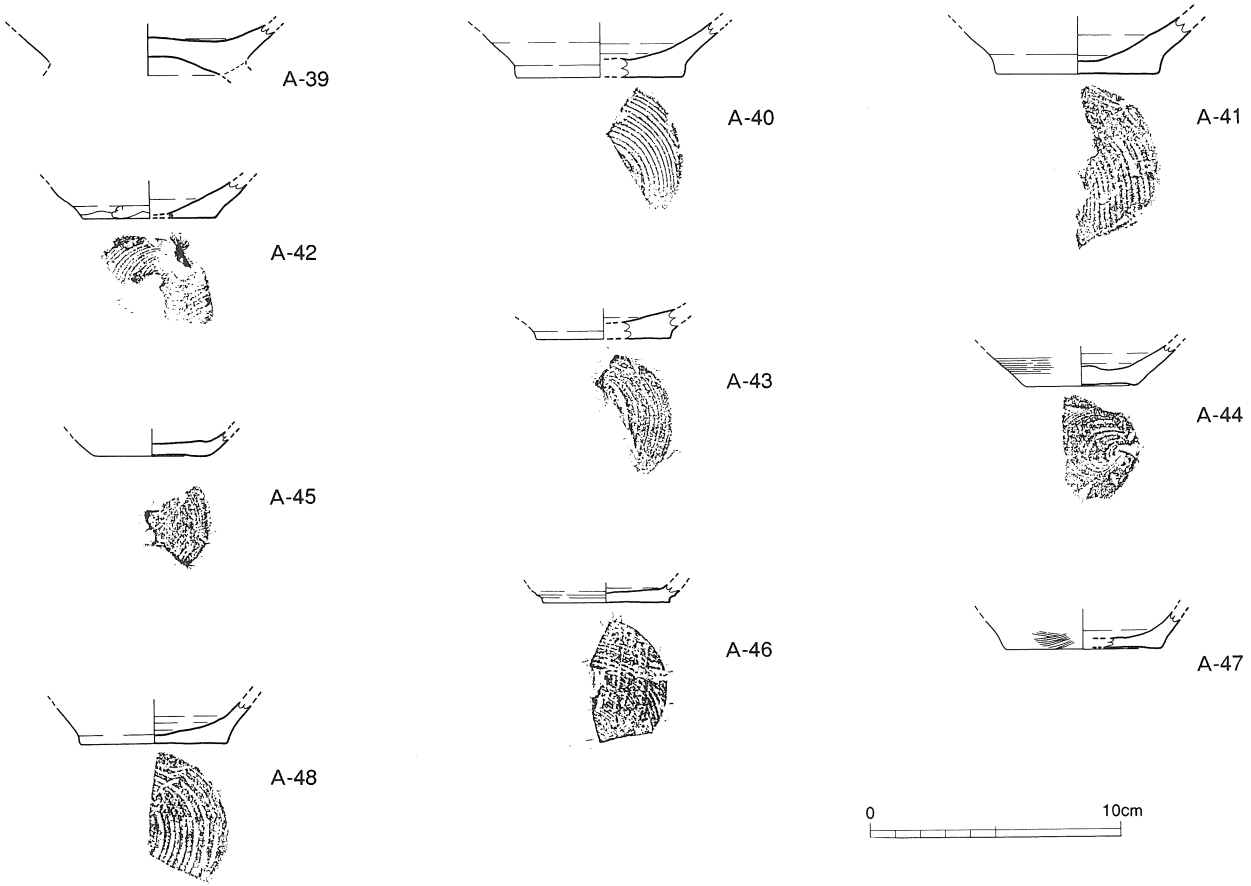
Ａ－39は脚部分が剝ぎ取れてしまっているが足高の高台の付いた杯である。全体に風化して磨滅がひどいが底部には糸切り痕がみえる。11世紀のものであろう。Ａ－40～48は底部静止及び回転糸切り痕のある杯の底部片である。小片であるため詳細は不明である。

須恵器（第37図）

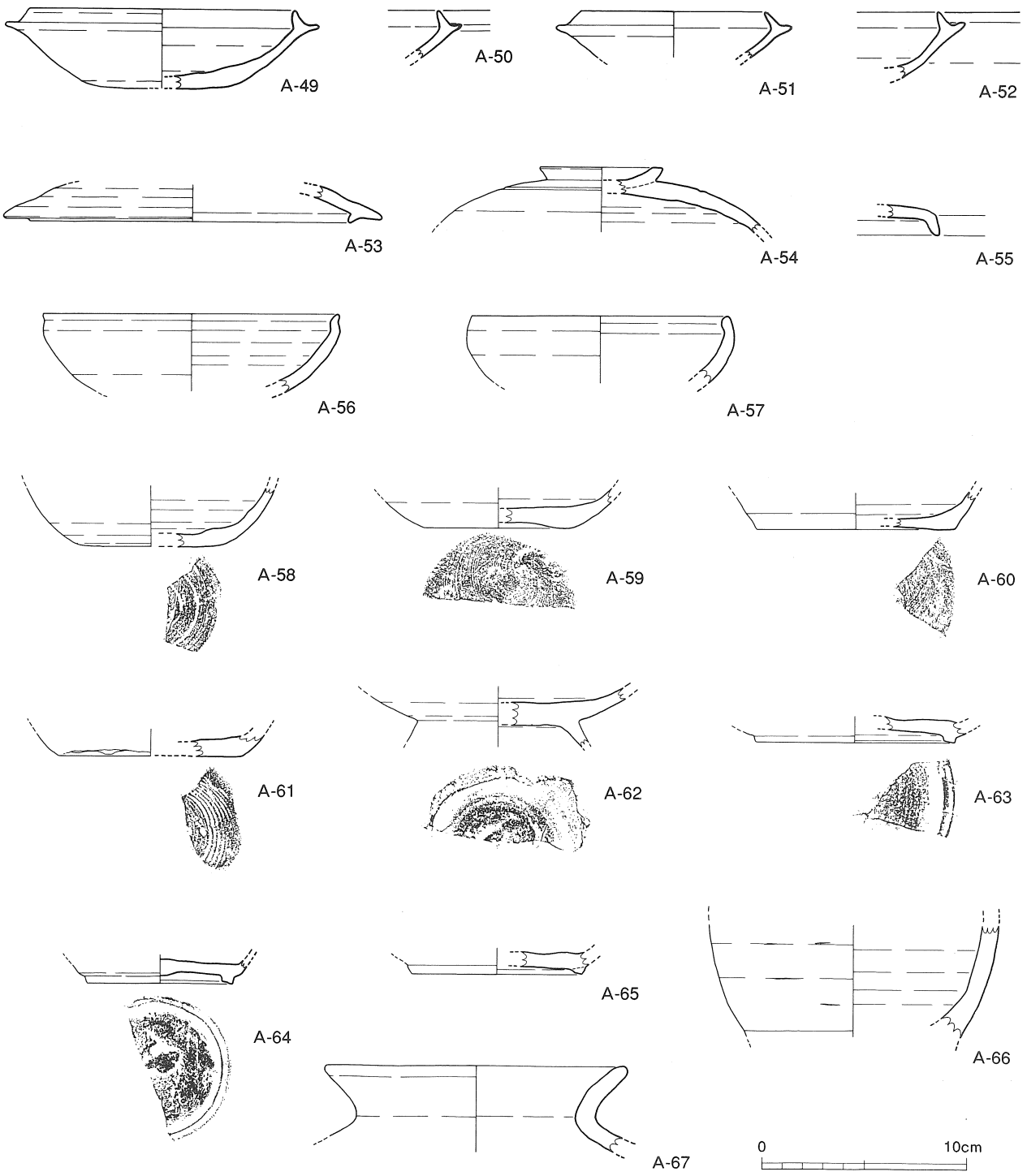
Ａ－49～52はかえりのつく杯身である。Ａ－49は器高が低くなり底部調整を省略する段階のものである。Ａ－51は口縁部の小片であるが復元径からかなり小ぶりのものとなった。かえりのつく杯身の最終段階のものである。Ａ－50・52は小片であるが、口縁の大きさ、形よりＡ－50は前者のＡ－52は後者の範疇であろう。



第35図　弥生土器・古代土師器実測図



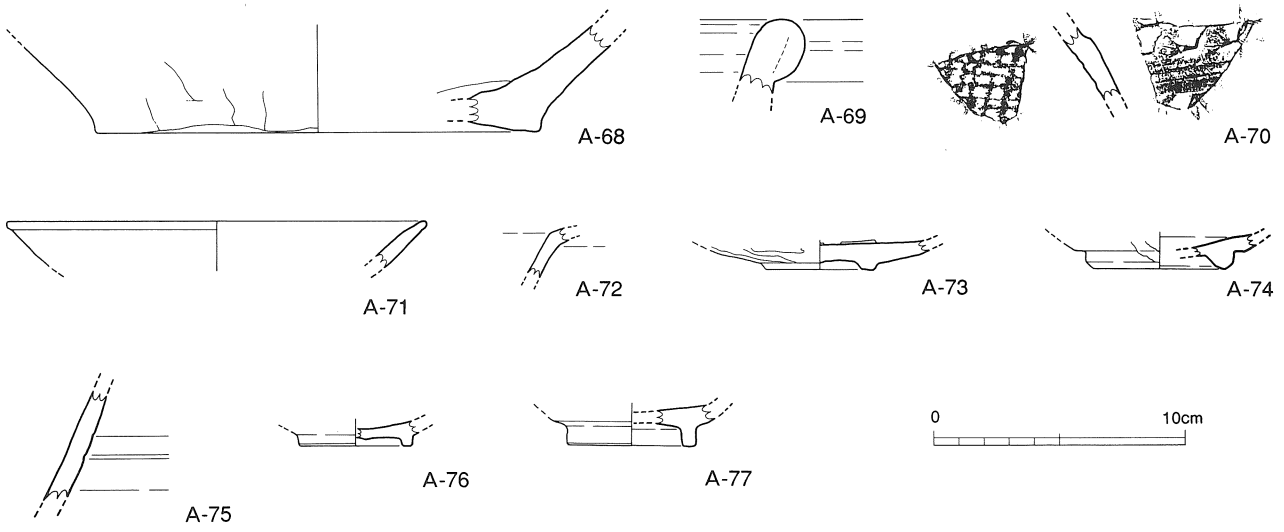
第36図　土師器実測図



第37図　須恵器実測図

Ａ－53～55は杯蓋である。Ａ－53はかえりがあり、復元径が15.6cmあるので小ぶりのものが再び大きくなった後のものであろう。Ａ－54は輪状つまみのあるものである。Ａ－53に比して器高が少々高いようである。あるいはＡ－55のまっすぐな立ち上がりの蓋口縁部と同一個体であるかもしれない。３片とも同時期のものと思われる。

Ａ－56～61はかえりのつかない杯身である。Ａ－56・57は口縁部で、端部が屈曲し丸味のある椀形に近い器形のものである。Ａ－58～60は底部でともに角に稜線をもつものである。Ａ－58は底部へラ



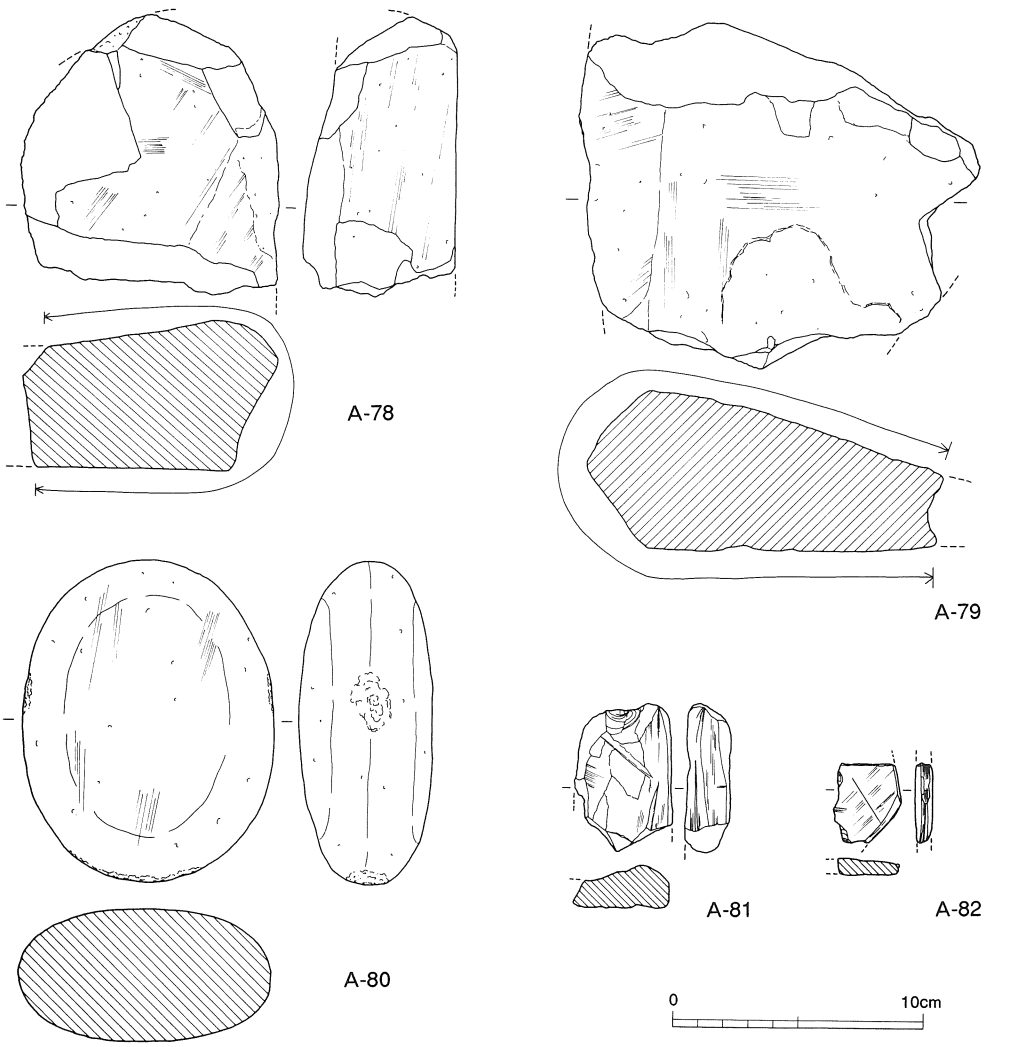
第38図　陶磁器実測図

切り技法で、×印のヘラ記号がある。A－59～61は底部回転糸切り技法である。A－61は生焼けで還元しえず赤褐色を呈している。

A－62～65は高台のある杯底部である。A－62は内寄りにまだ脚足の長めなしっかりした台が外に張り出し気味につき、底部回転糸切り技法である。A－63～65は短い高台が底部外縁に移動したものである。底部は糸切り技法と思われるが不明瞭である。

A－66は高台付長頸壺の胴部である。胎土に、杯とは違い、微砂粒子を多量に含んでいる。

A－67は甕の口縁部である。「く」の字に曲がった頸部から口縁端部は丸く



第39図　石製品実測図

おさまる。胴部が残存してなくタタキ目が不明なのとこの種の口縁端部の例がなく、時期は不明である。

陶磁器（第38図）

Ａ－68は中世常滑焼の甕の底部片である。底部と胴部の境にはヘラ状工具による押さえが施してある。

Ａ－69・70は中世備前焼である。Ａ－69は甕の口縁部で、端部を丸く折り曲げ玉縁状に仕上げている。Ａ－70は胴部破片で、外面はナデ調整のあとヘラで削ったような連続文が現状で１条施してあり内面は格子目タタキで調整が施してある。

Ａ－71・72は中国製青磁片である。小片であるがＡ－71は杯か碗の口縁部でにぶい緑灰色を呈している。Ａ－72は皿の胴部片でゆるく「く」の字状に外反している。透明感がありヒビ割れ状のみえる明るい緑灰色を呈す。

Ａ－73・74は肥前系唐津焼の高台付皿または碗である。Ａ－73は暗緑灰色の施釉で見込みに重ね焼きをする際の砂目積痕が残っており底部は削り出しによって低い高台を成形している。Ａ－74は透明感のある灰色の施釉で内面中央は釉がかき取られたかのように無釉であり橙色となっているが、これは焼成時のものであるのか塗布されたものであるのかわからない。高台を高くするために外周を削りだし端部は断面三角形となっている。

Ａ－75～77は近世の陶器である。Ａ－77は黄色みを帯びているがそれぞれ緑灰色の施釉で、Ａ－75は壺類の胴部、Ａ－76・77は皿または碗の高台付底部片である。

石製品（第39図）

Ａ－78～80は安山岩製の現状で全面に研磨した使用痕のある礫石器である。Ａ－78・79はかなり重量があるので台石として使用したであろう。Ａ－80には表裏中央部分と縁辺部分に敲打痕もあり、前者の台石とのセットとしての磨石であろう。

Ａ－81・82は凝灰岩の現状で全面研磨痕ある石器である。ともに刃痕があるので砥石として使用されたものであろう。Ａ－82は一側面が切られたような鋭い面を呈し、他の一側面は研磨による刃部状のところを平行に刃痕を残しているので、もとは刃部をもつ石器であったかもしれない。

註

(1) 土師器、陶磁器類に関しては、島根県埋蔵文化財センターの西尾克己氏、広江耕史氏から御教示ご指導頂いた。記して感謝いたします。

(2) 石材の鑑定は、出雲市教育委員会の山本順三氏にお願いした。

３．小　　結

Ⅰ　期

弥生時代中期中葉から後葉の時期であり、大溝１・２、SD15、土坑１を当該期とする。

３条の溝状遺構は並走しており、出土土器からもほぼ同時期に機能していたと思われる。またこの

３条の溝状遺構は規模からすると、おそらく集落を囲繞する環濠であろう。特に大溝１及び大溝２は現状でも幅が約６ｍあるのでかなり大規模な環濠である。調査区の短辺方向にしか延びておらず、これらの環濠がどの方向へまた最後まで並走したままであるのかなどは不明である。今後の調査に期待したい。

この区でのＩ期としての他の遺構としては土坑１を検出したのみである。この土坑は調査区外へかかっているため性格を摑むまでには至らなかった。

II　期

確実な時期は不明であるが、須恵器及び土師器が出土しており、陶磁器類が全く出土していないので、上限をそれまでとしたい。SD06～14、ｂ４GrＰ１、ｃ４GrＰ１・Ｐ２、ｄ４GrＰ３・Ｐ４を当該期とする。

９条の溝状遺構及び５穴の柱穴跡はほぼ並列しているので、なんらかの関連性はあると思われるが性格は不明である。

III　期

確実な時期は不明であるが、陶磁器類、素焼きの擂鉢、唐津焼きなどが出土しているので、上限は近世としておきたい。５層下で確認したSD01～05、道状遺構、ａ１GrＰ１、ｂ１GrＰ１～Ｐ５、ｃ１GrＰ１～P10、ｄ１GrＰ１・Ｐ２、ｂ２GrＰ１・Ｐ２、ｃ２GrＰ１・Ｐ２、ｄ２GrＰ１・Ｐ２、ｄ４GrＰ１・Ｐ２、ｃ５GrＰ１・Ｐ２、ｃ９GrＰ１～Ｐ３、ｄ９GrＰ１・Ｐ３を当該期とする。

SD03はかなり幅広の溝状遺構である。そこへSD02がつながり排水機能としてのSD03があるように思われる。道状遺構とSD04はほぼ並走しており、SD04は道状遺構の排水溝としての機能を考慮できよう。ただ相互の距離が少々離れているように思われるが、上部を削平され間隔が広まったと考えるとよさそうである。柱穴跡がまとまって検出されているが遺構となりうるものはなかった。

参考資料

◎松本岩雄・正岡睦夫編　1992『弥生土器の様式と編年　―山陽・山陰編―』木耳社

◎赤澤秀則　1992「南講武草田遺跡」『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書５』鹿島町教育委員会

◎丹羽野裕ほか　1995「陽徳遺跡・平ラＩ遺跡」『一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書11』島根県教育委員会

◎川上　稔　1996『山持川川岸遺跡』　出雲市教育委員会

◎柳浦俊一　1980「出雲地方における歴史時代須恵器の編年試論」『松江考古３』　松江考古学談話会

◎足立克己ほか　1984『高広遺跡発掘調査報告書　―和田団地造成工事に伴う発掘調査―』島根県教育委員会

◎大谷晃二　1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌11』島根考古学会

◎広江耕史・片岡詩子　1988「島根県における古代末～中世にかけての須恵器について」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』

◎広江耕史　1992「島根県における中世土器について」『松江考古８』　松江考古学談話会

◎横田賢次郎・森田　勉　1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について―型式分類と編年を中心として―」『研究論集４』九州歴史資料館

◎北九州市立考古博物館　1988『北九州の中国陶磁　―出土品にみる古代の日中交流―』

◎竹中　哲ほか　1988『―飯梨川中小河川改修事業に伴う―　富田川河床遺跡発掘調査概報』広瀬町教育委員会

◎大橋　康二　1993「肥前陶磁」『考古学ライブラリー55』

土器観察表

挿図番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・色調・焼成	手法の特徴	備　考
第10図 A－1	SD02	白磁碗	底径　7.0		胎土密 白色　焼成良好	上薬をとるかきとり	
第10図 A－2	SD02	土製品	残存長　3.1	焼成後、上下から穿孔	微砂粒子若干含む 黄黒灰色 焼成良好	裏面ナデ調整	弥生土器の底部片の転用か
第12図 A－3	SD03	土師器杯	口径　12.1 底径　5.8	立ち上がりまっすぐで胴部でわずかに膨らみ口縁部は外反する	1.2㎜の砂粒子含む 橙褐色 焼成普通	内外面ともナデ調整 底部糸切り	
第12図 A－4	SD03	土師器 杯または椀	口径　6.0	底部から立ち上がり直線的	微砂粒子含む 暗橙褐色 焼成普通	内外面ともナデ調整 底部糸切り	
第12図 A－5	SD03	素焼き 擂鉢		こね鉢形で、口縁端部は平坦面をもつ	微砂粒子わずかに含む にぶい黄橙褐色 焼成良好	内面口縁部ナデ調整、以下は縦横方向の擂目	
第12図 A－6	SD03	素焼き 擂鉢		片口をもつ 口縁端部は少しくぼみのある平坦面をもつ	微砂粒子わずかに含む にぶい黄橙色 焼成良好	外面、縦方向のハケ目ののち口縁部ヨコナデ調整 内面、口縁部ナデ調整以下縦横方向の擂目	外方向へ引き出しただけの片口
第12図 A－7	SD03	弥生土器 壺	頸部径15.6	横ひろがりの肩部から筒状にまっすぐのびた頸部 4条の刻目貼付突帯文 2本1対の棒状浮文	長石などの微砂粒子含む 外面橙褐色、内面黄橙褐色 焼成良好	外面頸部ナデ調整 肩部縦方向のハケ目ののち5本単位の平行沈線文 内面ナデ調整	
第12図 A－8	SD03下 12層	土師器 甕		厚手の外反した単純口縁	長石、石英などの1～2㎜大粒子多く含む にぶい黄橙褐色 焼成普通	外面ナデ調整 内面頸部以下ケズリのち頸部及び口縁部ナデ調整	
第14図 A－9	SD04	唐津焼 皿	底径4.8	高台が低く外径の稜線が不明瞭	胎土密 外面褐色、内面暗灰緑色の釉 焼成良好	重ね焼き時の砂目積痕が残る	
第19図 A－11	SD06	弥生土器 甕		頸部から「く」の字に口縁部が曲がり端部断面矩形	長石などの微砂粒子含む 外面にぶい黄橙色 内面浅黄橙色 焼成良好	内外面ともナデ調整	口縁部煤付着
第21図 A－12	SD07	須恵器 高台付杯	底径7.7	極低い高台が外縁寄りに付いている	白色の微砂粒子多く含む 灰色 焼成良好	底部は回転台からの切り離し後にヘラ調整を行っており切り離し方法は不明	
第27図 A－13	SD14	土師器 甕	口径19.7	頸部から外傾し1/3上位にてわずかに内湾して立ち上がる	石英、長石などの微砂粒子含む 外面暗褐色、内面黄褐色 焼成良好	口縁部内外面ともナデ調整、外面は所々ハケ目観察できる 内面頸部以下ケズリ	口縁部外面にこびり付いた様な煤付着
第29図 A－14	大溝1	弥生土器 壺		肩部から筒状に外傾しながらのびる頸部 4条の刻目貼付突帯文 A－7の退化形	長石、石英などの1㎜大の砂粒子多く含む 黄褐色（断面黒灰色） 焼成普通	外面ナデ調整と思われる 内面頸部ミガキと思われる、以下は不明	

挿図番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・色調・焼成	手法の特徴	備　考
第29図 A－15	大溝1	弥生土器 壺		広口状に湾曲した口縁部で、端部がわずかに上下に肥厚する	微砂粒子含む 外面浅黄色、内面暗灰黄色 焼成普通	内外面ともナデ調整	
第29図 A－16	大溝1	弥生土器 壺	口径14.1	外反した口縁部で端部は丸くおさめている	石英、長石、黒色粒子などの微砂粒子含む 灰黄色 焼成普通	外面口縁～頸部ナデ調整、以下ハケ目調整 内面は風化のため不明	
第29図 A－17	大溝1	弥生土器 甕	口径31.8	頸部「く」の字に屈曲し、端部わずかに肥厚させる 端面にクシ状工具による刺突文 外面口縁部に逆「L」字状文様？連続したものか2ケ1対のものか不明	1㎜大の砂粒子多く含む 外面黄橙褐色、内面灰黄褐色 焼成良好	外面胴部ハケ目、以外内外面ともナデ調整	
第29図 A－18	大溝1	弥生土器 甕	口径30.1	頸部「く」の字に屈曲し、端部わずかに肥厚する	長石、石英、橙色粒子など、1㎜大の砂粒子を多く含む 淡黄色 焼成良好	外面胴部ハケ目、以外内外面ともナデ調整	
第29図 A－19	大溝1	弥生土器 甕		頸部「く」の字に屈曲し、端部断面矩形	長石、石英などの砂粒子多く含む 外面淡黄色、内面黄灰色 焼成普通	外面胴部ハケ目、以外内外面ともナデ調整	
第29図 A－20	大溝1	弥生土器 甕		頸部「く」の字に屈曲し、口縁端部心持ち上方へ引き上げている	長石、石英、雲母などの微砂粒子多く含む 外面黄褐色、内面灰オリーブ色 焼成普通	風化著しく調整不明	
第29図 A－21	大溝1	弥生土器 甕	口径23.3	頸部「く」の字に屈曲し、端部はまだ発達していない	長石、石英などの微砂粒子多く含む、また1～2㎜大の長石少し含む 外面灰黄色、内面黄灰色 焼成普通	外面頸部以下ハケ目、以外は内外面ともナデ調整	
第29図 A－22	大溝1	弥生土器 甕		頸部「く」の字に屈曲し、端部はまるく上方にわずかに引き上げている	石英などの微砂粒子含む 外面浅黄色、内面灰黄色 焼成良好	外面口縁部ナデ調整、頸部以下ハケ目調整 内面口縁部ナデ調整、頸部以下は風化のため不明	
第29図 A－23	大溝1	弥生土器 鉢		内湾ぎみの直口口縁 端部にしっかりしたフラットな面をつくり、口唇部に刻目、その下方に指頭圧痕文帯をめぐらす	石英などの微砂粒子多く含む 外面黄灰色、内面黒灰色 焼成普通	外面は指頭圧痕文帯の直上にハケ目痕が観察できるが、以外は風化のため不明 口縁端部のフラットな面と内面はナデ調整と思われる	
第31図 A－24	大溝2	土師器 直口壺	口径9.6 胴部最大径16.0	かなり張り出した胴部に外傾してまっすぐ立ち上がる口縁部 胴部上半はかなり分厚い作り	石英を中心とした1㎜大の砂粒子含む 外面、内面口縁部赤橙色、以外黄褐色 焼成普通	外面、内面口縁部ナデ調整、内面頸部以下ケズリ	外面、内面口縁部朱塗り

挿図番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・色調・焼成	手法の特徴	備　考
第33図 A－25	大溝2 SD15	弥生土器 壺	口径20.0	外傾してのびる長めの頸部に口縁端部は肥厚し平坦面をつくる 口唇部に刻目、頸部に4条の刻目貼付突帯文を施している	石英、長石などの微砂粒子含む 外面淡黄色、内面淡黄色 焼成良好	外面頸部ナデ、貼付突帯文の下にハケ目調整 内面頸部ナデのち部分的に横ハケ目調整	内面に黒斑観察される
第33図 A－26	SD15	弥生土器 甕		「く」の字に外反した口縁部から端部を上方に引きのばし丸くおさめている かなり薄めの器壁を有する	微砂粒子若干含むち密である 外面黒灰色、内面暗黄褐色 焼成良好	外面胴部ハケ目と思われる、以外はナデ調整	
第33図 A－27	SD15	弥生土器 底部	底径9.0	しっかりした平底	微砂粒子含む 暗褐灰色 焼成普通	全体にナデ調整と思われる、特に内面底部には荒いナデ調整痕が観察できる	
第33図 A－28	SD15	弥生土器 底部	底径8.1	厚手のしっかりした平底	石英、長石など1㎜大の砂粒子多く含む 外面橙褐色、内面黄灰褐色 焼成普通	外面はヘラミガキのちに底部まわりに底面と同じナデを施す 内面ナデ調整、指頭圧痕あり	内面底部は黒斑状 外面に煤付着認められる
第33図 A－29	SD15	弥生土器 脚部		外反気味の脚部に上向きに反った裾部がつく	微砂粒子含む 黒褐色 焼成普通	外面指押さえで成形したのちナデ調整 内面ケズリ調整	
第33図 A－31	SD15	土師器 甕		分厚く短めに外傾した口縁部	長石、石英などの砂粒子多く含む 橙黄褐色 焼成普通	外面、内面口縁部ナデ調整、内面頸部以下は荒いケズリ調整	
第33図 A－32	土坑1	弥生土器 壺		首の長い湾曲して立ち上がる頸部である。断面三角形の貼付突帯文が2条施されている	長石、石英などの微砂粒子含む 黄褐色、断面黒灰色 焼成良好	外面突帯文以上はナデ、それより下はハケ目調整 内面は基本的にナデだが、部分的にナデの前に施されたハケ目が観察できる	
第35図 A－33	c7Gr 7層	弥生土器 壺	口径17.3	外傾してのびる長めの頸部で、口縁端部は肥厚し、平坦面をつくる 頸部に4条の刻目貼付突帯文あり、ただし上3条は剝がれて痕跡のみ	長石、石英など1～3㎜大の砂粒子多く含む 内面淡黄色、外面淡黄褐色 焼成普通	内外面ともにナデ調整、特に内面は1、2㎜幅の強いナデ調整	
第35図 A－34	c・d－9Gr 8層	弥生土器 甕	口径19.7	あまり張りのない胴部から「L」字状に強く屈曲する口縁部、端部はわずかに上へひきのばす	微砂粒子及び1㎜大の石英含む 淡黄色 焼成良好	口縁部は内外面ともナデ調整 頸部以下は外面格子状のハケ目、内面縦方向のハケ目調整	
第35図 A－35	c－7・8Gr 7層	弥生土器 底部	底径8.5	平底	微砂粒子含む 黒灰色､断面黄褐色 焼成普通	外面胴部ヘラミガキ 底部ナデ調整 内面風化のため不明	全体に瓦質のような焼成
第35図 A－36	c・d－8Gr 8層	弥生土器 底部	底径6.2	しっかりした平底	微砂粒子含む 外面黄褐色、内面黄灰褐色	外面底部ナデ調整以外内外面ともヘラミガキ調整	外面に黒斑あり

挿図番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・色調・焼成	手法の特徴	備　考
第35図 A－37	b8Gr 7層	甕		かなり薄手のもの 頸部は「く」の字に屈曲する	微砂粒子若干含む 淡黄褐色 焼成良好	内外面ともナデ調整	
第35図 A－38	c・d－7Gr 7層	古式土師器 壺	口径14.5	直立ぎみの口縁端部はフラットな面をつくり、突出部もわずかに突出させて複合口縁としている	石英などの微砂粒子含む 暗黄褐色 焼成普通	内外面ともナデ調整	
第36図 A－39	c5Gr 7層	土師器 高台付杯	底径7.7	脚部は剝ぎ取れて詳細は不明であるが、杯部の底部は上げ底	橙褐色粒子を含み、ち密 明橙褐色 焼成普通	底部回転糸切り	かなり磨滅して割れ口が丸くなっている
第36図 A－40	c・d－9Gr 8層	土師器 杯	底径6.7	底部から1度直立して胴部へと外傾している	微砂粒子若干含む 橙褐色 焼成普通	底部回転糸切り 以外内外面とも回転ナデ調整	
第36図 A－41	c・d－7Gr 7層	土師器 杯	底径6.5	底部から1度直立して胴部へと外傾している 底部中央は薄く、そのため内面は傾斜がきつい	微砂粒子若干含む 橙褐色粒子含む 焼成普通	底部糸切り 以外内外面とも回転ナデ調整	
第36図 A－42	c・d－7Gr 7層	土師器 杯	底径5.3	底部からそのまま胴部へと外傾していく 底部中央は薄く、そのため内面は傾斜がきつい	微砂粒子若干含み、ち密 褐色 焼成良好	底部回転糸切り 以外内外面ともナデ調整	切り離し時に粘土塊を残す
第36図 A－43	b3Gr 7層	土師器 杯	底径5.4	底部からわずかに直立し外傾している	微砂粒子若干含む 淡褐色 焼成良好	底部糸切り 以外内外面とも回転ナデ調整	
第36図 A－44	c－7・8Gr 7層	土師器 杯	底径4.9	底部からそのまま胴部へと外傾している	微砂粒子若干含む 淡白橙色 焼成普通	底部回転糸切り 以外内外面とも回転ナデ調整	
第36図 A－45	b4Gr 4層	土師器 杯	底径4.5	底部からそのまま胴部へと外傾している	微砂粒子若干含む 淡白橙色 焼成普通	底部回転糸切り	
第36図 A－46	b5Gr 4層	土師器 杯	底径5.1	底部からわずかに直立し外傾している	微砂粒子若干含む にぶい橙褐色 焼成普通	底部回転糸切り 内面回転ナデ調整	
第36図 A－47	c3Gr 4層	土師器 杯	底径6.2	底部からそのまま胴部へと外傾している	微砂粒子及び橙褐色粒子若干含む 淡橙褐色 焼成良好	底部回転糸切り 以外内外面とも回転ナデ調整	
第36図 A－48	c4Gr 1層	土師器 杯	底径5.9	底部からわずかに直立させて外傾している	微砂粒子含む 橙褐色 焼成普通	底部糸切り 以外内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－49	b9Gr 7層	須恵器 杯身	口径13.0	口縁部は内傾し、底部は丸みを帯びている	1㎜大の白色砂粒子含む 灰色 焼成普通	底部切り離し未調整 以外内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－50	c・d－7・8Gr 7層	須恵器 杯身			微砂粒子若干含む 灰色 焼成良好	内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－51	c・d－8Gr 8層	須恵器 杯身	口径9.0		微砂粒子若干含む 灰色 焼成良好	内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－52	b9Gr 7層	須恵器 杯身			微砂粒子若干含み、ち密 淡灰色 焼成良好	外面風化のため不明 内面回転ナデ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・色調・焼成	手法の特徴	備　考
第37図 A－53	c・d－8Gr 8層	須恵器 杯蓋	口径15.6	短めのかえりが直立ぎみに付く	微砂粒子若干含む 灰色 焼成普通	外面体部上半はケズリ、以外内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－54	d8Gr 8層	須恵器 杯蓋	つまみ径6.1	輪状つまみ 1.5㎜幅の沈線1条めぐる	石英などの微砂粒子含む 淡灰色 焼成普通	外面体部上半はケズリ調整 内面ナデ調整	
第37図 A－55	b8Gr 7層	須恵器 杯蓋		口縁部短く直立する	微砂粒子若干含む 淡灰色 焼成良好	内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－56	c2Gr 4層	須恵器 杯身	口径14.6	丸みのある体部に立ち上がり深めで、口縁部は「S」字状に屈曲する	微砂粒子含む 暗灰色 焼成良好	内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－57	c・d－8Gr 5層	須恵器 杯身	口径12.7	丸みのある体部に立ち上がり深めで、口縁部は内側へ屈曲する	微砂粒子含む 灰色 焼成普通	内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－58	c・d－9Gr 8層	須恵器 杯身	底径6.2	底部と体部境の稜線があまく、そのまま丸みをおびて立ち上がる	石英などの微砂粒子若干含み、ち密 青灰色、断面淡いあずき色 焼成良好	底部ヘラ切り 以外の外面ケズリ調整 内面ナデ調整	碗の底部の可能性あり 底部に「×」印のヘラ記号あり
第37図 A－59	c4Gr 7層	須恵器 杯身	底径7.8		微砂粒子含む 灰褐色 焼成普通	底部回転糸切り 以外の内外面ともナデ調整	
第37図 A－60	c・d－9Gr 8層	須恵器 杯身	底径9.8	底部から直立ぎみに体部が立ち上がる	微砂粒子含む 灰色 焼成普通	底部回転糸切り 以外の内外面とも回転ナデ調整	
第37図 A－61	c4Gr 2層	須恵器 杯身	底径9.0		微砂粒子若干含む 赤褐色 焼成普通	底部回転糸切り	
第37図 A－62	b4Gr 7層	須恵器 杯身		底部内寄りにしっかりした長めの高台が外に張り出し気味に付く	微砂粒子含む 灰色 焼成普通	底部回転糸切り 以外の外面回転ナデ調整 内面ナデ調整	
第37図 A－63	b9Gr 7層	須恵器 杯身	底径9.9	短めの高台が底部外縁に付く	微砂粒子含む 灰色 焼成普通	全体に回転ナデ調整	
第37図 A－64	c5Gr 2層	須恵器 杯身	底径7.2	短めで内傾した高台が底部外縁に付く	石英、長石などの微砂粒子含む 暗灰色 焼成普通	内面ナデ調整	
第37図 A－65	c・d－8Gr 5層	須恵器 杯身	底径8.4	短めで内傾した高台が底部外縁に付く	長石、石英などの微砂粒子含む 灰色 焼成普通	内面ナデ調整	
第37図 A－66	c・d－6Gr 7層	須恵器 高台付長頸壺			長石、石英などの微砂粒子多く含み、ち密 外面淡灰色、内面青灰色、断面あずき色 焼成良好	外面ケズリ、内面ナデ調整	
第37図 A－67	c・d－6Gr 7層	須恵器 甕	口径15.0	「く」の字に曲がった頸部から口縁端部は丸くおさめる	微砂粒子若干含み、ち密 外面赤黒色、内面暗赤灰色 焼成良好	外面風化のため不明 内面ナデ調整	

挿図番号	出土地点	器　種	法量(cm)	形態の特徴	胎土・色調・焼成	手法の特徴	備　考
第38図 A－68	d5Gr 4層	常滑焼 甕	底径17.6	湾曲した底部から外開きに外傾していく	石英、長石などの微砂粒子多く含む 外面茶褐色、内面灰褐色 焼成普通	底部未調整のためか荒い 以外の内外面ともにナデ調整、底部付近をヘラ状工具にて押さえている	
第38図 A－69	b4Gr 7層	備前焼 甕		口縁端部を丸く折り曲げて玉縁状にしている	微砂粒子若干含む 暗赤褐色、断面黄灰色 焼成良好	ナデ調整	
第38図 A－70	c3Gr 1層	備前焼 甕			微砂粒子若干観察できる 暗赤褐色 焼成良好	外面ヘラ状工具による刺突文、ナデ調整 内面格子状のタタキ調整	
第38図 A－71	b－4・5Gr 5層	中国製青磁 杯または碗	口径16.7	口縁端部はわずかに外反し、のばしておえる	胎土ち密 にぶい緑灰色、断面白灰色 焼成良好	内外面とも施釉	
第38図 A－72	c・d－9Gr 1層	中国製青磁 皿		頸部が「く」の字に外反する	胎土ち密 明緑灰色、断面白灰色 焼成良好	内外面とも施釉	
第38図 A－73	d4Gr 層不明	肥前系唐津焼 高台付皿または碗	底径4.4	削り出しによる低く小さな高台	胎土ち密 外面淡褐灰色、内面暗緑灰色 焼成良好	外面上半及び内面に施釉 見込み部分砂目積痕残る	
第38図 A－74	b4Gr 7層	肥前系唐津焼 皿または碗	底径5.3	高台を高くするために外周を削り出し、接点は断面三角形となる	胎土ち密 内面透明な灰色(釉)、中央は橙色 外面淡灰色 焼成良好	回転ナデ調整 内面施釉しているが、見込み中央は釉剝ぎをする	
第38図 A－75	c6Gr 2層	近世陶器 壺			胎土ち密 緑灰色、断面白灰色 焼成良好	内外面とも施釉 素地胴部に数条の沈線が施してあり、それが暗部的な文様となっている	
第38図 A－76	表採	近世陶器 高台付皿または碗	底径4.6	小型のもの	胎土ち密 外面淡灰色、内面緑灰色 焼成良好	内面施釉	
第38図 A－77	c－6・7Gr 2層	近世陶器 高台付皿または碗	底径5.2	径のわりには小さく高めで直立した高台	胎土ち密 外面淡灰色、内面黄緑灰色 焼成良好	内面施釉	

石器一覧表

挿図番号	出土地点	器種	遺存状態	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
第16図 A－10	SD05	磨製石鋸？	半分欠損	凝灰岩	5.0	4.3	1.2	23.2	
第33図 A－30	SD15	磨石	完形	変質細粒砂岩	7.7	6.7	5.6	400.0	
第39図 A－78	c4Gr 7層	台石	半分欠損	安山岩	11.1	10.2	6.1	851.0	
第39図 A－79	c4Gr 7層	台石	半分欠損	安山岩	13.7	15.9	6.3	1650.0	
第39図 A－80	c・d－8Gr 8層	磨石	完形	安山岩	12.8	10.0	5.3	1002.0	
第39図 A－81	c・d－6Gr 5層	砥石	1/3欠損	凝灰岩	6.0	3.9	1.9	34.5	
第39図 A－82	b5Gr 2層	砥石	破片	凝灰岩	3.2	2.8	0.8	6.5	

B　　区

Ｂ区の調査

１．調査の概要

層序（第40図～第43図）

Ｂ区は、ＪＲ第一高西踏切から海上川ＢＯＸ（用水路）までの幅約６ｍ、長さ約50ｍの約300㎡を対象に発掘調査を実施した。

ＪＲ山陰本線敷設のための盛土を約１ｍ除去した後に調査を開始したが、調査区での層序は西側、中央部、東側ではかなり異なった様相を示している。

西側では、盛土の下には近世の耕作土である黄灰色土が堆積しており、その下層には黄褐色砂質土があり、西側遺構の地山である灰白色砂質土に達する。

一方、中央部には近世の耕作土である黄灰色土は堆積しているが、その下には三瓶火山灰と考えられる黄褐色土が一部に堆積し、にぶい赤褐色土となる。また、中央部での地山はしっかりとした黄褐色シルト層である。しかし、黄褐色シルト層も東側になると認められず、しだいに砂質が強くなり、その下層には粘土が堆積し、荒砂に達する。後述するが、Ｂ区東側は大規模な旧自然流路の肩部と考えられる。

遺　構

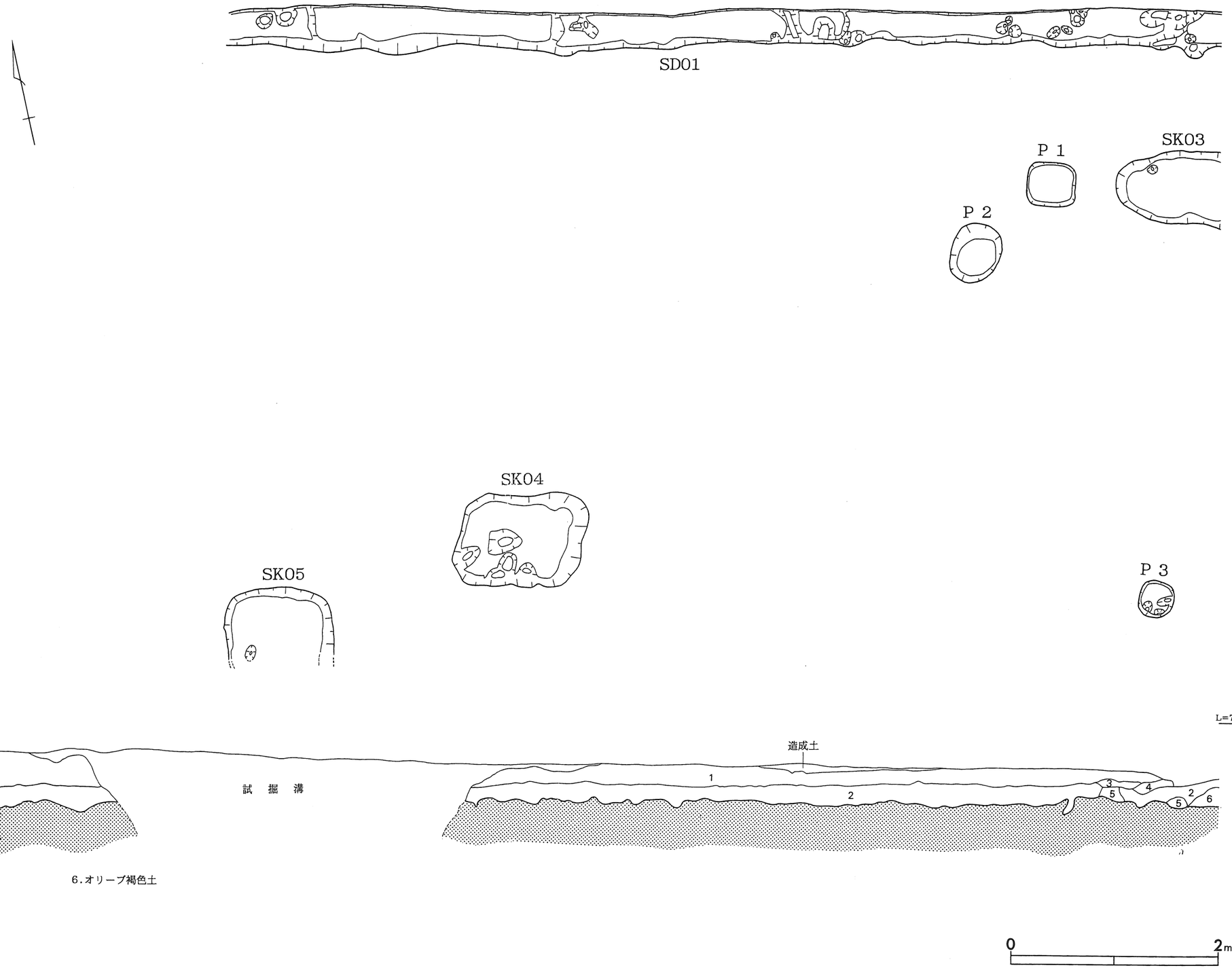
遺構はそのほとんどがしっかりとした黄褐色シルト層が残っている中央部で検出している。中央部では、弥生時代中期の溝状遺構３、土坑２、土塁状遺構１、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての溝状遺構２のほか、ピット状遺構を多数検出している。ピット状遺構の中には中世の遺構も数穴認められる。

西側では、古い時期の遺構は認められないが、近世の溝状遺構１、中世の土坑３、ピットなどを確認している。なお、東側では、上部が削平されているうえ、旧自然流路の肩部と考えられるため、遺構は認められなかった。

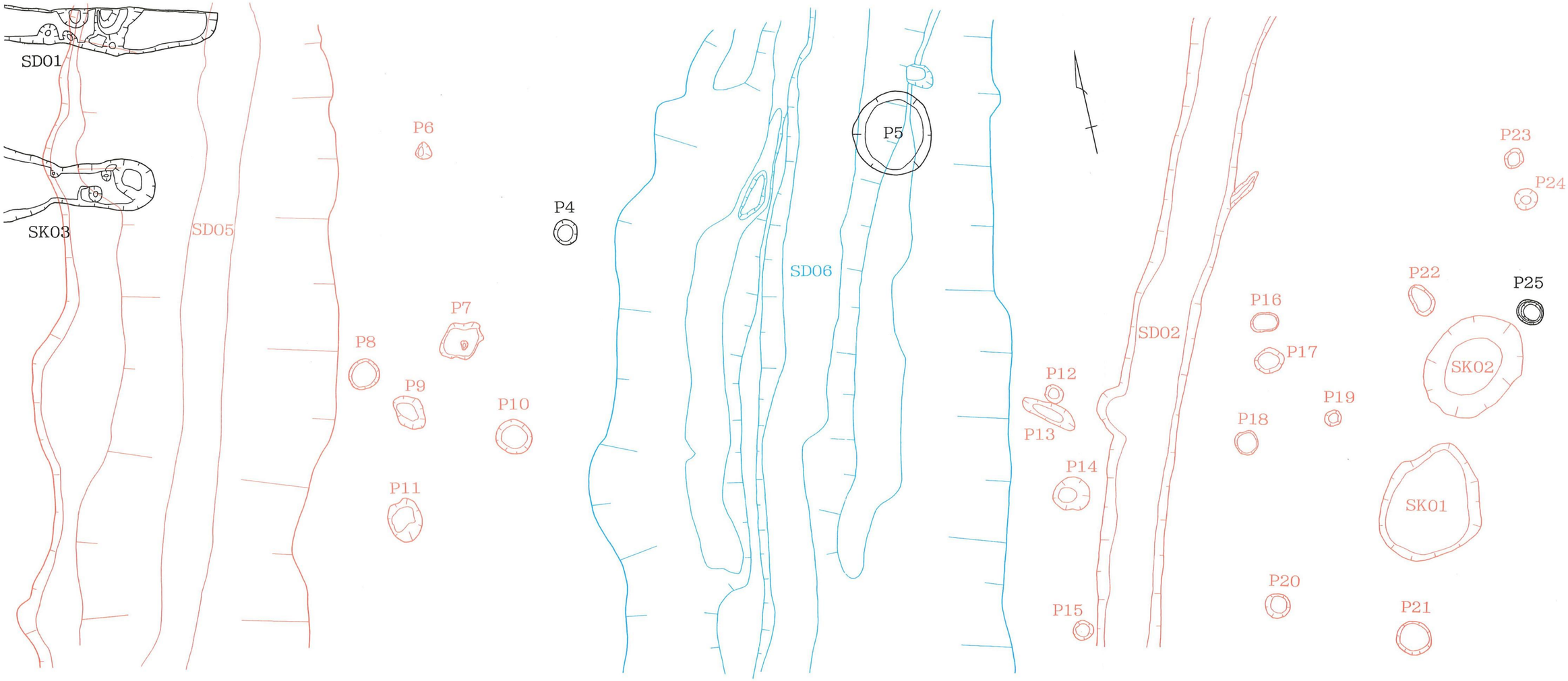
遺　物

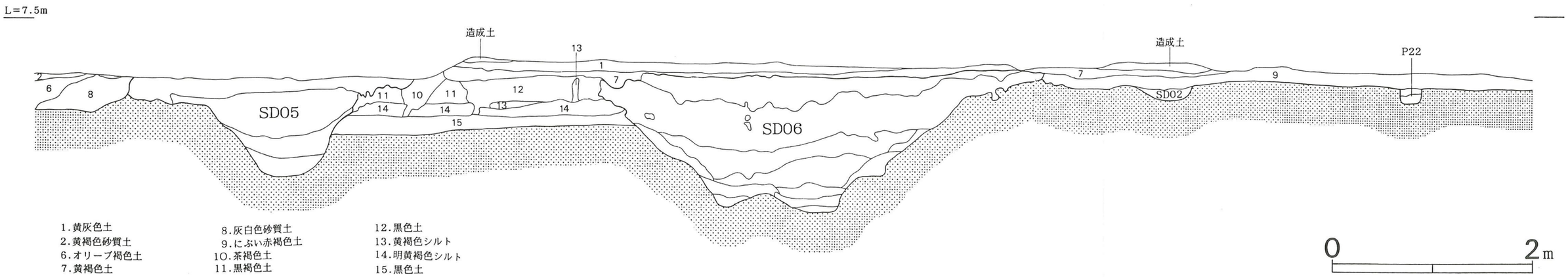
遺物は、西側から中央部にかけて広く堆積している黄灰色土中に近世のカワラケ、陶磁器、中世の土師器などの小片が多く認められるが、中には弥生土器、古式土師器、須恵器片も若干含まれている。また、中央部に堆積しているにぶい赤褐色土は、比較的安定した遺物包含層となっており、弥生土器を多く包含している。しかし、中央部に密集する遺構内からの遺物量が他を圧倒しており、特にSD06からは弥生時代終末期の土器が大量に出土している。その中には完形の土器も多く認められるほか、黒曜石の剝片や砥石などの石器も出土している。その他の遺構内からも弥生土器、古式土師器が比較的多く出土している。また、中世の遺物は少ないが、Ｐ25からは、11世紀から13世紀頃にかけてのものと考えられる完形の土器が１点出土している。なお、旧自然流路の肩部にあたる東側では、砂層中、粘土中からも遺物は全く認められていない。

以上のように、Ｂ区では弥生時代中期中葉から近世に至るまでの遺構・遺物を検出しているが、弥生時代後期の遺構、遺物は皆無であった。また、古墳時代中期から奈良時代にかけても遺物は少なく、遺構も認められないことから、この付近には、弥生時代中期中葉頃に人々が居住し、後期には一旦生活区域としては利用されなくなるが、弥生時代終末期には再び生活区域となっていたと考えられる。なお、出雲平野の遺跡に認められる傾向であるが、Ｂ区では、古墳時代中期頃に集落が突然姿を消しているようである。原因はよく分からないが、社会的な大変化が生じた可能性もあろう。

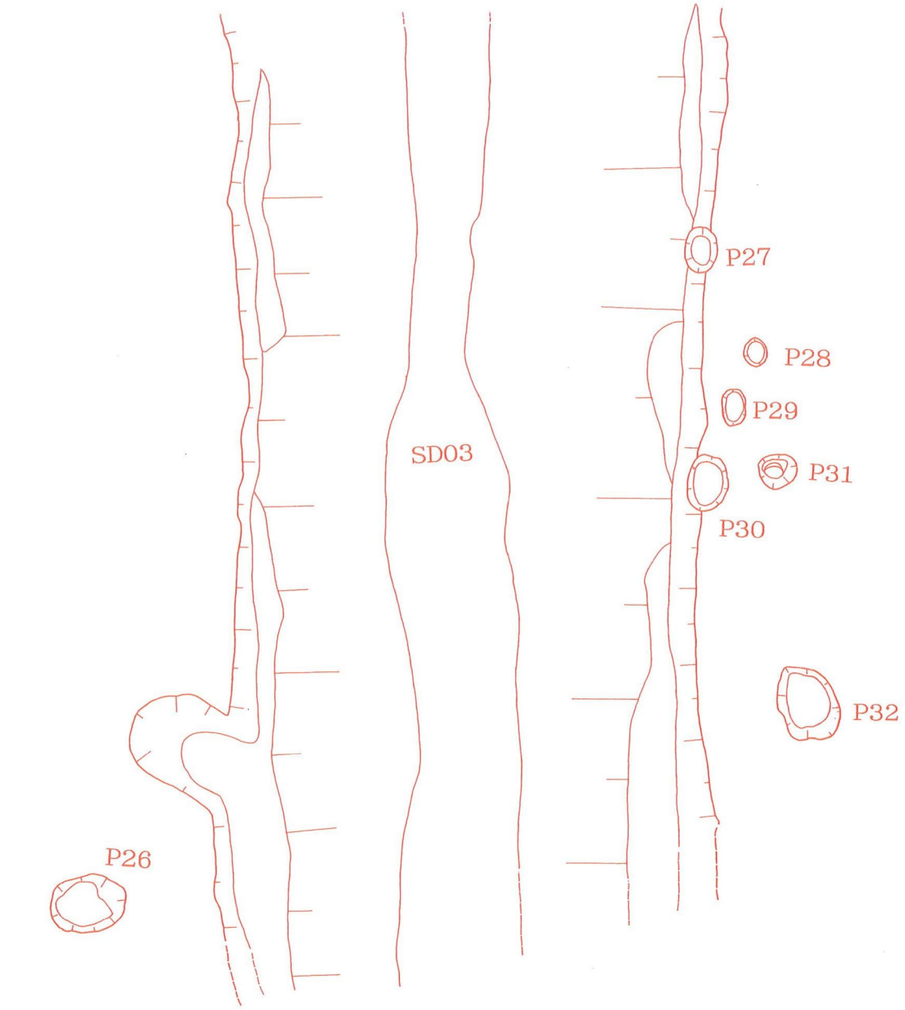


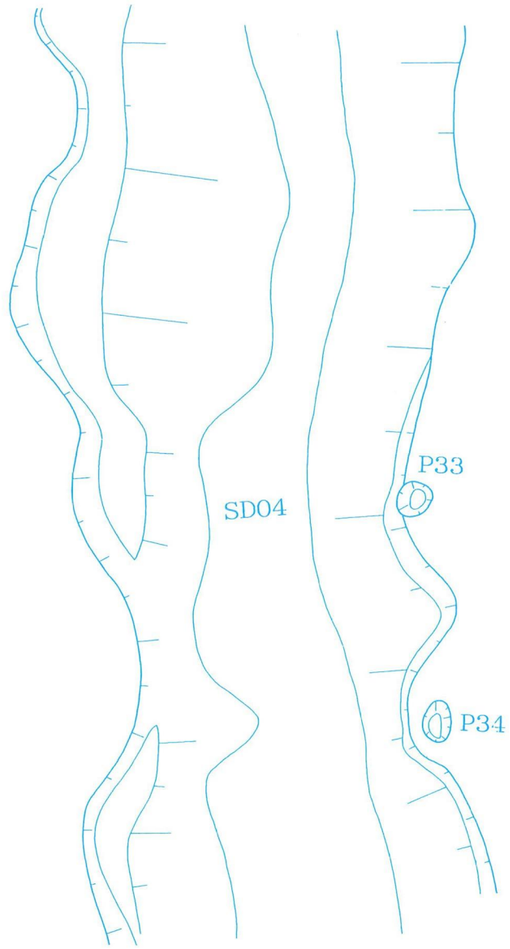
第40図　B区遺構配置図(1)　※黒刷は中近世の遺構

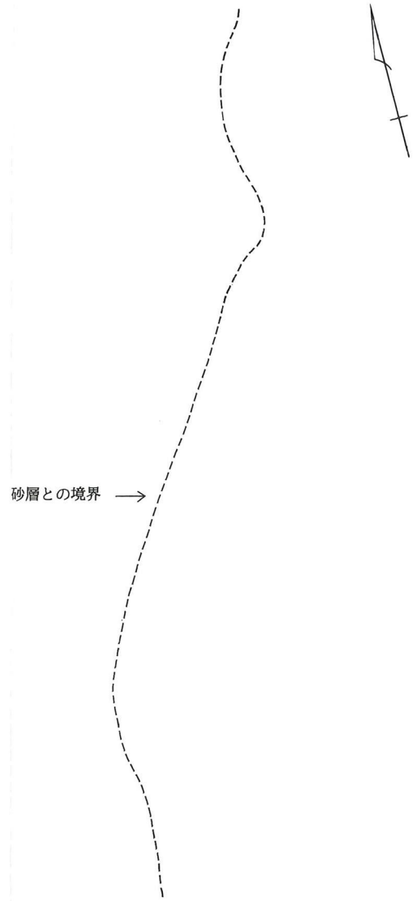




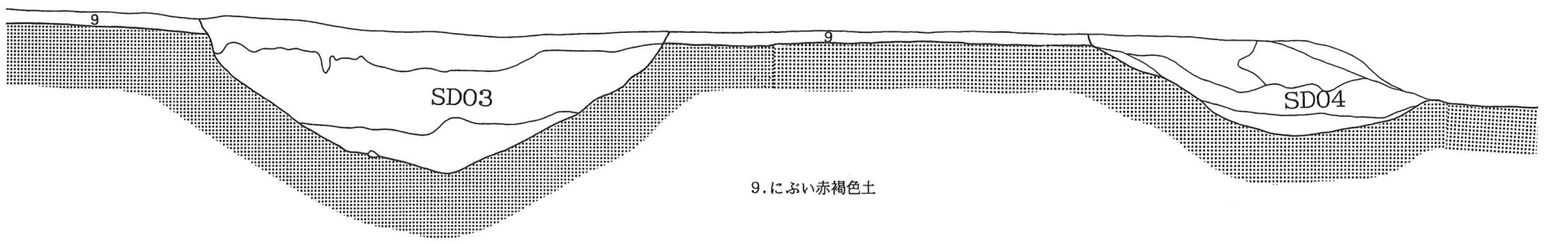
第41図　B区遺構配置図(2)　※黒刷は中近世の遺構
青刷は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構
赤刷は弥生時代中期の遺構

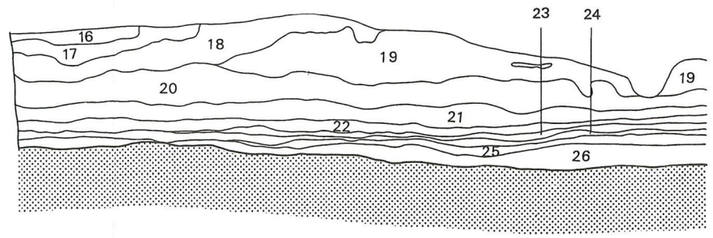






L=7.5m



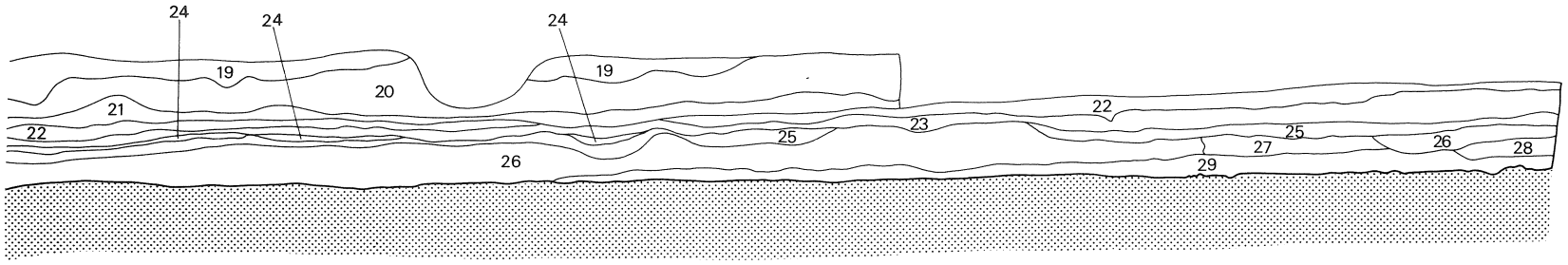


16.オリーブ色シルト
17.黄褐色砂質土
18.にぶい黄褐色砂
19.浅黄色砂
20.灰黄色砂
21.灰白色砂
22.灰色砂
23.赤褐色砂
24.褐灰色砂質土
25.灰色粘土
26.暗灰色粘土

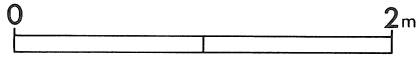
0 2m

第42図　B区遺構配置図(3)　※黒刷は中近世の遺構
青刷は弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構
赤刷は弥生時代中期の遺構

L= 6.50m



19.浅黄色砂
20.灰黄色砂
21.灰白色砂
22.灰色砂
23.赤褐色砂
24.褐灰色粘質土
25.灰色粘土
26.暗灰色粘土
27.灰色粘砂
28.赤褐色砂
29.灰色砂(粗砂)



第43図　東側砂層落込み部セクション図

2．遺構と遺物

(1) 中・近世の遺構

中・近世の遺構には西側の灰白色砂質土上面において溝状遺構１、土坑状遺構３、ピット状遺構３を検出している。また、中央部でも黄褐色土上面においてピット状遺構３を検出している。なお、中央部に集中するピット群の中には、他にも中世のものである可能性がある。

ＳＤ０１（第44図）

西側灰白色砂質土上面で検出した溝状遺構で、東西方向に伸びる。北側は調査区に切られて検出できず、上部も削平されており、残存状況は良くなかった。検出長は11.1ｍ、検出幅約50㎝、深さ約14㎝を測り、覆土には上層の黄褐色砂質土が落ち込んだ状態で堆積している。検出高は標高約6.9ｍである。

遺物は小片のみであり、時期的判断は難しいが、カワラケ、陶器片を含んでいることから、近世の遺構であろう。遺構の残存状態も悪いため、性格は不明である。

ＳＫ０４（第45図）

SD01と同様、灰白色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。上部は削平を受けており、底部を僅かに残す状態であった。検出長は東西1.16ｍ、南北85㎝で、深さ約14㎝を測る。平面形は隅丸長方形を呈している。検出高は標高約6.6ｍである。

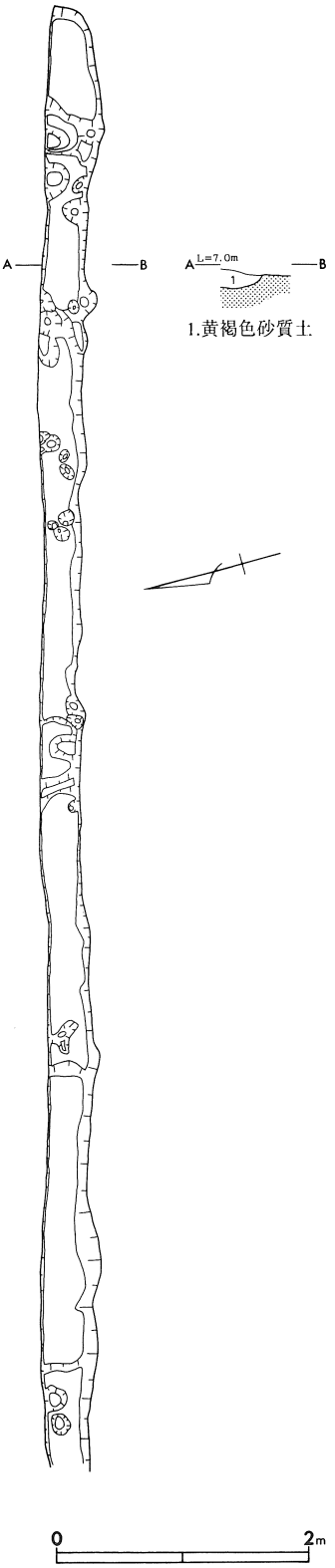
覆土にはにぶい黄褐色土が堆積しており、断面はゆるやかなレンズ状を呈している。遺物は小片のみであるが、土師質の土器が出土していることから、中世の遺構と考えられる。

なお、SK04の西側にも相似した形状で、同じ覆土が堆積しているSK05を検出しているが、同じく中世の遺構と考えられる。Ｐ１～３も同様である。性格は、遺構の残存状態が悪く、遺物もほとんど認められないため、いずれも不明である。

ＳＫ０３（第46図）

灰白色砂質土上面で検出した土坑状遺構で、検出長2.5ｍ、最大幅72㎝、深さ約13㎝を測る。検出高は標高約6.9ｍである。形状は、中央付近で一旦くびれ、東側は小さく張り出している。

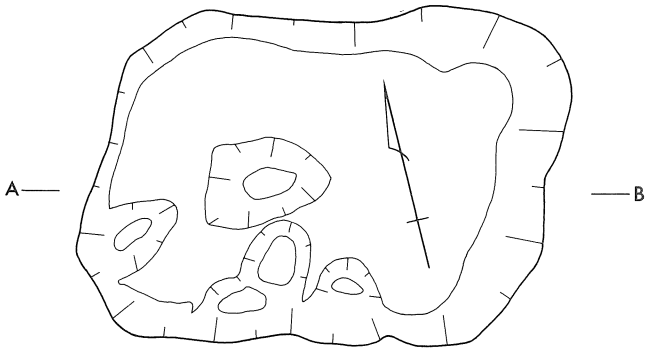
覆土には黒褐色土が堆積しており、断面はなだらかなレンズ状を呈す。覆土はSK04などとは異なっているが、遺物には土師質の土器細



第44図　ＳＤ０１実測図

片が含まれていることから、中世の遺構と考えられる。性格は不明である。

また、SK03の東側で検出しているＰ４、Ｐ５も、同じような覆土が堆積しており、同時期の遺構と考えられる。なお、SK03に対しての地山は、弥生時代中期中葉の溝状遺構であるSD05の覆土となっている。

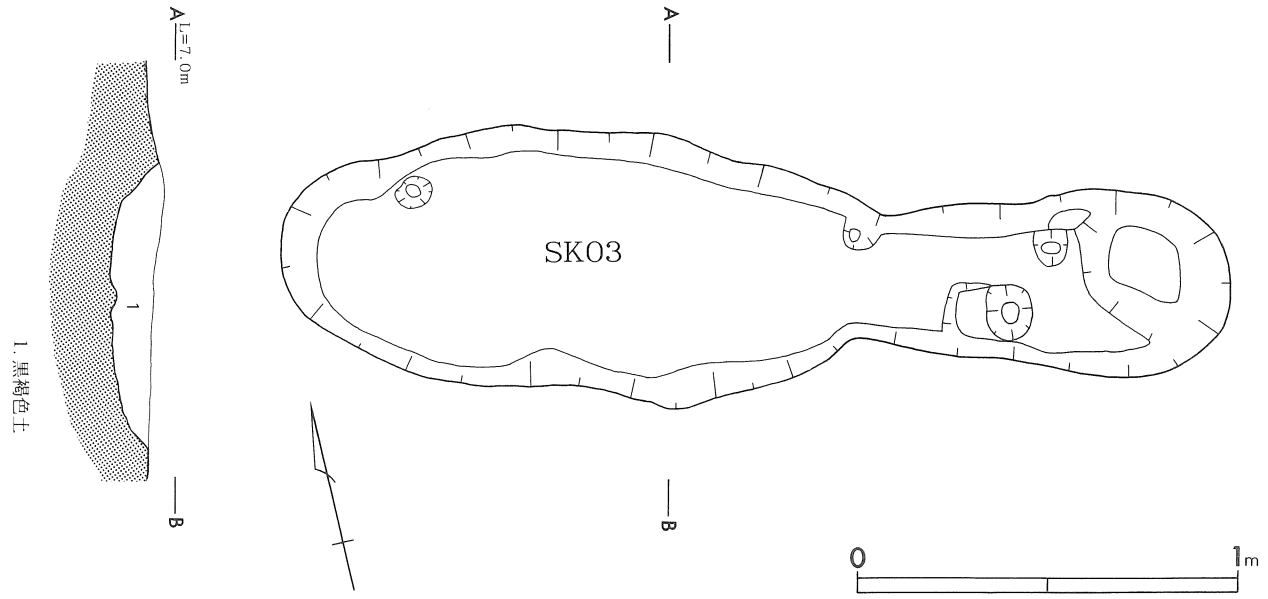


第45図　ＳＫ０４実測図

Ｐ25（第47図）

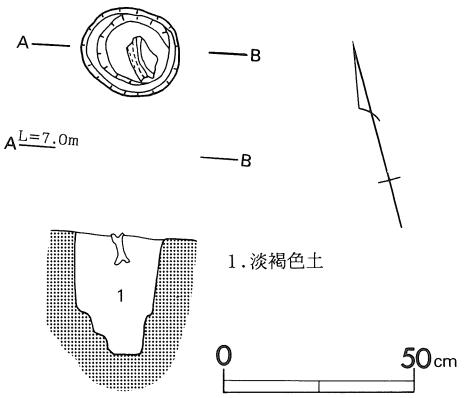
Ｂ区中央部の黄褐色シルト層上面で検出したピットである。上部は削平されているが、径26cm、深さ約32cmを測り、形状はほぼ円形を呈している。

覆土には淡褐色でやや砂質の土が堆積しており、断面形は肩から鋭角に落ち、一旦僅かに段を造り出して最深部は狭くなっている。検出高は標高約6.8ｍである。

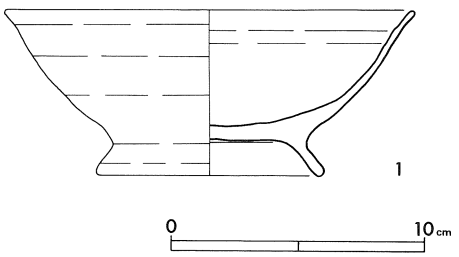


第46図　ＳＫ０３実測図

遺物には、足高高台を有す土師器坏が完形の状態で出土している（第48図）。高台の底径8.8cm、坏部口径16.0cm、器高6.6cmを測る土師質のもので、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。遺物はこの１点のみであるため、時期的な位置付けは難しいが、おおよそ11世紀から13世紀にかけての遺構と考えられる。



第47図　P25実測図



第48図　P25出土遺物実測図

なお、P25周辺に集中しているピット群からは遺物がほとんど認められないうえ、同じ検出面で弥生期、古墳期の遺構が検出されていることから、P25以外にも中世のピットがある可能性もある。

しかし、ピット群の中には、建物跡の柱穴となるような配置は認められず、性格は不明である。

(2)　弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構

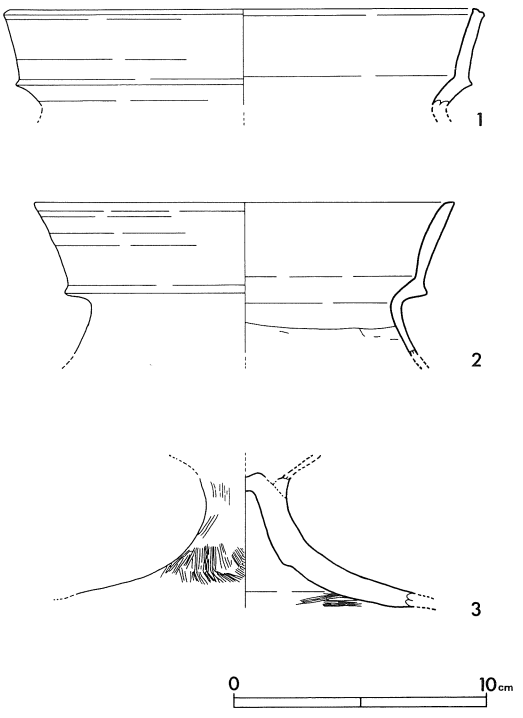
この時期の遺構は、しっかりとした黄褐色シルト層が堆積している中央部で溝状遺構2を検出している。そのうち、SD06からは多量の土器を検出し、搬入品も多く認められることから、貴重な資料となった。

ＳＤ０４（第50図）

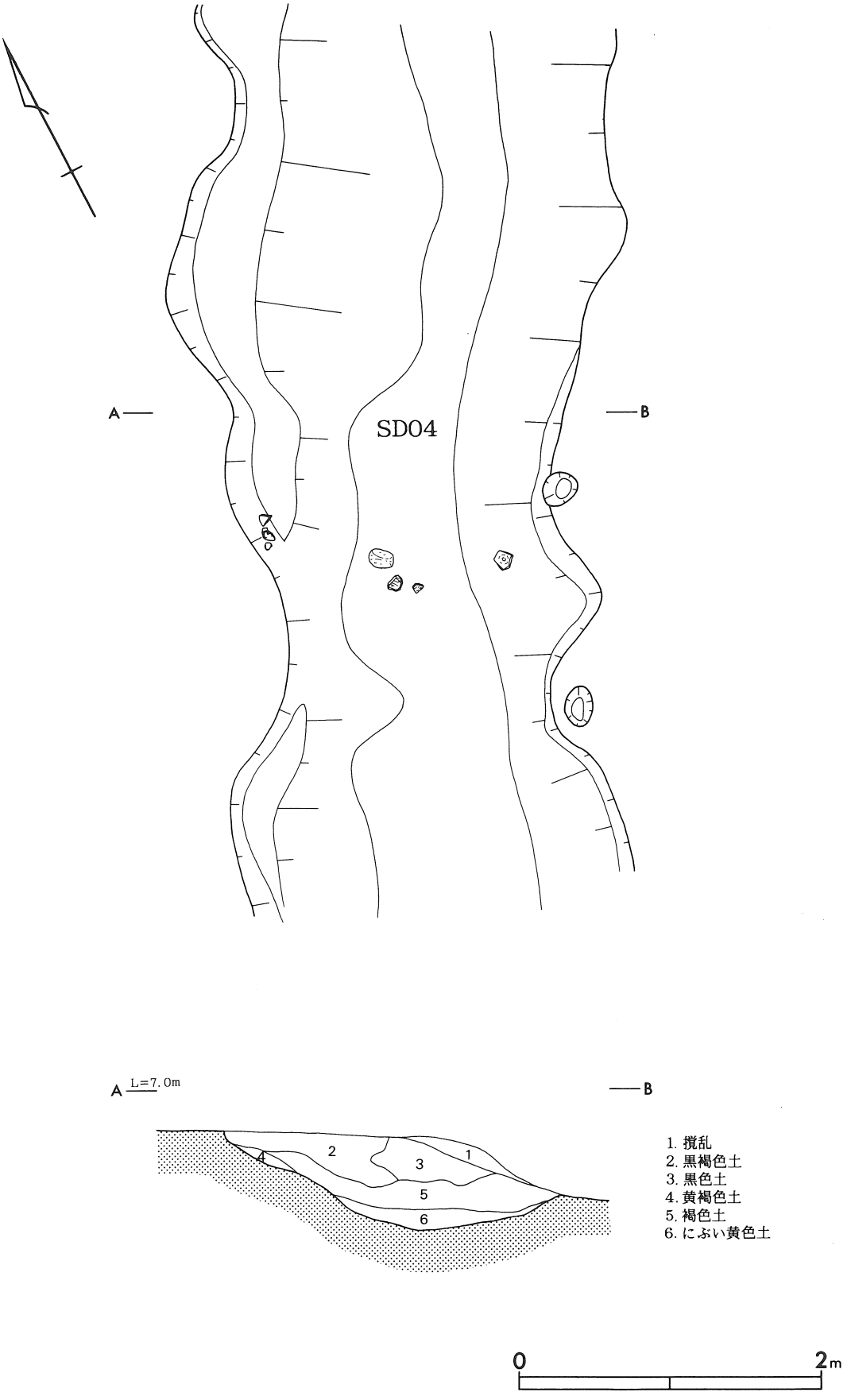
遺構の西側は、黄褐色シルト層上面、東側はやや砂質のオリーブ色シルト層上面で検出した溝状遺構で、南北方向に伸びている。上部、特に東側はかなり削平されているが、検出長6.0m、最大幅約2.8m、深さ約31cmを測る。幅は北側がやや広く、南側は約20cmほど狭くなっている。検出高は、標高約6.74mである。

覆土には、粘土は堆積しておらず、黒褐色土や褐色土が堆積しており、水の流れはなかったと考えられる。断面形は、両肩からなだらかに落ちるレンズ状を呈している。

出土遺物はそれほど多くないが、古墳時代前期初頭の土器が出土している（第49図）。1は、複合口縁の甕か壺であるが、口縁端部をナデて凹面を作っている。複合口縁部の稜は水平方向に向いているが、やや鋭さを欠く。2は、口縁部は厚く、端部に平坦面を作っている。複合口縁部の稜は水平方向に突出しており、内面頸部下にはケズリによる調整がなされている。1、2とも古墳時代前期初頭の土器であり、鹿島町南講武草田遺跡[1]の7期に相当する。3は、高坏の脚部であるが、脚端部の広がりが大きく、外面は脚端部から脚柱部にかけてハケ調整、内面にも脚端部にハケによる調整がなされている。器高もあまり高くならず、器壁も厚いことから搬入品の可能



第49図　ＳＤ０４出土遺物実測図



第50図　ＳＤ０４実測図

性もある。いずれにしても、他の出土遺物から考えると草田７期に相当する遺物であろう。なお、SD04では、弥生時代の遺物は全く認められていない。

遺構の性格は判断し難いが、幅が2.8ｍと大規模であることから、集落を囲繞する環濠であった可能性もある。

ＳＤ０６（第51図）

Ｂ区中央部の黄褐色シルト層上面で検出した溝状遺構で、検出長6.3m、最大幅4.06ｍ、最深部までの深さ1.33ｍを測る。検出高は標高約6.92ｍである。遺構は南北方向に伸び、幅は南側が広く、北側は約1.1ｍほど狭くなっている。

覆土には上層に黒褐色土や黄褐色土が堆積しているが、下層には荒砂をブロック状に含む粘質土が堆積しており、ある程度水の流れがあったことが窺われる。断面の形状は、両肩からやや鋭角に落ちて、底面はほぼ平坦に作り出しており、台形を逆さにしたような形を呈している。なお、確実に掘り直したと思われるような堆積状況は認められない。

Ｂ区では、弥生時代中期中葉から古墳時代前期初頭にかけての大規模な溝状遺構を４条検出しているが、SD06はその中でも最も規模が大きく、出土遺物の量も他を圧倒している。遺物は、上層から下層にかけてどの層位からも出土しているが、中層の黄褐色土中には特に遺物が集中しており、その中には完形品も多く認められる（第52図～第54図）。

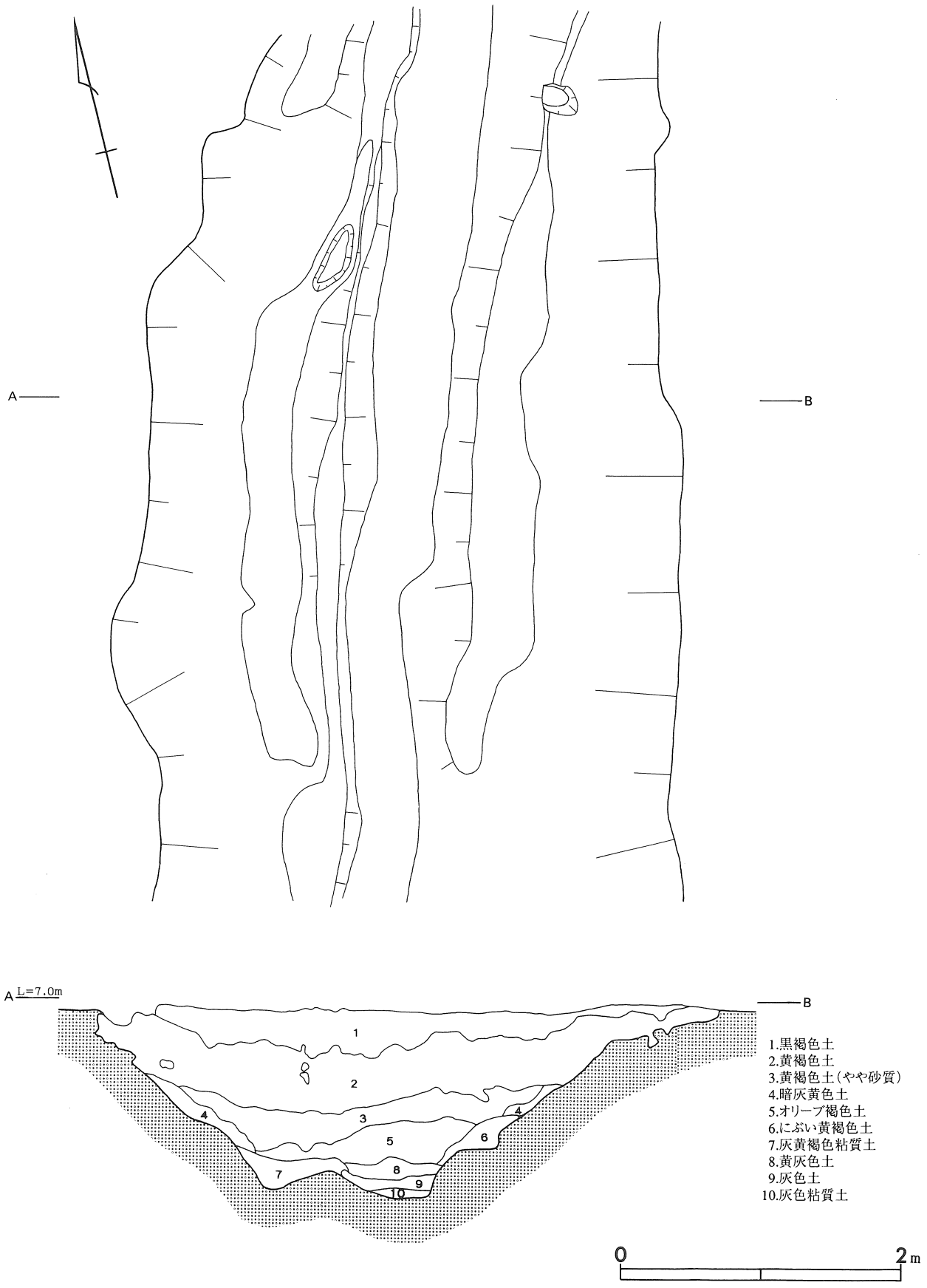
上層では、遺構の両肩から中央部にかけてほぼ万遍なく遺物が出土しているが、弥生時代中期の遺物は両肩部に多く、弥生時代終末期の遺物は遺構中央部に多く認められる。その中には、完形の坏（第61図－63）や直口壺（第57図－36）などが認められる。

中層は、遺物が最も密集して出土した層位で、弥生時代終末期の土器が遺構中央部に集中している。遺物には大形の壺（第59図－39）や甕（第57図－35）などがある。しかし、遺構の両端部には上層と同様に弥生時代中期の土器片が若干認められている。下層でも弥生時代終末期の土器が遺構中央部に集中する傾向にあり、大形の壺（第60図－45）などが認められるが、両端部には弥生時代中期の土器片が認められる。また、最下層の底面直上でも弥生時代中期の土器片が多く認められる。

堆積土、遺物出土状況から判断すれば、弥生時代終末期頃に埋没した溝であることは明らかである。しかし、弥生時代中期の土器が遺構の両端部及び最下層にも認められていることから、弥生時代中期の遺構を一旦掘り直して築かれた溝か、弥生時代終末期に至るまで、浚いながら使用していた溝である可能性もある。いずれにしても、SD06は大規模な遺構であり、集落を囲繞する環濠のような機能をもっていた可能性がある。

弥生時代終末期の土器には、甕、壺、高坏、低脚坏、坏、器台、手捏ね土器が出土している。これらの遺物の中には搬入品と考えられるものが多く含まれており、貴重な資料となっている。また、弥生時代中期の土器には、甕、壺、高坏、鉢などがある。

以下、時期、器種別に区分し、遺物について記述する。



第51図　ＳＤ０６実測図

第52図　ＳＤ０６遺物出土状況実測図（上層）

第53図　ＳＤ０６遺物出土状況実測図（中層）

第54図　ＳＤ０６遺物出土状況実測図（下層）

弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての土器

甕（第55図～第57図、第62図）

最も多く出土している器種である。複合口縁の甕は口縁端部をやや外方に折り曲げるものが多く、甕の体部は倒卵形を呈するものがほとんどである。底部は丸底に近くなるが、105、22、24、27のようにかすかに平底を残す傾向にある。複合口縁部の稜は水平方向に突出するが、101、102のように、やや鋭さを欠くものも認められる。外面は頸部やや下から底部にかけてほぼ全面をハケ調整によって仕上げられており、その中には、やや波頂間の広い波状文を施す14、18、99、104なども認められる。19は、文様としてはほとんど省略化されるほどに波頂間が広がっている。内面は、頸部下かやや下方からケズリ調整がなされているが、21、100のように頸部下に指頭圧痕が認められるものもある。また、22、27のように底部にも指頭圧痕が残っている。

3は甕あるいは壺の口縁部であるが、複合口縁部下方が内側に鋭角に傾斜し、筒状の頸部を有する。8、96は口縁端部がやや厚く、平坦面を作っており、やや新しい様相を示すものである。29も、端部に平坦面を作り、新しい様相を呈しているが、外面の一部には赤色塗彩された痕跡が残っている。祭祀的性格の強い遺物であろう。37は器高44.1cmを測る大形の完形品で、平底を有する。外面は頸部下からハケによる調整、内面は頸部下からケズリによる調整がなされている。38は、かすかに平底を残す底部に鋭利な刃物で「＼」印をつけている。底部の3/4が欠損しているのでよく分からないが、何かの記号と考えられる。

以上のように、SD06内で出土している複合口縁の甕は、一部に古墳時代前期初頭のものも含まれているが、そのほとんどが弥生時代終末期の特徴を示している。これらの土器は、東出雲町大木権現山1号墳・1号土壙資料[2]、鹿島町南講武草田遺跡CD－4、DE－3区土器溜資料[1]、出雲市山持川川岸遺跡SK02、SI01、SB01資料[3]などに相当すると考えられる。

また、単純口縁の甕や複合口縁の甕の一部には、搬入系の土器と考えられるものも出土している。9は、形状は山陰系の土器と変わりなく、複合口縁を有するが、器壁が厚く、胎土も黒褐色で内面頸部下にはハケ調整が認められることから、山陰系の土器を模倣したものと考えられる。12も複合口縁を有するが、胎土は赤褐色で外面に残るハケも細かく途切れる特徴をもつ。101は器壁は厚くないが、重量があり、胎土も赤褐色である。ハケ調整も12のように細かく途切れる特徴をもち、一部にはタタキ痕のような調整も認められる。いずれも搬入品であろう。

31は単純口縁の甕であるが、口縁端部は平坦に作り、やや内側に折り曲げている。外面頸部にはタテ方向のハケが認められる。32も搬入品と考えられる単純口縁の甕で、外面は頸部やや下からハケ、内面は頸部やや下からケズリによる調整がなされている。33は口縁部の器壁がやや厚く、胎土も赤褐色で外面胴部には細かく途切れるハケによる調整がなされている。内面にも頸部やや上方にハケ調整がなされており、12、101の複合口縁の甕と相似した手法が認められる。34は布留O型式に似た特徴をもつ甕で、外面頸部下からは全面にハケ、内面頸部下には指頭圧痕が残り、その下方はケズリによる調整がなされている。畿内からの搬入品か、畿内系の土器を模倣して作ったものであろう。35は、畿内庄内式土器に似た特徴をもつ甕である。単純口縁で、頸部やや下には波頂間の狭い波状文が施され、その下方はハケによる調整がなされている。なお、胴部の一部にはタタキ痕が認められる。69は口縁端部をナデて凹面を作り、やや内側に折り曲げる特徴をもつ。72は口縁端部をやや内側に折り曲

げ、31に認められるように頸部にタテ方向のハケ調整がなされている。

これらの搬入系の土器は、製作地がどこであるのか判断し難いが、12、101、33については、胎土、手法などが相似しており、同じ地域で製作された可能性が強い。また、31、32、33、34、35、69、72については、畿内周辺で製作されたと考えられるが、31、34、69、72については山陰系の土器と胎土がよく似ており、逆に畿内系の土器を模倣した可能性もある。

壺（第55図～第57図、第59図、第60図）

壺は口縁がやや外傾して立ち上がるものが多く、直口壺や大形品、搬入品も含まれており、バラエティに富んでいる。

複合口縁の壺98は、口縁部が外傾し、外面頸部にはミガキによる調整、内面頸部には指頭圧痕が残り、その下方からケズリによる調整がなされている。99は口縁が内傾して立ち上がる特徴をもち、頸部やや下には波頂間の開いた波状文が施されている。109は器高15cmを測る完形品で、胴が球状に張る。口縁部は外傾して立ち上がり、内面底部には指頭圧痕が残っている。30は他に比べると口縁部の外傾がきつく、複合口縁の稜はさほど突出しない特徴をもつ。

39は口径34.6cmを測る大形品で、頸部の器壁は厚く、口縁端部には平坦面を作り出している。外面は頸部やや下からハケによる調整がなされており、波頂間のやや開いた波状文が認められる。内面の頸部やや下には指頭圧痕が残り、その下方からケズリによる調整がなされている。なお、この壺は長さ20cm、厚さ13cmほどの三角形の石（片側は欠損か？）が口縁部に突き刺さるような状態で出土している。大形品ということを考えると壺棺として使用されていた可能性もある。40は口縁部がやや外傾して立ち上がり、端部は丸くおさめている。外面は頸部付近から下方にかけてハケ、内面は頸部やや下からケズリによる調整がなされている。

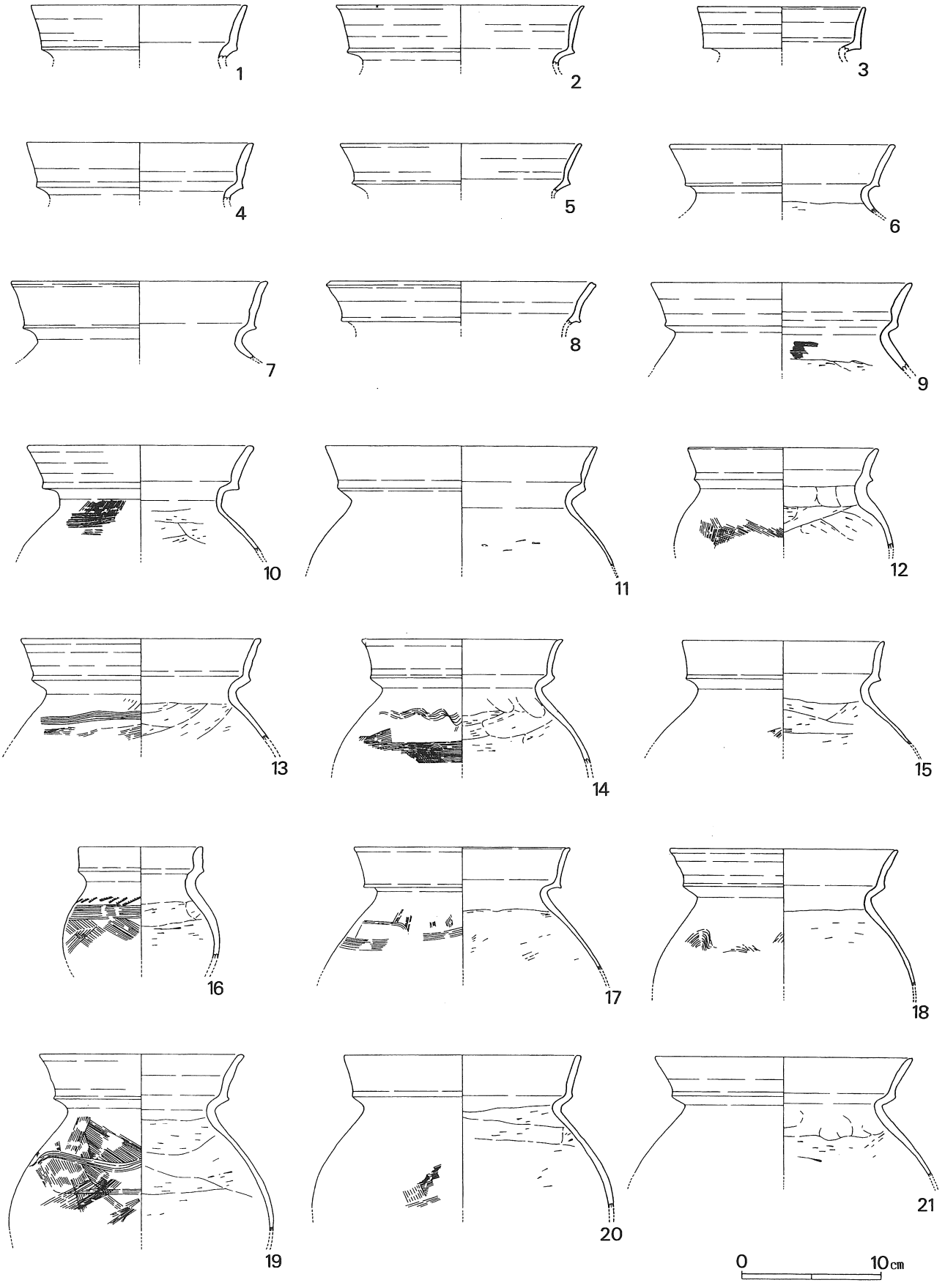
45は、口径27.4cmを測る大形品で、外面頸部には二枚貝の貝殻腹縁を使用した綾杉文が施され、凹線で区画されている。内面は頸部やや下からケズリによる調整がなされている。綾杉文を頸部に施す壺は、三刀屋町松本１号墳[4]や東出雲町夫敷遺跡[5]などでも出土しており、壺棺として使用された可能性もある。

複合口縁の直口壺には、41、42がある。いずれも口縁部の器壁は薄く、端部は引き伸ばしたように薄くなる。外面胴部にはハケ、内面は頸部やや下からケズリによる調整がなされている。このような形状をもつ直口壺は、鹿島町南講武草田遺跡でも出土している。

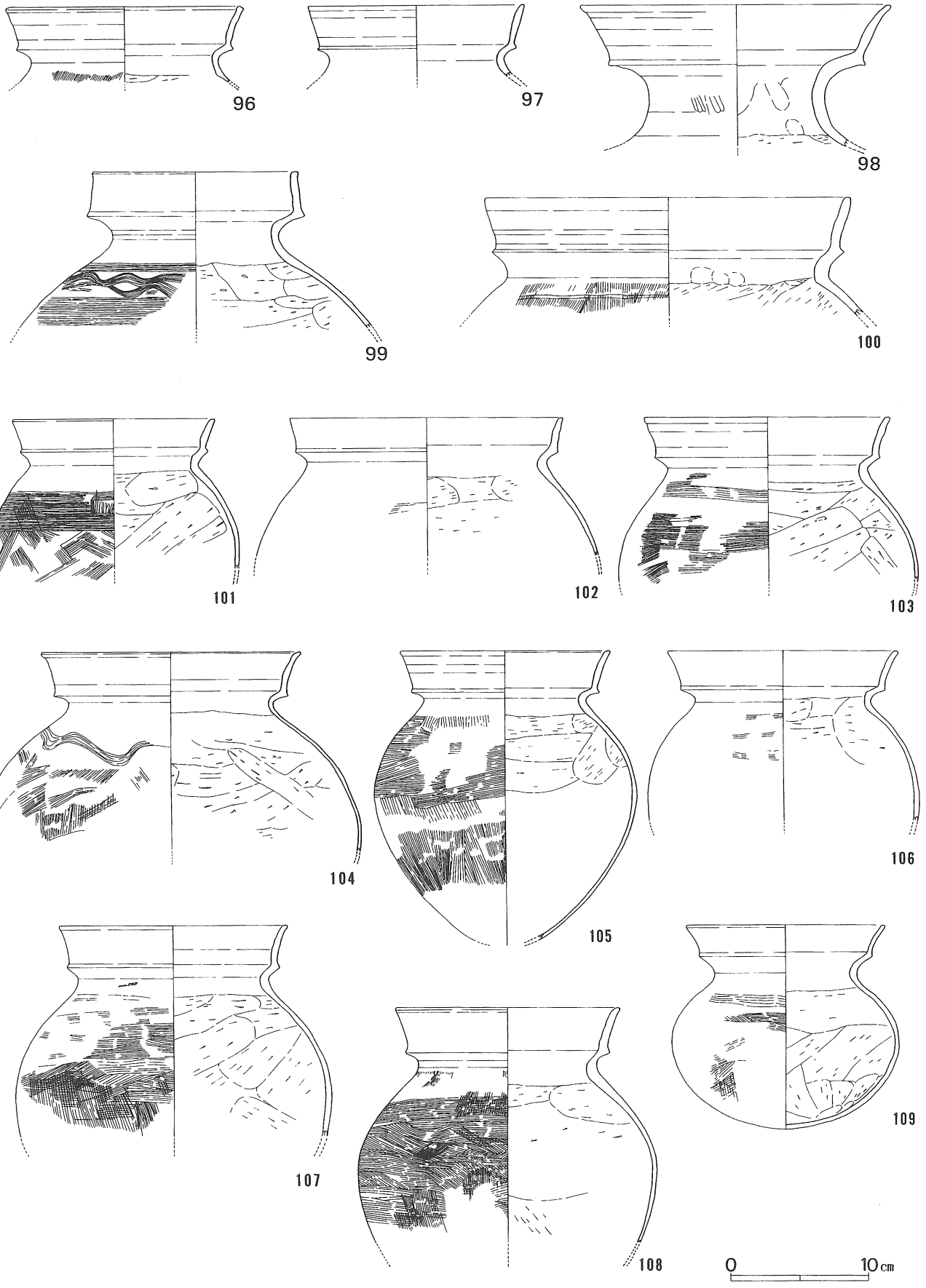
以上のような壺の形態は、甕と同様に弥生時代終末期の特徴をもつもので、草田遺跡では６期、山持川川岸遺跡では４期に相当する資料である。

また、壺にも搬入品と考えられるものが出土している。16は複合口縁の小形壺であるが、胎土は黄褐色で器壁が厚く、複合口縁部の稜はやや鋭さを欠いている。外面には貝殻腹縁による刺突文が施され、胴部のハケは細かく途切れる特徴をもち、内面は頸部やや下からケズリによる調整がなされている。36は小形で単純口縁の直口壺であるが、同様に器壁が厚く、胎土は黄褐色で、口縁部、胴部には細かく途切れるハケ調整がなされている。

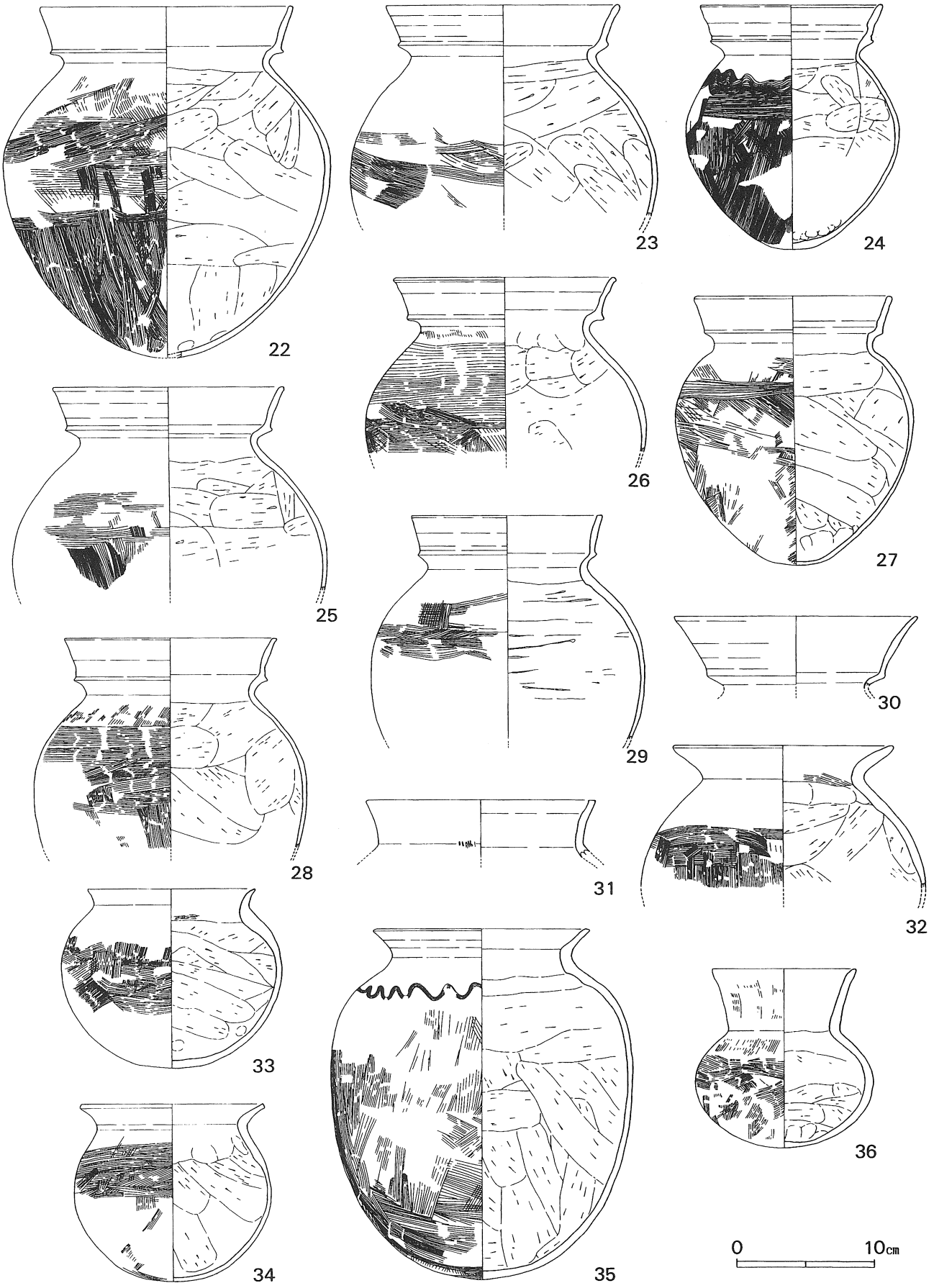
44は大形の壺であるが、この時期の大形品が平底を残しているのに対し、丸底で胴が張るミカンのようなプロポーションを呈している。この壺は、頸部を下方、底部を上方に向けて、頸部から上は意



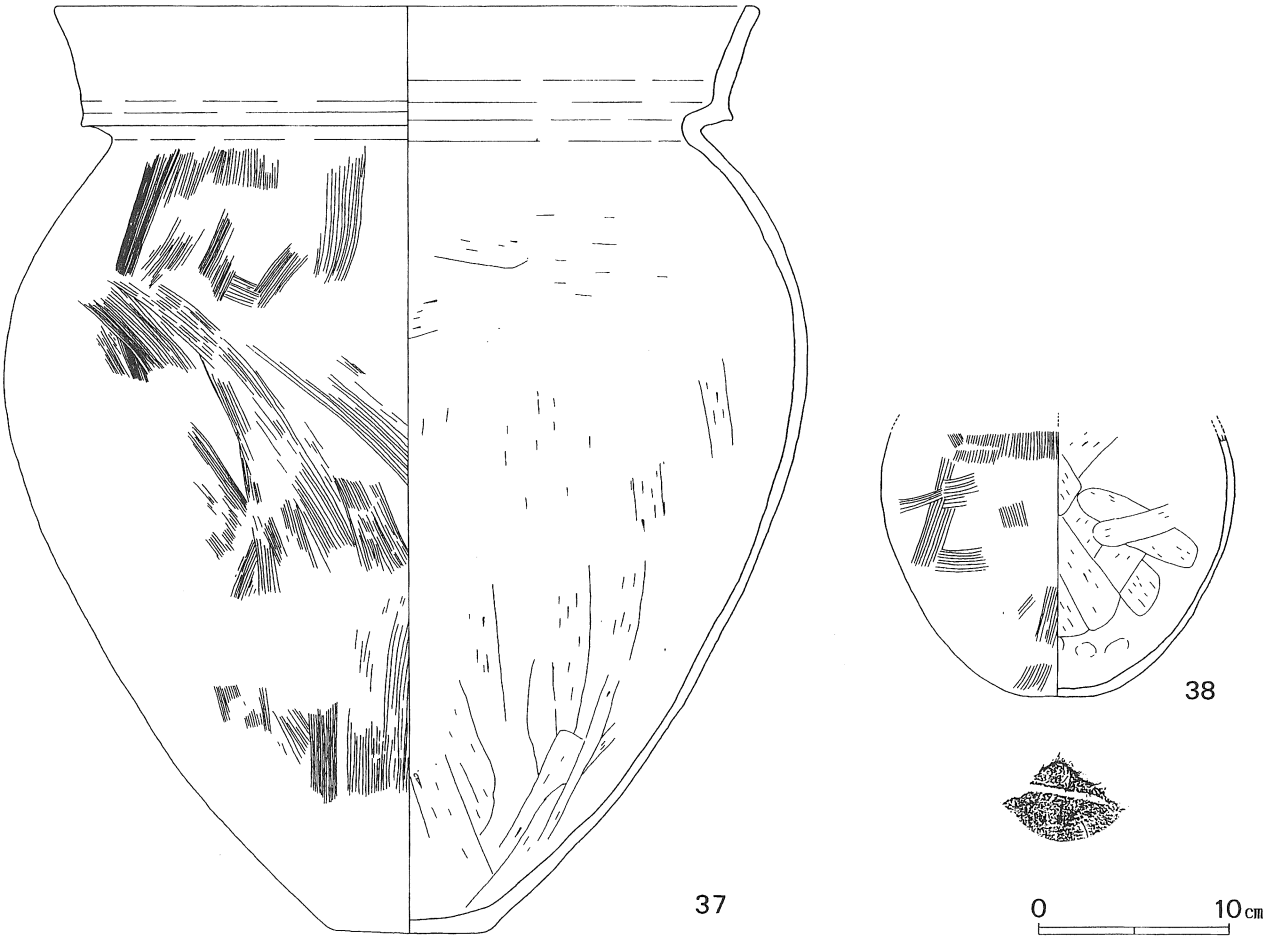
第55図　ＳＤ０６出土遺物実測図(1)



第56図　ＳＤ０６出土遺物実測図(2)



第57図　ＳＤ０６出土遺物実測図(3)



第58図　ＳＤ０６出土遺物実測図(4)

図的にはずされたと考えられる状態で出土している。39、45と同様に壺棺として使用されていた可能性もあろう。なお、胎土はやや赤みがかった淡褐色で器壁は厚く、外面は胴部全面にハケ、内面は頸部やや下方にハケ、その下からケズリによる調整がなされており、胎土、手法がやや異なることから搬入品と考えられる。

高坏（第61図）

弥生時代終末期のものと考えられる高坏は、４点出土している。

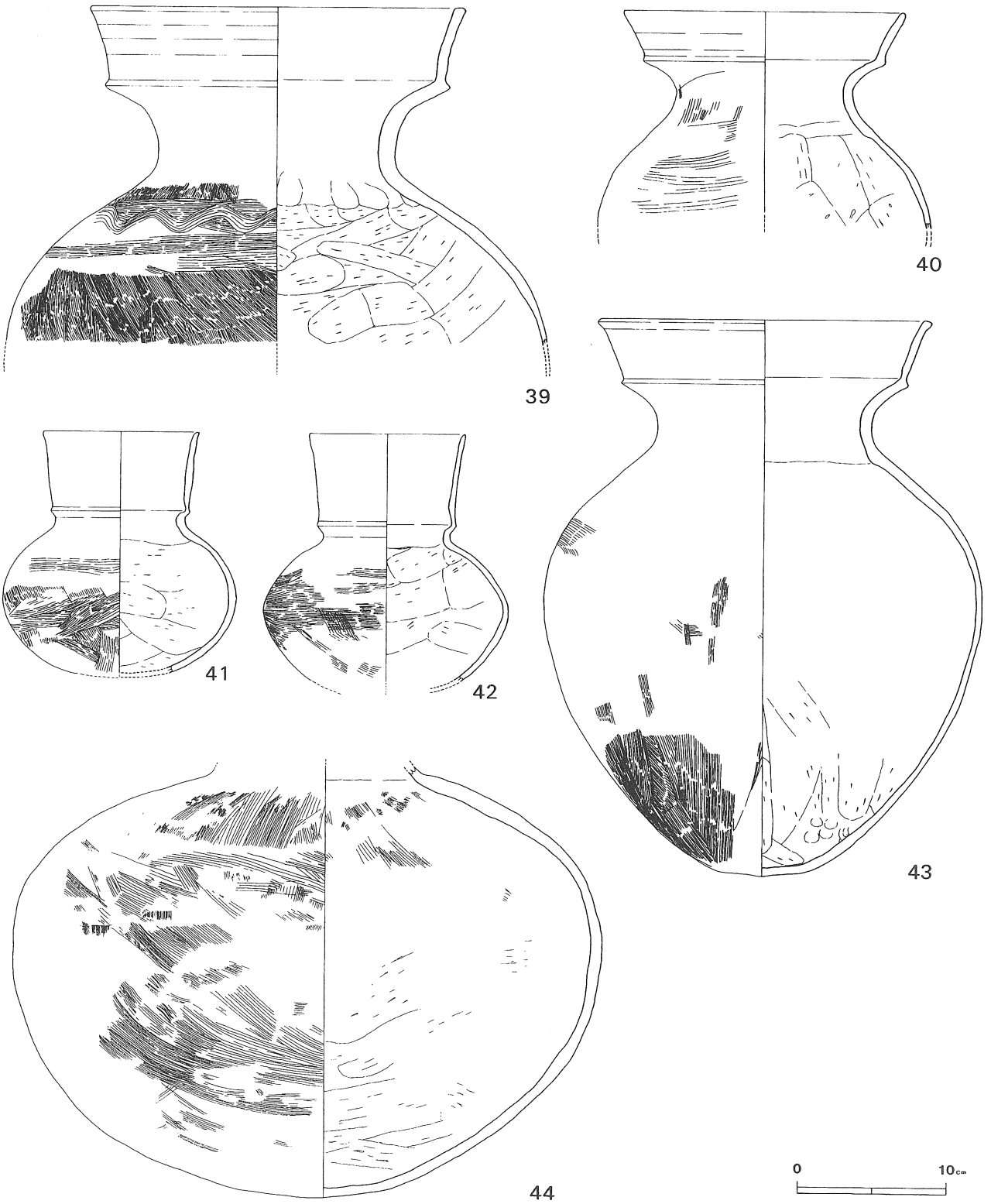
47は、裾部が広がり、脚部の高いやや大形のもので、脚端部は丸くおさめている。48は、やや小形の高坏であるが、脚端部には平坦面を作り出し、外面脚柱部はタテ方向のミガキ、内面はケズリによる調整がなされている。なお、円盤充塡法により脚部と坏部をつないでいる。

46は、大形の高坏の坏部であるが、胎土はやや赤みがかった褐色で器壁が厚く、口縁端部は外反し、丸くおさめている。外面はハケ調整後にタテ方向のミガキがなされ、内面は坏底部に放射状のハケ、口縁内部にはタテとヨコ方向にミガキが認められる。胎土、手法などがやや異なることから、搬入品と考えられる。50は、坏部が深い高坏の坏部であろうが、複合口縁をもつ。外面坏底部には細いハケ、内面は、坏底部から口縁部にかけてタテ方向にミガキ（一部ヨコ方向）が認められる。このようなタイプの高坏は、類例があまりない。

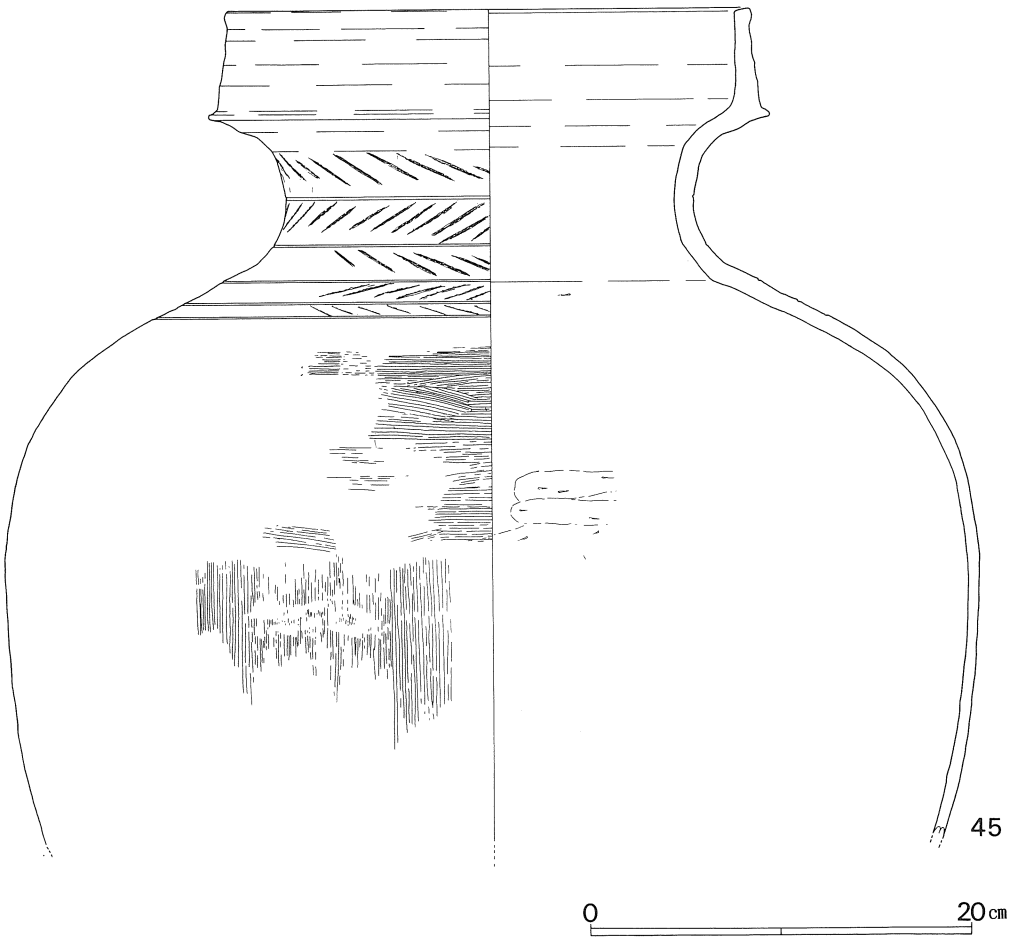
以上の高坏は、甕、壺などの時期から、草田遺跡６期、山持川川岸遺跡４期に相当する資料であると考えられる。

低脚坏（第61図）

低脚坏と考えられるものは、７点出土している。



第59図　ＳＤ０６出土遺物実測図(5)



第60図　ＳＤ０６出土遺物実測図(6)

坏部外面、内面ともミガキによる調整がなされているが、49、53などのように外面にハケ調整の後、ミガキがなされているものもある。54は低脚坏の脚部であるが、脚端部はやや上方に反り、凹みを作り出している。56は脚端部を丸くおさめる。

以上のような低脚坏は、甕、壺などの時期から草田６期、山持川川岸４期に相当する資料と考えられるが、この時期の低脚坏にしては総じて器壁が厚く、坏部も深さがあり、51、52、53などのようにヨコ方向にミガキを入れるのが特徴である。在地的な手法の特徴であるのかは判断し難いが、山陰系の土器を模倣したものもあるかもしれない。

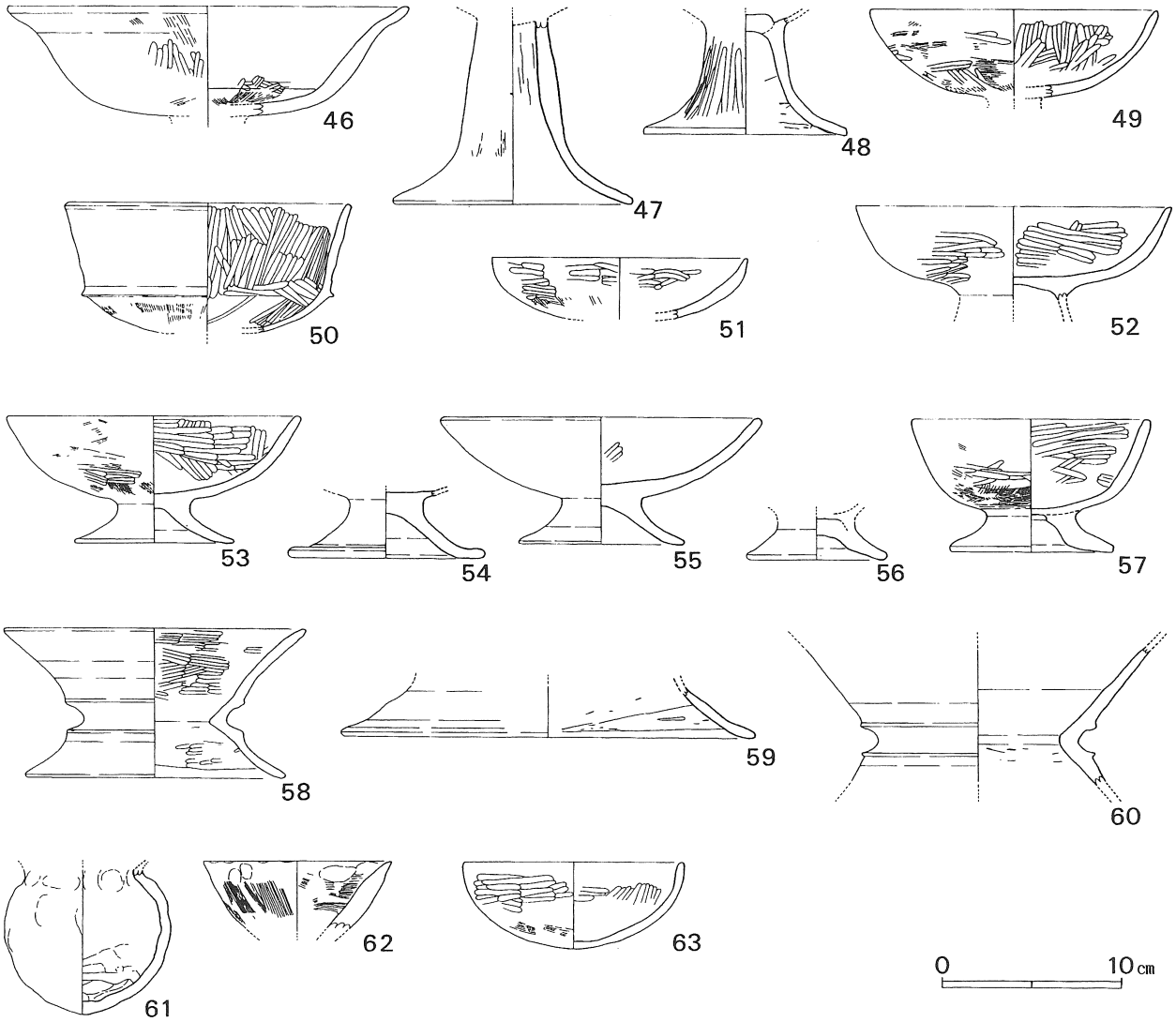
57は、深い坏部をもち、器壁の厚いもので、外面坏部には細かく途切れるハケ調整の後、ミガキがなされている。内面坏部はヨコ方向にミガキがなされており、甕12、101、33、壺36などと同地域で製作された搬入品の可能性が強い。

器台（第61図）

器台は３点出土しているが、この時期の甕や壺が直立不可で丸底化する傾向にあることから考えると、極端に出土量が少ない。

59は器台脚部であるが、外面はナデ、内面はケズリにより仕上げられている。60は外面はナデ、内面受部は風化が著しいが、ミガキによる調整がなされているようで、脚部はケズリによる調整がなされている。筒部は短く、太くなっている。なお、59、60は胎土や焼成の状態から同一の器台と考えられる。

58は胎土が赤褐色で、筒部は短く、外面はナデにより調整されているが、内面受部はヨコ方向のミ



第61図　ＳＤ０６出土遺物実測図(7)

ガキ、脚部にもヨコ方向のミガキの後、ケズリが認められる。胎土、手法がやや異なることから、搬入品の可能性もある。

以上の器台は甕、壺などの時期から、草田６期、山持川川岸４期に相当すると資料と考えられる。

坏（第61図－63）

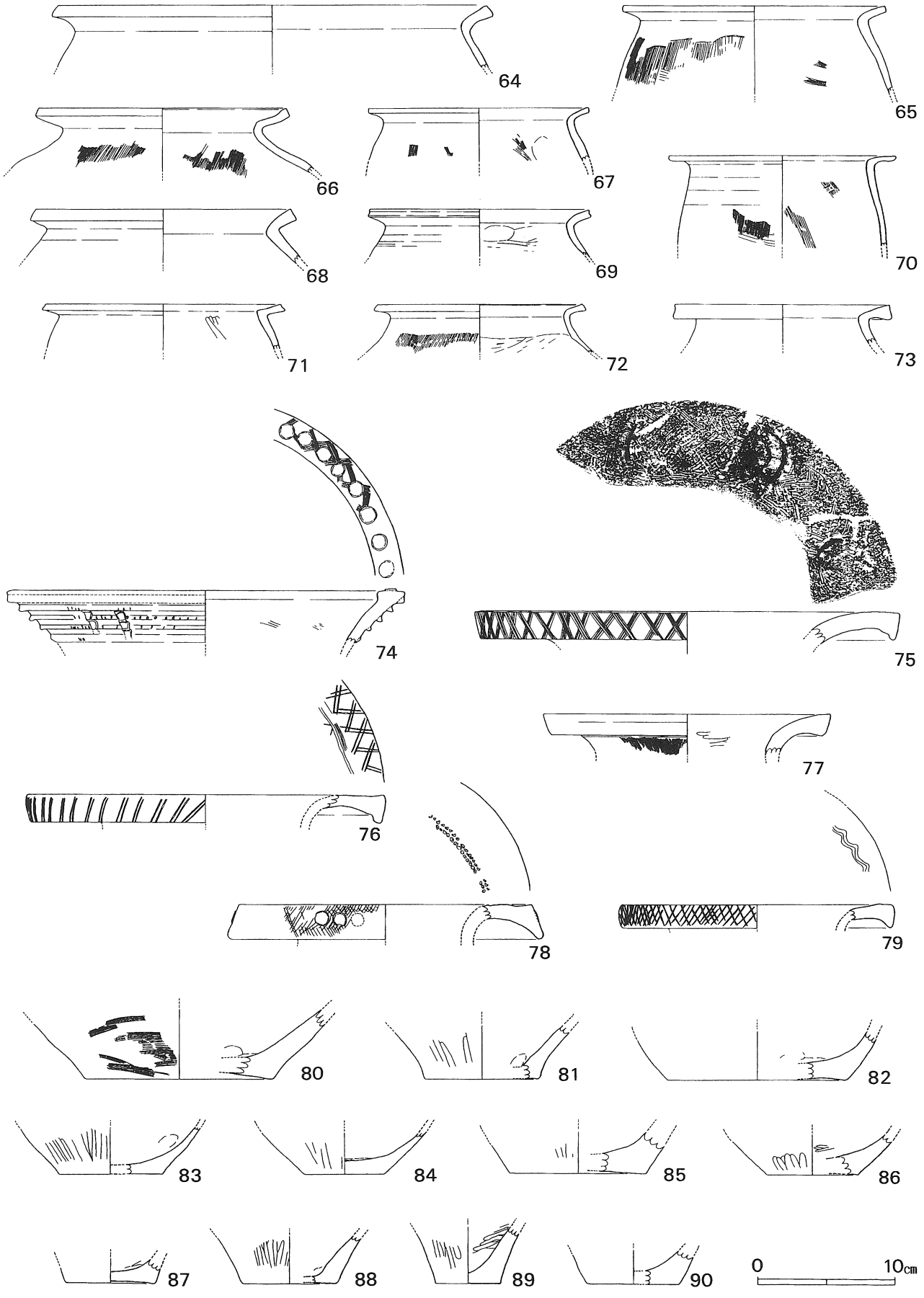
完形の坏が１点出土している。口縁端部はほぼまっすぐに立ち上がり、丸くおさめる。底部は丸底であるが、ややすぼまっている。外面はヨコミガキによる調整がなされているが、下方の一部にはハケが認められる。内面はタテ、ヨコ方向のミガキにより仕上げられている。

山陰では、この時期に坏が認められていないことから、搬入品である可能性が強い。

手捏ね土器（第61図）

手捏ね土器は２点出土している。

61は小形の壺で、頸部には小さく、間隔の狭い指頭圧痕が残っている。62は鉢と考えられるが、外



第62図　ＳＤ０６出土遺物実測図(8)

面はタテ方向のハケ、内面にはヨコ方向のハケが認められ、61と同様、口縁部には小さく、間隔の狭い指頭圧痕が残っている。61、62は小児による製作の可能性もあろう。

弥生時代中期の土器

SD06では、弥生時代終末期の土器が中央部に集中して出土しているが、遺構の端部や最下層からは弥生時代中期の土器がかなり出土している。

以下、弥生時代中期の土器を器種別に記述する。

甕（第62図）

甕は、口縁部が外方に強く屈曲するものが多い。64、68、73は口縁部が外方に短く屈曲し、端部に平坦面を作っており、やや上下に拡張する傾向にある。65、66、67は口縁部の厚みはやや薄く、頸部下には内外面ともハケによる調整が認められる。70は、口縁部が水平方向に強く屈曲し、端部はやや丸くおさめており、やや古い様相を示している。71は、内面頸部下にはタテ方向のミガキが認められ、口縁端部は外方に強く屈曲している。

これらの甕は、一部にやや古い様相を示すものも認められるが、おおよそ松本編年III－２様式[6]に相当する資料と考えられ、弥生時代中期中葉のものであろう。

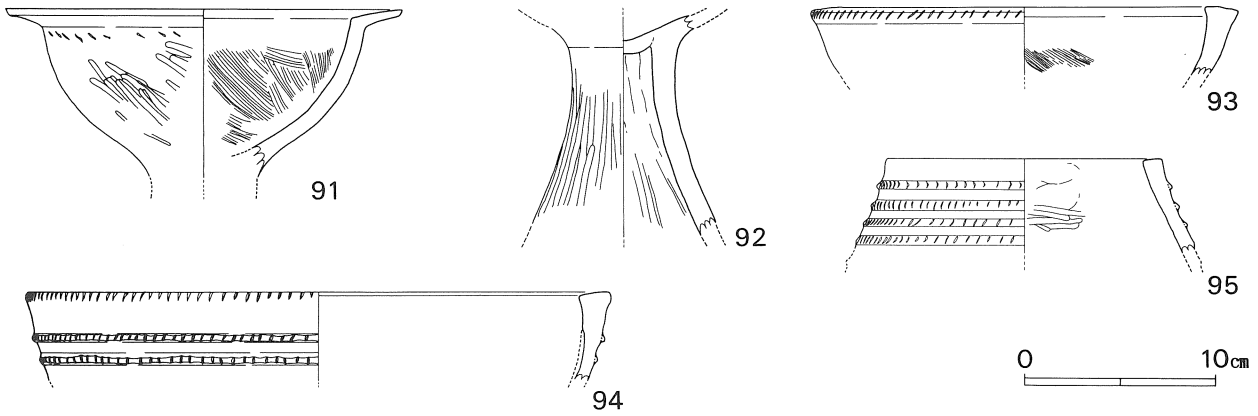
壺（第65図）

壺は口縁端部が外反し、やや下方に垂れ下がるものが多く、加飾性が強い。

74は、わずかに外傾してのびる長めの口頸部を有するもので、口縁端部は拡張されて上面に平坦面を作っている。平坦面には円形浮文が巡らされ、その間には細かいハケにより菱形文を施している。外面には刻目文を施した５条以上の貼付突帯を有し、さらに棒状浮文を貼り付けるなど、加飾性が強い。75は口縁端部が外反し、下垂する。口縁内面には櫛描による直線文、斜格子文や三日月形の浮文が施され、口縁平坦部にも斜格子文が施されている。76は口縁端部が下垂し、内面には櫛描による斜格子文、直線文が施され、平坦面には斜線文が施されている。77は口縁端部は下垂しないが、拡張して平坦面を作っている。装飾は認められないが外面頸部にはタテ方向のハケ、内面頸部にはヨコ方向のミガキが認められる。78は口縁端部が大きく下垂し、内面頸部付近には刺突文、口縁端部平坦面には円形浮文、櫛描による斜格子文が施されている。79は、口縁端部が下垂し、その平坦面には櫛描による斜格子文、内面にはやや間隔の狭い波状文が施されている。

以上のような壺は、甕と同様におおよそ松本編年III－２様式に相当する資料であり、弥生時代中期中葉のものであろう。

また、甕あるいは壺の底部も出土しており、その中には82、84、86にみられるように、底部からやや内湾ぎみに立ち上がるものや、81、89などのようにやや直立ぎみに立ち上がって外反するものなどがある。これらの底部は、外面はタテ方向のミガキ、内面もミガキによる調整がなされるのが一般的で、内面底部付近には指頭圧痕が残っている。80は、底径13.5cmを測る甕か壺の底部であるが、外面はミガキによる調整をした後、ハケによる調整がなされており、内面はミガキによる調整で、底部付近には指頭圧痕が残っている。



第63図　ＳＤ０６出土遺物実測図(9)

高坏（第63図）

高坏と考えられるものは、３点出土している。

91は、口縁部が水平方向に突出する。外面頸部にはヘラ状工具による刺突文が施され、その下方はミガキによる調整がなされている。内面坏部はミガキ調整した後、ハケによる調整がなされている。92は脚柱部であるが、胎土、焼成などが似通っていることから、91と同一品の可能性が強い。外面はタテ方向のミガキ、内面はタテ方向のハケによる調整がなされており、坏部とのつなぎには円盤充塡法が用いられている。93は、口縁端部が肥厚して、上面にフラットな面を作り出している。外面の口縁端部には刻目文が施され、坏部内面にはミガキ調整した後、細かいハケが認められる。

これらの高坏は、松本編年III－２様式に相当する資料であり、弥生時代中期中葉のものであろう。

鉢（第63図）

鉢は２点出土している。

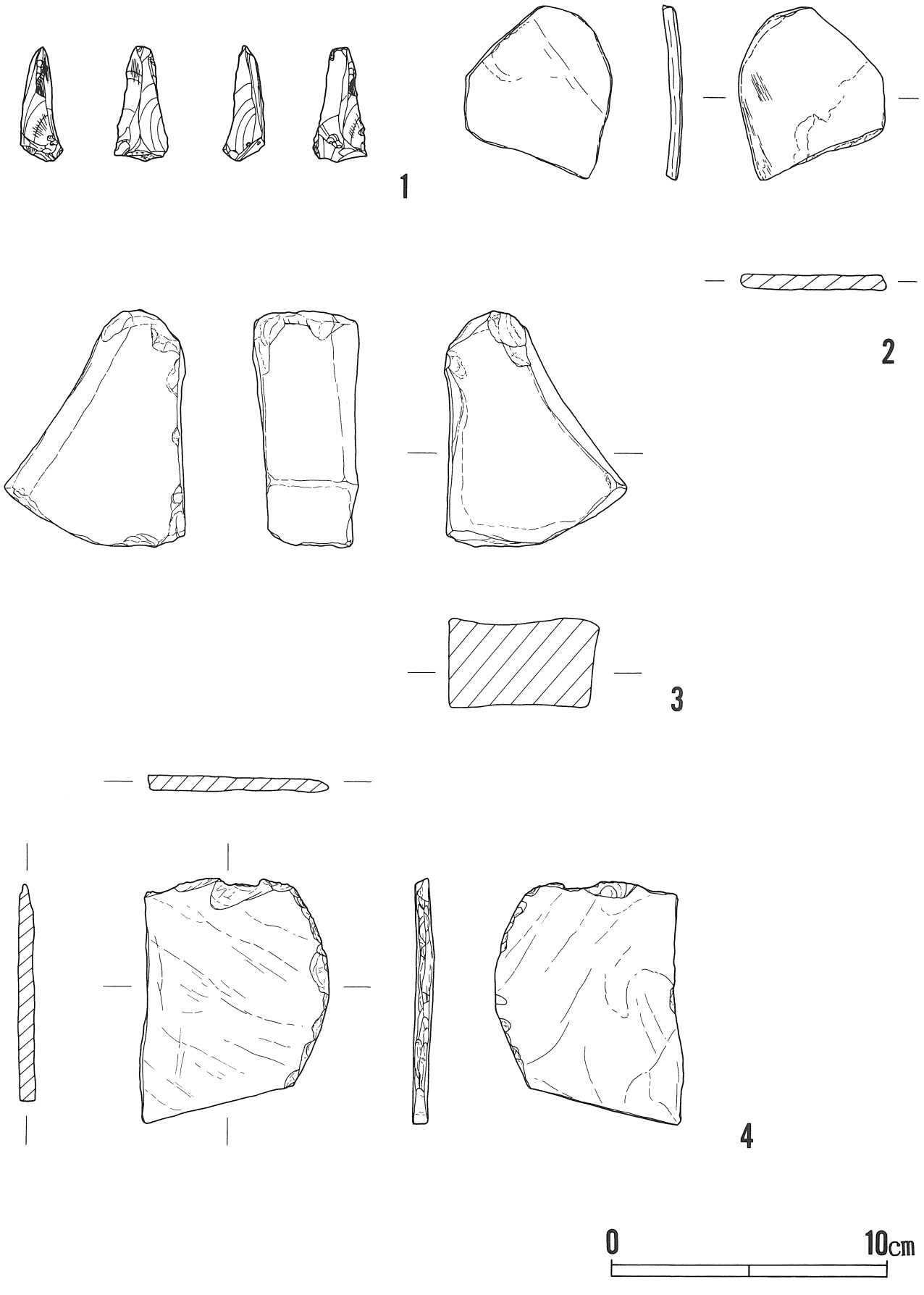
94は、口縁端部が肥厚して、上面にフラットな面を作り出している。外面には刻目文を施した貼付突帯文が２条以上認められ、口縁端部にも刻目文が施されている。95は、口縁端部がやや肥厚して上面にややフラットな面をもつ。外面は刻目文を施した４条以上の貼付突帯文が認められ、内面にはヨコ方向のミガキが認められる。なお、95のような器種は、無頸壺と呼称されるのが一般的であろう。

いずれも、松本編年III－２様式の範疇に入るものであろう。

石器（第64図）

SD06では、上記のような土器のほか、石器も数点出土している。

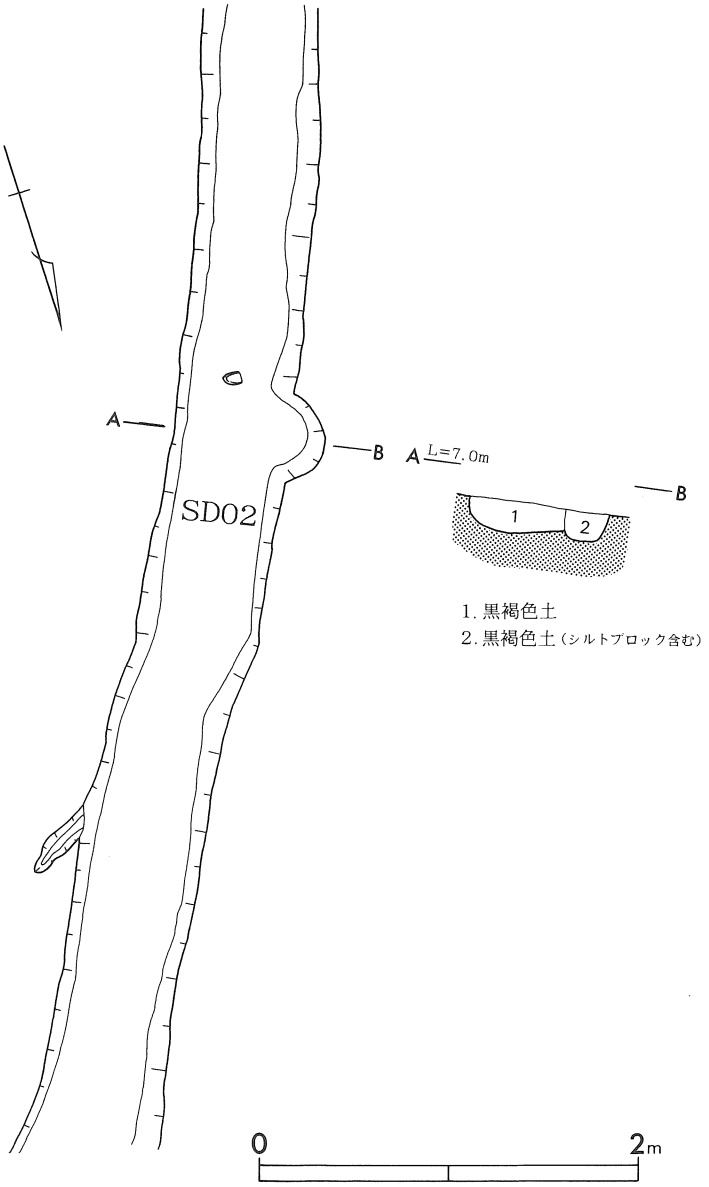
１は黒曜石であるが、単体で製品として使用されたものではなく、剝片であろう。最大長4.2cm、最大幅1.9cm、最大厚1.4cmを測る。なお、黒曜石は１点のみの出土であった。２は欠損しており、用途は不明であるが、残存している側面には磨いて平坦な面を作り出している。石材はシルト質疑灰岩を使用している。３は砥石である。欠損しているが、全面を使用していたようで、上下両面と側面の片側は、使用によりかなり凹んでいる。石材は細粒花崗岩である。４は欠損しているが、残存している側面は打ち欠いて刃部のように作り出されている。かなり細かく作り出しており、石包丁として使



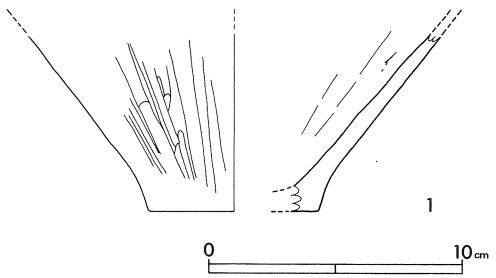
第64図　ＳＤ０６出土遺物実測図(10)

用されていた可能性もある。石材は安山岩を使用している。

1、2は、弥生時代終末期の土器が集中している地点から出土しており、当該期の遺物である可能性が強い。3、4は遺構の肩部から出土したもので、弥生時代中期中葉の遺物である可能性が強いが、断定するまでには至らない。



第65図　ＳＤ０２実測図



第66図　ＳＤ０２出土遺物実測図

(3)　弥生時代中期の遺構

弥生時代中期の遺構は、中央部黄褐色シルト層上面で、溝状遺構3、土坑2のほか、ピット状遺構を多数検出している。また、黄褐色シルト層は、弥生時代終末期の遺構であるSD06東側では標高約6.8mであるのに対し、西側では標高約6.4mと40cmほどの高低差があって、低くなっている部分では、SD05に伴うと考えられる土塁状遺構を検出している。

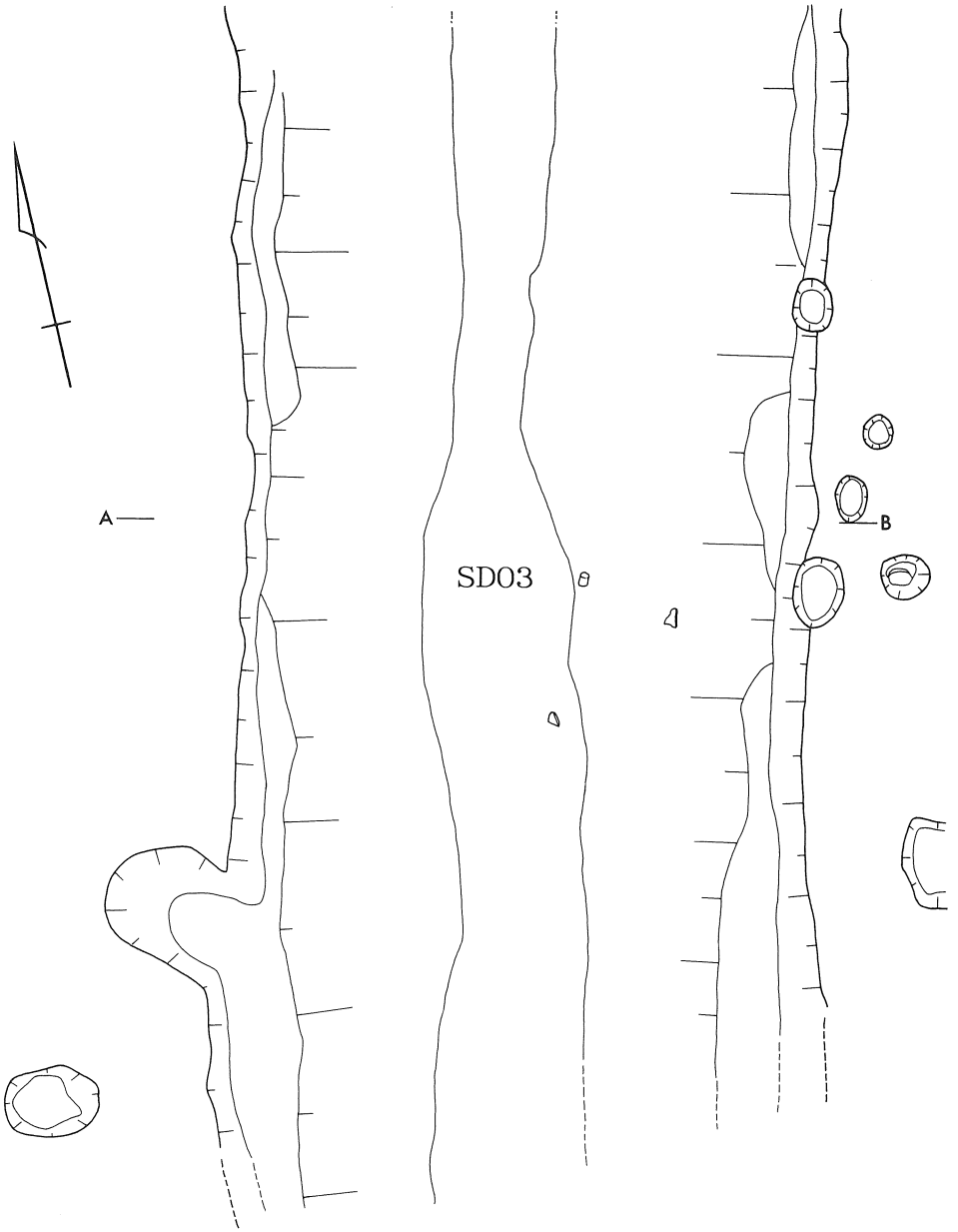
ＳＤ０２（第65図）

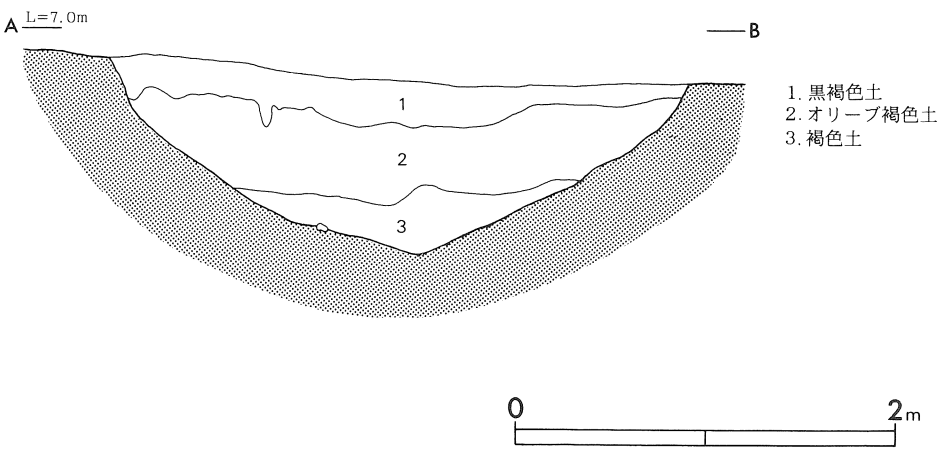
弥生時代終末期の遺構であるSD06の東側で検出した溝状遺構で、南北方向に伸びている。他の溝状遺構に比べると規模は小さく、検出長6.0m、幅約65cm、深さ約18cmを測る。検出高は、標高約6.84mである。

覆土には黒褐色土が堆積しており、両肩から鋭角に落ちて、底面はやや丸く作り出している。

遺物には小片が多いが、弥生時代中期のものと考えられる土器のみが出土しており、弥生時代終末期の遺物は全く認められなかった。

第66図－１は壺か甕の底部であるが、外面はタテ方向のミガキ、内面にはケズリによる調整が認められる。他の出土遺物から考えると弥生中期中葉～後葉、松本編年Ⅲ－２～Ⅳ－１様式にあたるものと考えられる。





第67図　ＳＤ０３実測図

遺構の性格は不明であるが、覆土に粘質土が堆積していないことから、水の流れはなかったようである。

第68図　ＳＤ０５実測図

ＳＤ０３（第67図）

弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構であるSD06とSD04の中ほどで検出した溝状遺構で、南北方向に伸びている。SD02と同様、黄褐色シルト層上面で検出しており、検出高は、標高約6.88ｍである。規模は大きく、検出長6.0ｍ、幅約3.0ｍ、深さ約92㎝を測るが、上部はかなり削平されているようである。

覆土には黒褐色土やオリーブ褐色土が堆積しているが、下層の褐色土はやや粘質である。なお、掘り直しと考えられるような堆積状況は認められなかった。

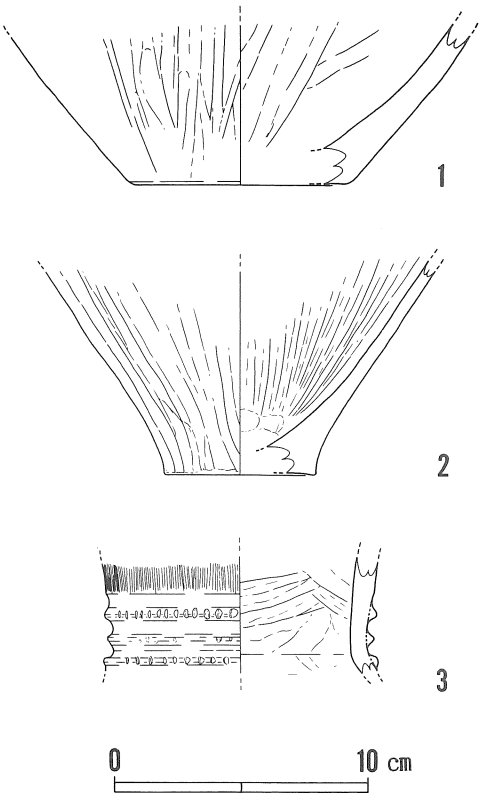
断面の形状は、両肩からややなだらかに落ちて底面の幅は狭くなり、Ｖ字状を呈している。

遺物の出土量は、他の遺構に比べると極端に少ないが、SD02と同時期の遺物が出土しており、弥生中期中葉～後葉にかけての遺構であろう。

遺構の性格は判断し難いが、規模が大きく、断面がＶ字状を呈すことなどから、

集落を囲繞する環濠の可能性もある。

なお、下層に粘質土が堆積していることから、ある程度水の流れがあったと考えられる。



第69図　ＳＤ０５出土遺物実測図

ＳＤ０５（第68図）

弥生時代終末期の遺構であるSD06の約1.8ｍ西側で検出した溝状遺構で、南北方向に伸びる。

検出長6.0ｍ、幅約2.8ｍ、深さ約96㎝を測る大規模な遺構で、検出高は標高約6.94ｍのところにある。

覆土には黒褐色土や灰褐色土が堆積しているが、下層に堆積している褐色土はやや粘質であり、SD03と同様にある程度の水の流れがあった可能性がある。なお、掘り直しと考えられるような堆積状況は認められない。

断面の形状は、両肩から自然な感じで落ちるが、西側は一旦平坦面を作り出してから底面へと落ちている。底面には僅かに平坦面を作り出し、全体的な印象としてはSD03と同様にＶ字状を呈している。

遺物には細片が多いが壺の口縁部に斜格子文を施すものや、頸部に突帯文を施すものが多く出土しており、松本編年Ⅲ－２様式に相当するものと考えられる。

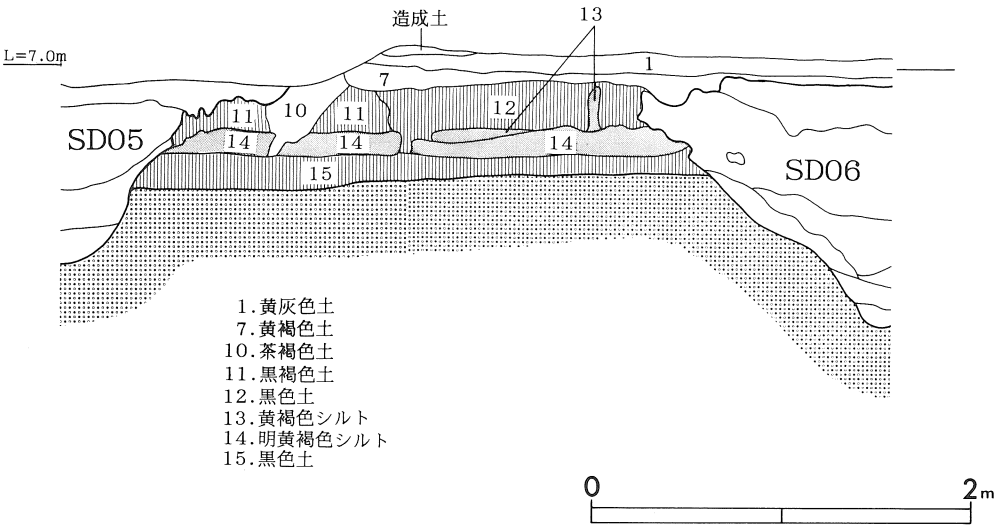
第69図－１、２は壺か甕の底部であるが、１はやや内湾ぎみに立ち上がり、２はやや外反ぎみに立ち上がる。１、２とも内外面にタテ方向のミガキによる調整が認められる。３は壺の頸部であるが、外面は３条以上の貼付突帯に刻目文を施し、その上方にはハケによる調整がなされている。内面にはヨコ方向のミガキが認められる。以上のような土器は、いずれも弥生時代中期中葉にあたるものと考えられる。

遺構の性格は、東側に土塁状遺構を伴っていること、規模も大きく、断面がＶ字状を呈すことなどから、SD03と同様に集落を囲繞する環濠の可能性もある。

土塁状遺構（第70図）

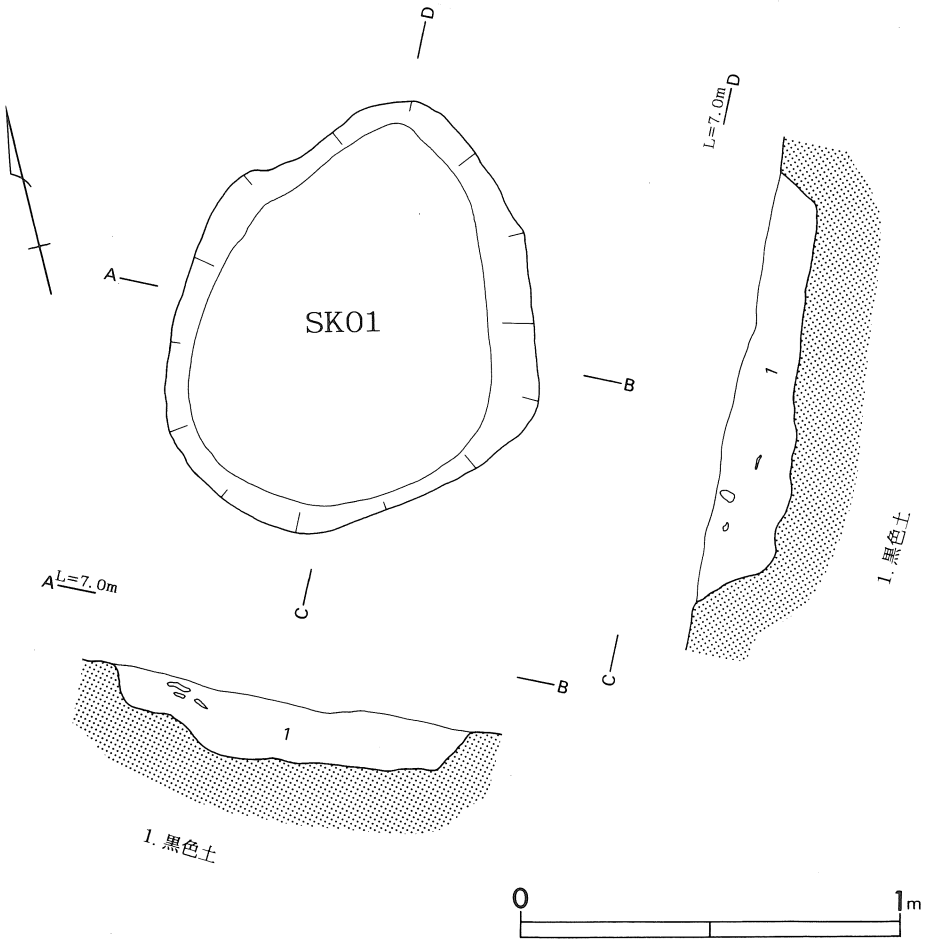
SD05の東側で認められた検出幅約3.1ｍ、厚さ約50㎝の部分を人為的に盛土した土塁状の遺構である。この遺構はSD05に伴うものと考えられ、東側は弥生時代終末期の遺構であるSD06によって切られている。

遺構は、この地点における基盤層となっている黄褐色シルト層の上面に黒色土（15層）、その上面には地山と同じような明黄褐色シルト層（14層）を盛った上に黒色土（12層）、黒褐色土（11層）を盛土したもので、中央の14層をサンドイッチ状に挟んでいる。11～15層とも固く締りがあり、黒色土は真っ黒である。



第70図　土塁状遺構セクション図

現状では、50cmほどの厚みであるが、上部が削平されているため、本来はより厚い盛土があったと考えられる。また、盛土部分はSD05の深さの中間あたりにまで達しているが、これは、基盤層である黄褐色シルト層が、SD06の東側では標高約6.8mと高いのに対して、この地点では標高約6.4mと

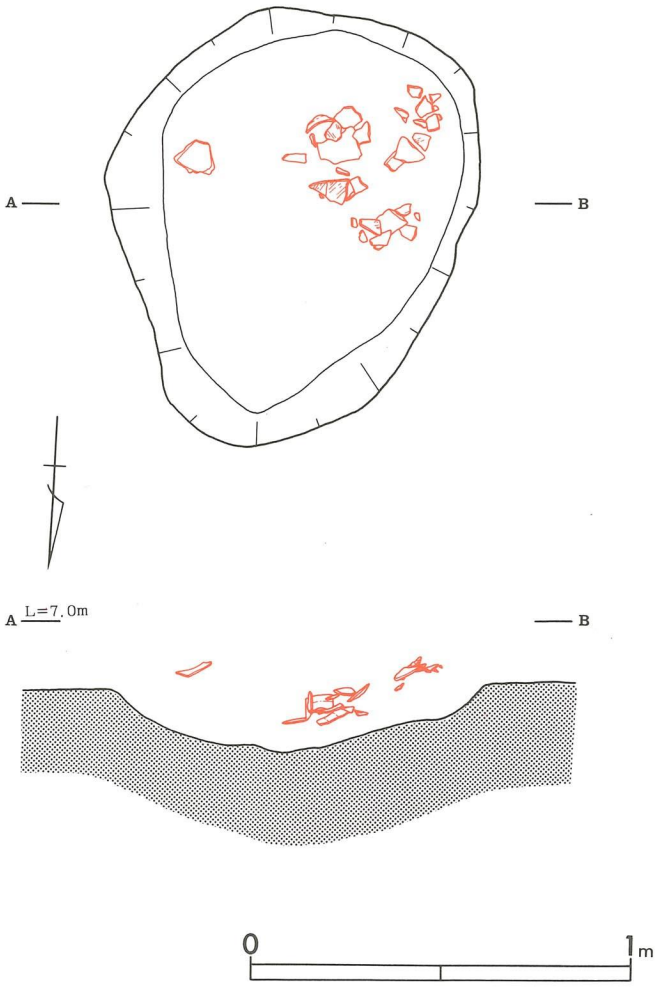


第71図　ＳＫ０１実測図

低くなっていることと関連するものと考えられる。すなわち、もともと標高の低かった地点に盛土をしたのち、SD05が築かれたのではないだろうか。

なお、環濠に土塁を巡らした確実な例は、全国的にも現在のところ数例の報告があるにすぎず、貴重な資料であると言える。

しかしながら、上部が削平されているため、この土塁状遺構が確実にSD05に伴うものとは断定できず、SD05も約6mの部分を検出したのみで、環濠と断定するには資料として不充分であることは否めない。



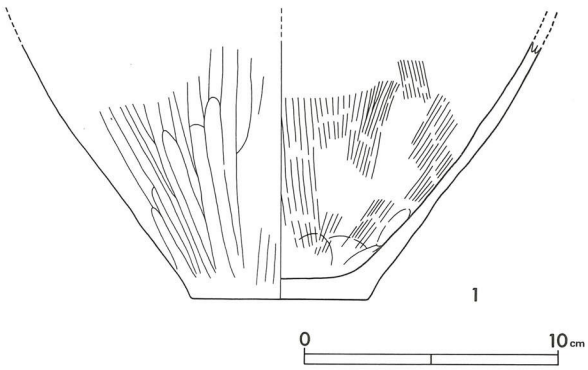
第72図　SK01遺物出土状況実測図

SK01（第71、72図）

弥生時代中期中葉頃の遺構であるSD02から約2.0m東で検出した土坑である。検出長は、南北1.17m、東西0.96m、深さ17cmを測り、黄褐色シルト層上面で検出している。平面形はやや南北に長い楕円形を呈しており、検出高は標高約6.83mである。

覆土には黒色土が堆積しており、炭化物も認められた。また、上部はかなり削平されているようで、本来はもう少し深い土坑であったと考えられる。

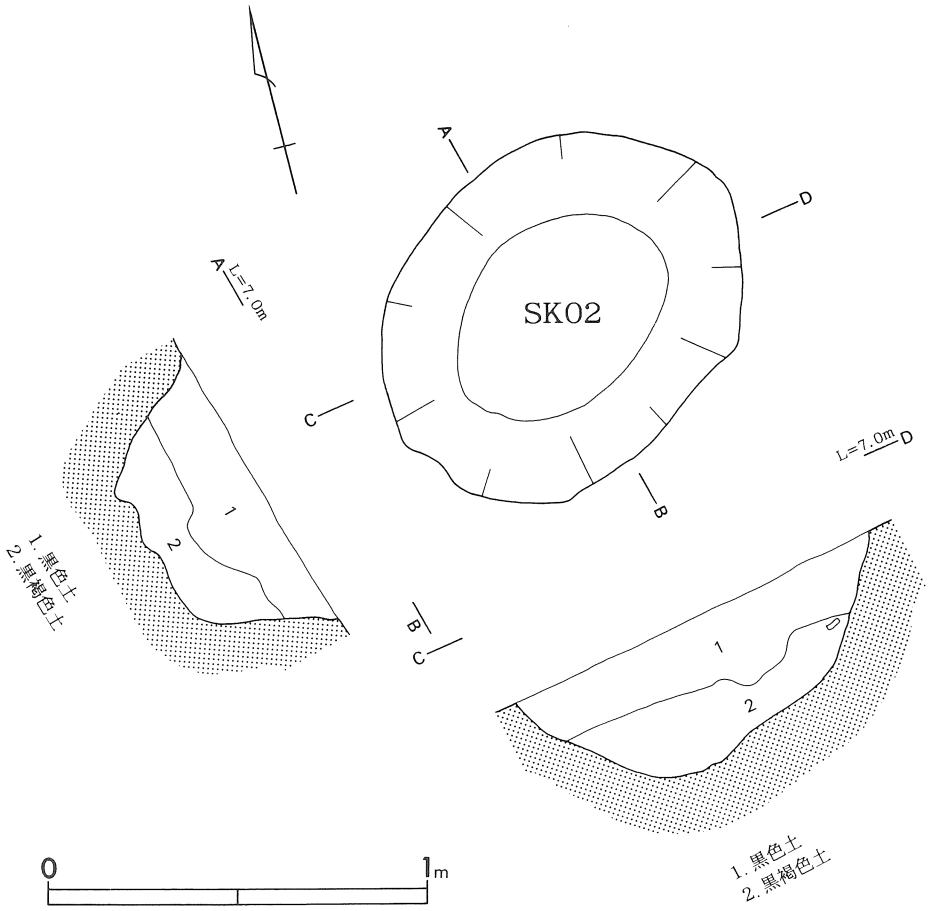
遺物には1個体と考えられる壺か甕の土器片が認められ、これらの土器は重なるような状態で出土している(第72図)。



第73図　SK01出土遺物実測図

第73図－1は、その土器の底部であるが、底径7.0cmを測り、外面にはタテ方向のミガキ、内面にはタテ方向のハケが認められる。弥生時代中期中葉頃の土器と考えられる。

頸部から上方が出土しておらず、器種の判断はできないが、1971年、第1次発掘調査の際には、この地点から約150mほど南方の地点から長さ約1.5m、深さ0.5mの墓坑の中に壺棺が納められた弥生時代中期後半の壺棺墓が発見されていることから、SK01も壺棺墓として使用されていた可能性がある。



第74図　ＳＫ０２実測図

ＳＫ０２（第74図）

SK01すぐ北側の黄褐色シルト層上面で検出した土坑で、長軸1.08m、短軸0.84mを測る楕円形の土坑である。深さはSK01と比較するとやや深く、約32cmを測り、検出高は標高約6.79mである。

覆土には、黒色土、黒褐色土が堆積しており、SK01と同様に炭化物が認められている。また、上部は削平を受けており、本来はもう少し深い土坑であったと考えられる。

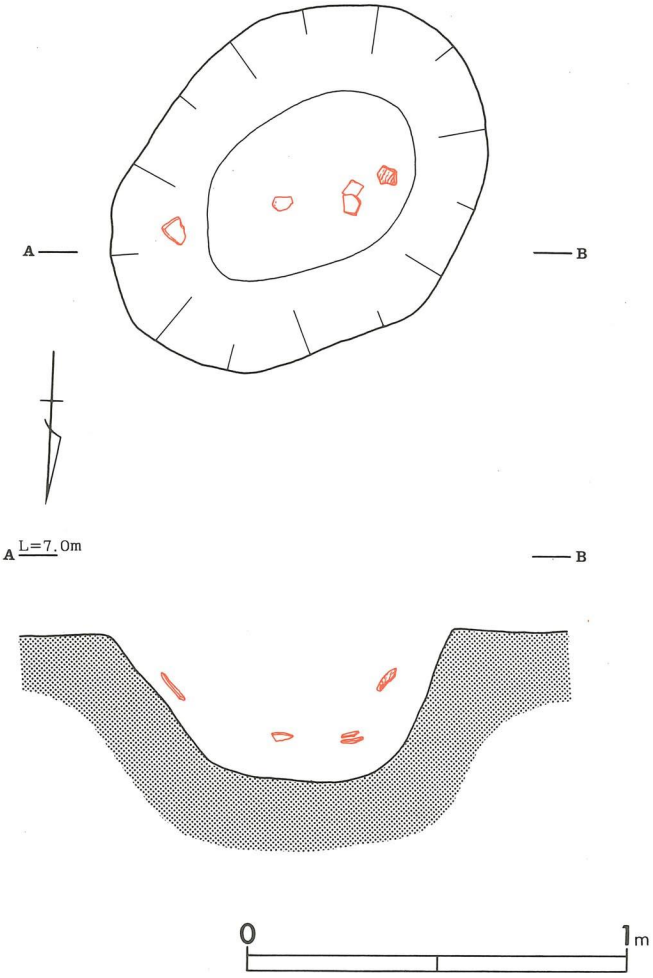
出土遺物は、細片のみである（第75図）が、弥生時代中期中葉頃の土器が出土していることから、当該期の遺構であろう。

なお、SK02は、遺構の形状、規模、出土遺物の時期などから、SK01と同様に土坑墓として使用されていた可能性がある。

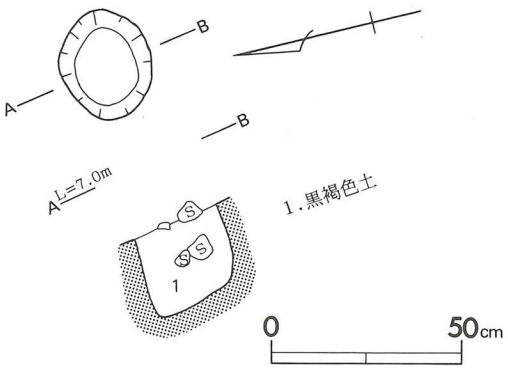
Ｐ17（第76図）

Ｂ区中央部の黄褐色シルト層上面で検出したピット状の遺構である。この周辺にはピット群が集中しているが、この中には、前述したように中世のピットも若干含まれるものと考えられる。

Ｐ17は、南北長24cm、東西長29cmを測るほぼ円形のものであるが、覆土には黒褐色土が堆積している。中には数片の弥生土器片が認められ、石が埋められていた。石は、花崗岩の自然石で、加工した



第75図　ＳＫ０２遺物出土状況実測図



第76図　Ｐ17実測図

ような形跡は認められないが、石材を保管するための貯蔵穴であった可能性もある。数片認められた土器片より、弥生時代中期中葉頃の遺構である可能性が強い。

その他の遺構

上述した遺構のほかには、中央部SK01、SK02の周辺に集中して認められるピット群があるが、これらのピット群の中には、Ｐ25から出土した中世土器や弥生時代中期中葉頃と考えられるＰ17のように、弥生時代中期のものと、中世のものとに分類できるようである。

しかし、上部が削平を受けているため、堆積土の状況からは時期的判断が難しく、また、ピット中には遺物がほとんど認められないことから、詳しいことは分かっていない。

なお、調査区が狭量である要因もあろうが、検出した状況において、建物跡の柱穴となりうるような配置は認められないようである。しかし、大規模な溝状遺構が並列している状況から、これらの溝状遺構や土坑に伴う覆屋のようなものがあった可能性はあろう。

その他には、東側で旧自然流路の肩部と考えられる部分を検出しているが、詳しくはＣ区で後述する。

出土遺物観察表

P25

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
48－1	P25	土師器 足高高台付杯	16.0	8.8	6.6	口縁端部やや外反　内湾ぎみに立ち上がる	淡褐色	密	良好	

SD04

50－1	SD04	土師器甕	18.4	－	－	口縁端部に平坦面を作る 端部を両側に折りまげる	褐色	やや粗い 1㎜大の砂粒含む	普通	
－2	SD04	土師器甕	16.5	－	－	口縁端部に平坦面を作る 端部を外方に折りまげる	淡黄褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒含む	良好	
－3	SD04	土師器高杯	－	－	－	内外面ハケ 円盤充填法	黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒を多く含む	良好	器高低い 搬入系土器か？

SD06（土器）

55－1	SD06	甕	14.4	－	－	口縁部内外面ナデ	黒褐色	密 1㎜大の白色砂粒を含む	普通	口縁部スス付着
－2	SD06	甕	19.7	－	－	口縁端部外方に折りまげる	淡褐色	密	良好	
－3	SD06 中層	甕or壺	10.0	－	－	複合口縁くびれ部内側に筒状に傾斜	淡黄褐色	密	普通	
－4	SD06 上層	甕	16.2	－	－	複合口縁 口縁部内外面ナデ	外／黒褐色 内／褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む	良好	口縁部スス付着
－5	SD06	甕	17.2	－	－	口縁端部外方に折りまげる	淡褐色	普通 金雲母含む	良好	
－6	SD06 中層	甕	16.0	－	－	口縁端部外方に折りまげる 内面頸部下からケズリ	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む 金雲母含む	普通	口縁部スス付着
－7	SD06 中層	甕	18.2	－	－	端部やや外方に向ける	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－8	SD06	甕	18.7	－	－	口縁端部に平坦面を作る 端部やや外方に向ける	褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	口縁部スス付着
－9	SD06 中層	甕	18.6	－	－	口縁端部丸くおさめる 内面頸部やや下にハケ・ケズリ	外／黒褐色 内／褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	良好	器壁厚い 搬入品か？
55－10	SD06 中層	壺	16.0	－	－	口縁端部に平坦面を作る 外／頸部下ハケ、凹線文 内／頸部やや下からケズリ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－11	SD06 上層	甕	19.4	－	－	口縁端部丸くおさめる 内／頸部下からケズリ	褐色	やや粗い 1～2㎜大の白色砂粒を多く含む	不良	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
－12	SD06 下層	甕	13.5	－	－	端部丸くおさめる 外／頸部下ハケ 内／頸部指頭圧痕、下方ケズリ	赤褐色	やや粗い 1～3㎜大の白色砂粒を多く含む	良好	器壁厚い 搬入土器
－13	SD06 上層	甕	17.2	－	－	口縁端部平坦面を作る 外／頸部下凹線・ハケ 内／頸部下ケズリ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－14	SD06 下層	甕	16.3	－	－	口縁端部外方に折りまげる 外／頸部下波状文・ハケ 内／頸部指頭圧痕、下からケズリ	淡褐色	密 金雲母含む 1㎜大の白色砂粒含む	普通	
－15	SD06 中層	甕	14.4	－	－	口縁端部丸くおさめる 外／ハケ 内／頸部下からケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	普通	口縁部スス付着
－16	SD06 中層	壺	8.8	－	－	外／頸部下貝殻による刺突文 胴部ハケ 内／頸部やや下からケズリ	黄褐色	密 1～3㎜大の白色砂粒を多く含む	良好	搬入土器
－17	SD06 中層	甕	15.4	－	－	口縁端部やや外方に折りまげる 外／頸部下ハケ 内／頸部やや下からケズリ	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	良好	
－18	SD06 中層	甕	16.3	－	－	口縁端部やや外反する 外／頸部やや下に波状文 内／頸部下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－19	SD06 上層	甕	14.6	－	－	口縁端部外方に折りまげる 外／頸部下からハケ、間隔の広い波状文 内／頸部下からケズリ	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	良好	胴部スス付着
－20	SD06 下層	甕	16.8	－	－	口縁端部平坦面を作る 外／頸部下ハケ 内／頸部下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒を多く含む	普通	
－21	SD06	甕	18.4	－	－	口縁端部丸くおさめる 内／頸部に指頭圧痕残る 頸部やや下からケズリ	褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	やや不良	胴部スス付着
56－96	SD06 下層	甕	16.6	－	－	口縁端部平坦におさめる 外／頸部下からハケ 内／頸部やや下からケズリ	淡褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む	良好	
－97	SD06 上層	甕	15.4	－	－	口縁端部平坦を意識 内／頸部やや下からケズリ	外／淡褐色 内／淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	普通	口縁部から胴部にかけてスス付着
－98	SD06	壺	22.2	－	－	外／頸部にミガキ 内／頸部指頭圧痕残る 頸部下からケズリ	淡黄褐色	粗い 1㎜大の白色砂粒含む 雲母含む	良好	
－99	SD06	壺	14.6	－	－	口縁部内傾する 口縁端部平坦面を作る 外／頸部下波状文・クシ描凹線・ハケ 内／頸部やや下からケズリ	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む	良好	口縁部から胴部にかけてスス付着
－100	SD06 中層	甕	26.2	－	－	外／頸部下からハケ 内／頸部下からケズリ	淡褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む 金・黒雲母含む	良好	口縁部スス付着 大形品

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
56－101	SD06 下層	甕	14.4	－	－	口縁端部丸くおさめる 外／胴部ハケ、タタキ痕？ 内／頸部下からケズリ	赤褐色	密 1～2㎜大の白色砂粒含む	良好	搬入品か？ 重い
－102	SD06 中層	甕	19.6	－	－	口縁端部やや外反 外／胴部にハケ 内／頸部下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む 金雲母含む	普通	
－103	SD06 上層	甕	17.5	－	－	口縁端部平坦に作る 外／胴部にハケ、頸部下にクシ描凹線 内／頸部下からケズリ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	胴部スス付着
－104	SD06 中層	甕	18.5	－	－	口縁端部外反する 外／波状文、ハケ 内／頸部下からケズリ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む	普通	胴部スス付着
－105	SD06 中層	甕	14.8	－	21.5	口縁端部外反し平坦面を作る 外／頸部下からハケ 内／頸部下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 雲母含む	良好	胴部から底部にかけてスス付着
－106	SD06 中層	甕	16.4	－	－	外／頸部下からハケ 内／頸部下からケズリ	黄褐色	密	良好	
－107	SD06 中層	甕	16.4	－	－	口縁端部やや外反する 外／頸部下からハケ 内／頸部下からケズリ	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	胴部にスス付着
－108	SD06 中層	甕	16.0	－	－	口縁端部丸くおさめる 外／頸部下からハケ 内／頸部下からケズリ	褐色	密	良好	胴部にスス付着
－109	SD06 中層	壺	14.2	－	15.0	外／頸部下クシ描凹線、ハケ 内／頸部下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	普通	胴部から底部にかけてスス付着
57－22	SD06 中層	甕	18.4	－	25.9	口縁端部平坦 外／頸部下から全面ハケ 内／頸部下からケズリ、底部指頭圧痕残る	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	胴部から下スス付着 丸底
－23	SD06	甕	16.8	－	－	口縁端部丸くおさめる 外／胴部ハケ 内／頸部下からケズリ	褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	胴部スス付着
－24	SD06 下層	甕	13.2	－	18.0	口縁端部やや外反 外／頸部やや下に波状文　胴部から底部にハケ 内／頸部下からケズリ、底部に指頭圧痕残る	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒を多く含む	良好	胴部から底部にかけてスス付着 わずかに平底を残す
－25	SD06 中層	甕	16.8	－	－	口縁端部やや外反 外／胴部ハケ 内／頸部下からケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	口縁部にスス付着
－26	SD06 中層	甕	15.6	－	－	口縁端部平坦に作る 外／頸部やや下からクシ描凹線文、胴部ハケ 内／頸部下からケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	胴部スス付着

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
57－27	SD06 中層	甕	14.0	－	15.8	口縁端部やや外反し、丸くおさめる 外／頸部下からハケ 内／頸部下からケズリ、底部に指頭圧痕残る	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	胴部から底部にかけてスス付着 わずかに平底を残す
－28	SD06 下層	甕	15.4	－	－	外／頸部下からややハケ 内／頸部下からケズリ	淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒含む	普通	胴部スス付着
－29	SD06 上層	甕	13.8	－	－	口縁端部に平坦面作る 外／頸部やや下からハケ 内／頸部下からケズリ	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	良好	外面に赤色塗彩
－30	SD06	壺	17.7	－	－	口縁端部やや外反し丸くおさめる	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	普通	
－31	SD06 上層	甕	16.3	－	－	単純口縁、口縁端部平坦に作る端部内側にまげる 外／頸部にタテハケ 内／頸部下ケズリか？	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む	普通	
－32	SD06 中層	甕	15.9	－	－	単純口縁 外／頸部下からハケ 内／頸部やや下からケズリ、頸部よりやや上方にハケ	黄褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒を多く含む 雲母含む	良好	口縁から下にスス付着 搬入土器か?
－33	SD06 中層	甕	12.0	－	13.3	単純口縁、口縁端部丸くおさめる 外／胴部から下ハケ 内／頸部下からケズリ	外／赤褐色 内／褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む	良好	搬入土器 胴部から底部にかけてスス付着 丸底、重い
－34	SD06 中層	甕	13.2	－	13.1	単純口縁 外／頸部やや下からハケ 内／頸部やや下からケズリ、頸部に指頭圧痕残る	淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒含む 雲母含む	良好	丸底 搬入土器
－35	SD06 中層	甕	15.2	－	25.9	単純口縁 外／頸部やや下に間隔の狭い波状文、タタキ痕あり、胴部ハケ 内／頸部やや下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	胴部から底部にかけてスス付着 丸底 搬入土器
－36	SD06 中層	直口壺	10.4	－	13.3	単純口縁 外／頸部上にタテハケ、頸部下からハケ 内／頸部やや下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒を多く含む 金雲母を含む	良好	丸底 搬入土器 重い
58－37	SD06 中層	甕	36.0	－	44.1	口縁端部平坦 外／頸部下から全面にハケ 内／頸部下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	普通	大形品 平底
－38	SD06 下層	甕	－	－	－	外／ハケ 内／ケズリ、底部付近に指頭圧痕残る	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む 雲母含む	良好	胴部から底部にかけてスス付着 わずかに平底を残す 底部に記号あり
59－39	SD06 中層	壺	34.6	－	－	口縁端部平坦に作る 外／頸部下からハケ 内／頸部やや下からケズリ、頸部に指頭圧痕残る	淡褐色	密	良好	大形品

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
59－40	SD06 中層	壺	19.0	－	－	外／頸部にタテハケ、頸部より下ハケ 内／頸部やや下からケズリ	黄褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む 金雲母含む	普通	
－41	SD06 中層	直口壺	10.4	－	16.9	複合口縁、口縁端部丸くおさめる 外／頸部やや下から全面にハケ 内／頸部下からケズリ	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	やや不良	丸底
－42	SD06 上層	直口壺	10.5	－	18.0	口縁端部丸くおさめる 外／頸部やや下から全面にハケ 内／頸部下からケズリ	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	普通	胴部から底部にかけてスス付着 胴が張る 丸底
－43	SD06 中層	壺	22.2	－	38.0	外／頸部から下全面ハケ 内／頸部やや下からケズリ 底部付近に指頭圧痕残る	外／淡褐色 内／黒褐色	密 1㎜大の白色砂粒を多く含む	良好	平底
－44	SD06 中層	壺	－	－	－	ミカン形 外／全面にハケ 内／頸部やや下にハケ 頸部やや下からケズリ	淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒含む	良好	丸底、重い 頸部から上なし 搬入土器か?
60－45	SD06 中層	壺	27.4	－	－	口縁端部平坦に作る 外／頸部に貝殻腹縁による綾杉文、沈線で区画、頸部より下ハケ 内／頸部やや下からケズリ	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	
61－46	SD06 中層	高杯	22.4	－	－	杯端部外反する 外／口縁部ハケ、タテミガキ 内／杯底部ハケ、口縁部ミガキ	外／褐色 内／赤褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	良好	搬入土器か?
－47	SD06 上層	高杯	－	13.1	－	脚端部広がり、長い脚柱部を持つ 外／一部にハケ	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒を多く含む	やや不良	
－48	SD06 中層	高杯	－	11.4	－	広がる裾部をもつ 外／脚柱部タテミガキ 内／ケズリ	黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	良好	円盤充塡法
－49	SD06 中層	低脚杯	16.0	－	－	外／杯部ハケ、ミガキ 内／ミガキ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 雲母含む	良好	
－50	SD06 中層	高杯	15.7	－	－	複合口縁、深い杯部を持つ 外／頸部下ハケ 内／ミガキ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	
－51	SD06 上層	低脚杯	14.2	－	－	口縁端部丸くおさめる 外／ミガキ、タテハケ 内／ヨコミガキ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	
－52	SD06 中層	高杯	17.6	－	－	口縁端部丸くおさめる 外／ヨコミガキ 内／ミガキ	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒を多く含む 雲母含む	良好	
－53	SD06 下層	低脚杯	16.4	8.9	7.2	外／杯部ヨコミガキ、ハケ 内／杯部ヨコ方向のミガキ 脚部内外面ナデ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
61－54	SD06 中層	低脚杯	－	10.4	－	外／ナデ 内／ナデ	淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒を多く含む 金雲母含む	良好	
－55	SD06 中層	低脚杯	17.6	8.0	7.2	内／ミガキ 外／不明	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒を多く含む	普通	
－56	SD06 中層	低脚杯	－	6.9	－	内外面ナデ	淡橙色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒含む 雲母含む	普通	円盤充填法
－57	SD06 上層	低脚杯	13.1	9.0	7.5	深い杯部を持つ 外／ヨコミガキ、ハケ 内／ヨコミガキ 脚部内外面ナデ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	搬入土器
－58	SD06 中層	器台	14.6	14.0	8.4	外／ナデ 内／受部ヨコミガキ 脚部ヨコミガキ、ケズリ	褐色	普通 1㎜大の白色砂粒を多く含む	良好	
－59	SD06 中層	器台	－	22.8	－	外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒を多く含む 金雲母含む	普通	脚部破片
－60	SD06 中層	器台	－	－	－	外／ナデ 内／脚部ケズリ	淡褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む 金雲母含む	普通	
－61	SD06 中層	小壺	－	－	－	手捏ね土器 外／頸部に間隔狭く小さな指頭圧痕残る	淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒を多く含む	普通	小児による製作か？
－62	SD06 下層	鉢？	10.5	－	－	外／ハケ 内／ハケ 口縁内外面に指頭圧痕残る	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	普通	手捏ね土器
－63	SD06 上層	杯	12.2	－	4.9	外／ミガキ、ハケ 内／ミガキ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	
62－64	SD06 下層	弥生土器 甕	31.2	－	－	短く外反する 外／口縁部に刻目文？	暗褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	やや不良	風化著しい
－65	SD06 中層	弥生土器 甕	19.0	－	－	口縁部ゆるく「く」の字状に屈曲する 外／頸部下からハケ 内／頸部やや下にハケ	外／黄褐色 内／淡褐色	密 1㎜大の白色砂粒を含む 金雲母含む	良好	
－66	SD06	弥生土器 甕	18.0	－	－	口縁部「く」の字状に屈曲する 外／頸部下からハケ 内／頸部やや下からハケ	黄褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm)			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
62－67	SD06 上層	弥生土器 甕	16.0	－	－	口縁部ゆるく「く」の字状に屈曲する 外／頸部やや下からハケ 内／頸部やや下からハケ	黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－68	SD06 最下層	弥生土器 甕	18.6	－	－	短く外反する	淡褐色	普通 金雲母含む	良好	
－69	SD06	甕	15.8	－	－	単純口縁 口縁端部内側に折りまげる 外／ナデ 内／頸部やや下からケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	搬入系土器
－70	SD06 下層	弥生土器 甕	16.5	－	－	口縁部鋭く屈曲する 外／胴部ハケ 内／頸部やや下からハケ	淡黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－71	SD06	弥生土器 甕	17.2	－	－	口縁部鋭く屈曲する 外／不明 内／頸部下にミガキ痕？	外／淡黄褐色 内／褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む	普通	
－72	SD06 中層	甕	14.8	－	－	単純口縁 口縁端部内側に折りまげる 外／頸部下からハケ 内／頸部やや下からケズリ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	搬入系土器
－73	SD06 下層	弥生土器 甕	15.6	－	－	口縁部短く外反する	外／黒褐色 内／褐色	密 1㎜大の白色砂粒多く含む	普通	
－74	SD06 下層	弥生土器 壺	25.3	－	－	口縁部／円形浮文、斜格子文 外／タテ、ヨコに貼付突帯・刻目文 内／一部にハケ	黄褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－75	SD06	弥生土器 壺	31.0	－	－	口縁端部下垂する 口縁部／クシ描斜格子文 外／頸部にハケ 内／斜格子文、貼付突帯	黄褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－76	SD06	弥生土器 壺	25.7	－	－	口縁端部下垂する 口縁部／クシ描斜線文 内／斜格子文	淡黄褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む	良好	
－77	SD06 上層	弥生土器 壺	20.8	－	－	口縁部短く外反する 外／頸部にハケ 内／頸部の一部にミガキ	淡褐色	普通 1㎜大の白色砂粒多く含む	良好	
－78	SD06 下層	弥生土器 壺	21.1	－	－	口縁端部下垂する 口縁部／斜格子文、円形浮文 内／刺突文	赤褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む 雲母含む	良好	
－79	SD06 中層	弥生土器 壺	19.6	－	－	口縁端部下垂する 口縁部／斜格子文 内／波状文	黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	良好	
－80	SD06 中層	弥生土器 壺or甕	－	13.5	－	外／ハケ 内／底部付近に指頭圧痕残る	外／黒色 内／淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む 雲母含む	良好	
－81	SD06	弥生土器 壺or甕	－	8.2	－	外／ミガキ 内／底部付近に指頭圧痕残る	外／赤褐色 内／褐色	密 1㎜以下の白色砂粒を含む	良好	

挿図番号	出土地点	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
62－82	SD06 上層	弥生土器 壺or甕	－	13.0	－	外／不明 内／底部付近に指頭圧痕残る	淡黄褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む	普通	
－83	SD06 中層	弥生土器 壺or甕	－	7.5	－	外／ミガキ 内／底部付近に指頭圧痕残る 底部／一部にハケ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	
－84	SD06 上層	弥生土器 壺or甕	－	5.7	－	外／ミガキ 内／ミガキ？	外／褐色 内／黒褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒含む 雲母含む	やや不良	
－85	SD06 下層	弥生土器 壺or甕	－	9.9	－	外／ミガキ 内／ミガキ	外／淡赤褐色 内／褐色	やや粗い 1～2㎜大の白色砂粒含む		
－86	SD06 下層	弥生土器 壺or甕	－	6.6	－	外／ミガキ 内／ヨコ方向のミガキ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒含む 雲母含む	良好	
－87	SD06 中層	弥生土器 壺or甕	－	6.6	－	外／不明 内／底部付近に指頭圧痕残る 底部／一部にハケ	外／淡赤褐色 内／褐色	やや粗い 1～2㎜大の白色砂粒含む	良好	
－88	SD06 中層	弥生土器 壺or甕	－	6.8	－	外／ミガキ 内／底部付近に指頭圧痕残る	外／褐色 内／暗褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	良好	
－89	SD06 下層	弥生土器 壺or甕	－	4.7	－	外／タテ方向のミガキ 内／ヨコ方向のミガキ	黒褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒多く含む 雲母含む	やや不良	
－90	SD06	弥生土器 壺or甕	－	6.6	－	風化著しく不明	外／黄褐色 内／褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	良好	
63－91	SD06 上層	弥生土器 高坏	30.8	－	－	口縁部水平に屈曲する 外／ミガキ、くびれ部やや下に刺突文 内／ハケ	外／黄灰色 内／淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	63－92と同じ土器か？
－92	SD06 下層	弥生土器 高坏	－	－	－	外／脚部ミガキ 内／脚部ハケ	淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	63－91と同じ土器か？
－93	SD06 下層	弥生土器 高坏？	19.0	－	－	口縁部平坦に作る 外／口縁部に刺突文 内／口縁下にミガキ、口縁やや下からハケ	淡黄褐色	普通 金雲母含む	普通	
－94	SD06 上層	弥生土器 鉢	30.5	－	－	口縁部平坦に作る 外／口縁部刺突による刻目文、貼付突帯文 内／不明	淡赤褐色	普通 1㎜大の白色砂粒含む	良好	
－95	SD06	弥生土器 無頸壺	14.3	－	－	口縁部平坦 外／口縁部刺突による刻目文、貼付突帯文 内／一部にミガキ	淡黄褐色	密 1㎜大の白色砂粒含む	やや不良	

ＳＤ０６（石器）

挿図番号	出土地点	器　種	遺存状況	石　材	最大長(cm)	最大幅(m)	最大厚(cm)	重　量(g)	備　考
64－1	ＳＤ０６上　層	剝片	不明	黒曜石	4.2	1.9	1.4	7.5	
－2	ＳＤ０６	不明	欠損		5.8	5.3	5.0	22.0	側面に平坦面を作り出す 磨製
－3	ＳＤ０６	砥石	両端欠損		8.5	6.5	3.8	285.0	片面は使用により凹んでいる
－4	ＳＤ０６	刃部 未成品か？	両端欠損		8.4	6.5	0.6	59.0	刃部を打製により作り出す

ＳＤ０２

挿図番号	出土地点	器　種	法　量(cm)			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
66－1	ＳＤ０２	弥生土器 壺or甕	－	6.7	－	外／タテ方向ミガキ 内／タテ方向ケズリ	外／赤褐色 内／黒褐色	密 １㎜大の白色砂粒を多く含む	良好	

ＳＤ０５

69－1	ＳＤ０５	弥生土器 壺or甕	－	8.2	－	外／タテ方向ミガキ 内／タテ方向ミガキ	外／黄褐色 内／黒褐色	密 １㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	良好	
－2	ＳＤ０５	弥生土器 壺or甕	－	5.9	－	外／タテ方向ミガキ 内／タテ方向ミガキ、底部付近に指頭圧痕残る	外／褐色 内／暗褐色	密 １㎜以下の白色砂粒含む 金雲母含む	普通	
－3	ＳＤ０５	弥生土器 壺	－	－	－	外／貼付突帯に刻目文を施す、突帯より上部ハケ 内／ヨコ方向ミガキ	黄褐色	やや粗い １㎜以下の白色砂粒含む	良好	

ＳＫ０１

73－1	ＳＫ０１	弥生土器 壺or甕	－	7.0	－	外／タテ方向ミガキ 内／底部付近に指頭圧痕残る、タテ方向ハケ	黒灰色	密 １㎜大の白色砂粒多く含む 金雲母含む	普通	

3．小　　結

Ｂ区では、弥生時代中期中葉から近世に至るまでの遺構を多数検出した。

中世から近世においては、遺構の残存状態もあまり良好ではなく、遺構も少ないが、この周辺に人々が生活を営んでいた様子が窺える。

Ｂ区で最も注目されるのは、大規模な溝状遺構が４条検出されたことであろう。これらのうち、SD03、SD05は弥生時代中期中葉の溝状遺構であり、環濠としての可能性がある。特に、SD05の東側に土塁状遺構が認められることは、全国的にみても貴重な資料である。また、SD03とSD05はほぼ同時期に築かれたと考えられることから、近畿地方に多く認められる多重環濠として機能していた可能性もある。弥生時代中期の多重環濠の例としては、大阪府池上遺跡[7]、奈良県唐古・鍵遺跡[8]などが挙げられる。山陰でも米子市尾高浅山遺跡[9]で２条の環濠が認められている。

また、弥生時代終末期の溝状遺構と考えられるSD06も注目される。溝状遺構の中では最も大規模なもので、出土遺物も多量なうえ、完形品も多く、搬入品を伴っていることから、当該期の出雲平野の集落を考えるうえで貴重な資料となった。

SD06も環濠として機能していた可能性がある。通常、環濠集落は弥生時代終末期には終焉したと考えられているが、大阪府長原遺跡[10]などのように古墳時代にも環濠を有する例が認められていることから、弥生末期以後においても、社会的な非常の際には築かれた可能性はあろう。

SD04は、時期的にはSD06よりやや新しい時期にあたり、古墳時代前期初頭の遺構であろうが、この溝も規模が大きく、環濠としての可能性が残る。また、これら弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての土器は、これまでの天神遺跡の発掘調査ではほとんど出土しておらず、天神遺跡の時期的変遷を考えるうえにおいても画期的な資料となった。

なお、天神遺跡では、1985年の第６次発掘調査においても幅約3.0m、深さ1.2mを測る弥生時代中期の大溝が検出され、環濠の可能性が指摘されており、今回の調査と直接結びつくものとは考えにくいが、この周辺に環濠を巡らす集落が点在していた可能性もある。

その他の遺構としては、土坑墓と考えられるSK01、SK02がある。この２つの土坑は近接しており、この地域が弥生時代中期頃の墓域となっていたことが考えられる。

しかしながら、今回の調査では、多量の土器を検出しているのにもかかわらず、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての住居跡は認められなかった。これは、調査区が狭量な要因もあろうが、居住空間は少し離れた場所にあったと考えられよう。遺跡の範囲がそれほど北方に伸びていないこと、これまでの調査では、南方に弥生中期の遺構が集中していることから考えると、調査区の南方に居住空間が広がっていた可能性が強い。

以上のように、Ｂ区における調査では豊富な土器資料が得られたことと共に、集落を囲繞するような環濠の可能性をもつ大規模な溝状遺構が検出され、天神遺跡の多様性を再認識する結果が得られた。

註

(1) 『南講武草田遺跡』　鹿島町教育委員会　1992年
(2) 『大木権現山古墳群』　東出雲町教育委員会　1979年
(3) 『山持川川岸遺跡』　出雲市教育委員会　1996年
(4) 『古代の出雲を考える７　松本古墳群』　1991年
(5) 『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ　夫敷遺跡』
島根県教育委員会、建設省松江国道工事事務所　1992年
(6) 『弥生土器の様式と編年　山陰・山陽編』　正岡勝夫、松本岩雄編　木耳社　1992年
(7) 『第２阪和国道内遺跡発掘調査報告書４』　第２阪和国道遺跡調査会　1971年
(8) 『唐古・鍵遺跡第２・23次発掘調査既報』　田原本町教育委員会　1988年
(9) 『日本考古学年報45』「鳥取県米子市尾高浅山遺跡」　下高瑞哉　1994年
(10) 『長原遺跡発掘調査現地説明会資料』　大阪市教育委員会　1985年

C　　区

Ｃ区の調査

１．調査の概要

Ｃ区は、海上川ＢＯＸ（用水路）からＪＲ第一高西踏切までの幅約６ｍ、長さ約60ｍの約360㎡を対象に発掘調査を実施している。ＪＲ山陰本線敷設のための盛土を約１ｍ程度除去した後、調査を開始した。

層序（第78図）

調査区での基本的層序は、上層から、Ｂ区と同様に近世の耕作土である黄灰色土、黄褐色土、灰色土、灰黄褐色土、褐灰色土、黒色粘土（東側は暗青灰色粘土へと変化）となり、オリーブ灰色粘土に達する。

しかし、調査区の西側約10ｍの部分については、褐灰色土の下層には灰オリーブ色粘質土や灰黄褐色砂層などが堆積しており、やや異なった様相を示している。また、Ｃ区の大部分は旧自然流路にあたると考えられるが、隣接してＪＲ山陰本線が走り、掘削が深くなって安全性が保たれないことから、標高約4.0ｍ付近まで掘り下げるにとどまった。

遺　構

遺構は、旧自然流路と考えられる地点であることからほとんど検出されなかったが、黒色粘土が堆積する調査区の西側で溝状遺構を１、ピット状の遺構を数穴確認している。これらの遺構は、出土遺物から、弥生時代中期後葉の遺構であると考えられ、Ｂ区で検出した弥生時代中期中葉の遺構に続くものである。

なお、調査区の中央部、東側では遺構は検出していない。

遺　物

遺物は、上層に堆積している黄灰色土、黄褐色土を中心に中・近世の陶磁器やカワラケなどが出土しているが、細片が多い。また、その下層に堆積する灰色土、灰黄褐色土中からは、遺物はほとんど検出されなかった。

しかし、調査区の西側約10ｍ部分に堆積している黒色粘土や、灰黄褐色砂層中からは、弥生時代中期後葉に相当する土器片と共に、同時期の木製品がおびただしいほど出土している。その中には、鍬の未成品や鋤などの農耕具のほか、椀やスプーン状木製品などの食器、杭や部材など、多種多様な出土遺物があり、当該期の生活を考えるうえで貴重な資料となった。

また、調査区の西側に堆積している灰オリーブ色粘質土中からは、古墳時代後期にあたる須恵器坏身の完形品が出土していることは注目される。

海上川ＢＯＸ改設時における立会調査

1993年（平成５年）８月９日、海上川ＢＯＸ改設時に立会調査を行っている（第77図）。

調査は、約１ｍ程度の盛土を除去した後、開始したが、南側部分では元の用水路を補強するためのコンクリートが敷かれていた。工事の工程から、取り除かずに工事する計画であったため、調査範囲は幅約2.7ｍ×2.2ｍの狭い範囲に限られた。

調査での層序は、上層から黄褐色土、緑灰色土、灰色粘質土、暗灰色砂質土、黒灰色粘質土となっている。このうち、暗灰色砂質土は遺物包含層であり、標高約5.53ｍ～5.61ｍのところに堆積している。

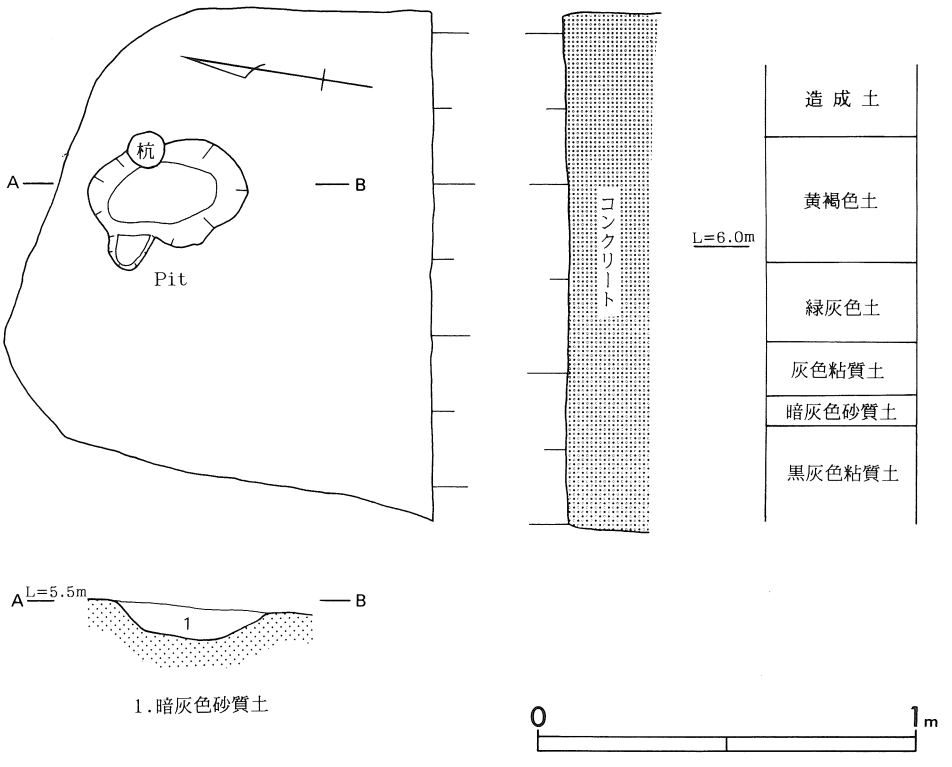
遺構は、黒灰色粘質土の上面において、ピット状の遺構を１穴検出している。

ピット状遺構は、平面形が長軸86cm、短軸60cmの楕円を呈し、深さは約22cmを測る。検出高は標高約5.5ｍである。また、ピット状遺構の東側には、径10cmほどの杭が打ち込まれており、この遺構に伴うものと考えられる。遺構の時期は、出土遺物からは判断し難いが、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけての遺構である可能性が強い。性格は不明である。

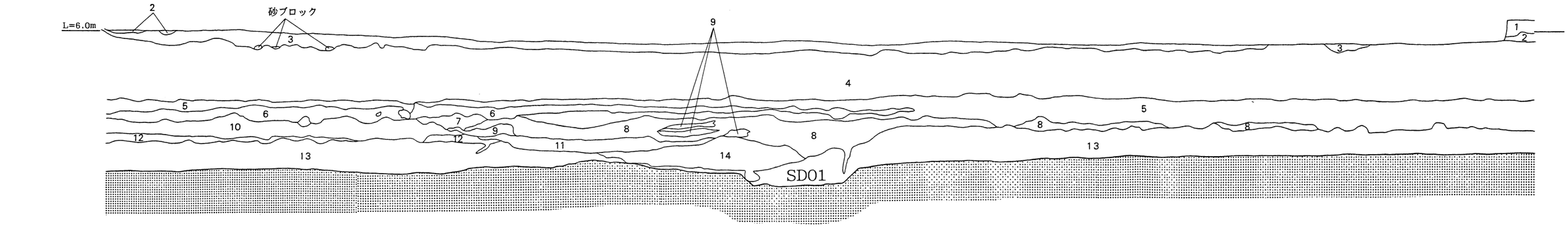
遺物は、その全てが黒灰色粘質土の上面に薄く堆積している暗灰色砂質土中とピット状遺構の中から出土している。遺物には、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭にかけてのものと考えられる土器片や、古墳時代後期にあたると考えられる須恵器片が出土している。

ピット状遺構は、Ｂ区の遺構検出面の標高が約6.8ｍであったのに対し、この地点では約1.3ｍほども低くなっており、Ｂ区東側から落ち込みをみせていた旧自然流路は、しだいに深くなっている様子が明らかである。

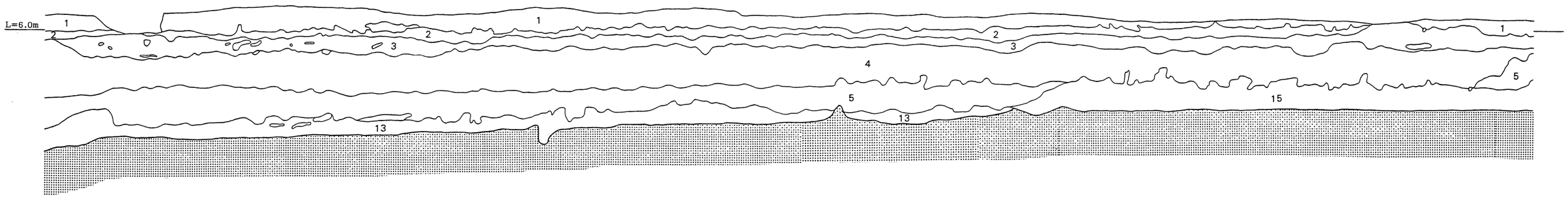
また、弥生時代終末期から古墳時代前期初頭と考えられる土器片が出土したことは、Ｂ区で検出したSD04、SD06とほぼ同時期にあたり、これらの遺構を築いた人々が、低湿地をも利用していたことが予想され、興味深い。なお、古墳時代後期の遺構はＢ区、Ｃ区では検出されていないが、遺物が出土していることから、この周辺に同時期の人々が生活していた様子が窺える。

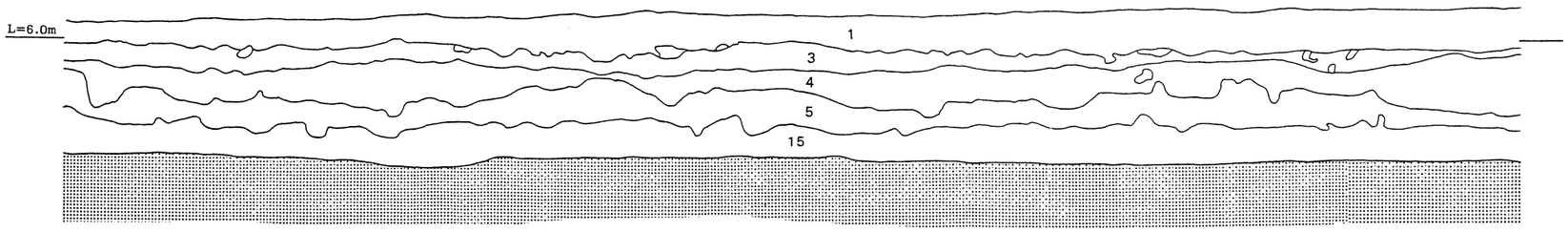


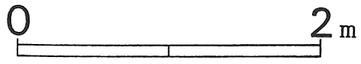
第77図　用水路改設に伴う立会調査遺構実測図



1.黄灰色土
2.黄褐色土
3.灰色土
4.灰黄褐色土
5.褐灰色土
6.灰黄色土
7.黄灰色土
8.灰オリーブ色粘質土
9.オリーブ黄色砂
10.暗灰色粘土
11.灰黄褐色砂
12.黒色粘土（小砂利を含む）
13.黒色粘土
14.黒褐色粘質土
15.暗青灰色粘土







第78図　C区堆積土層図

2．遺構と遺物

C区では遺構は少なく、溝状遺構１条と、ピットを数穴確認しているにすぎない。しかし、西側10mほどに堆積している黒色粘土中（一部は灰黄褐色砂層）からは、おびただしい数の木製品が出土している。

(1) ＳＤ０１（第79図）

調査区の西側、灰オリーブ色粘質土上面で検出した溝状遺構で、南北方向に伸びている。

検出長5.3m、最大幅1.46m、深さ約20cmを測る。検出高は標高約4.62mである。

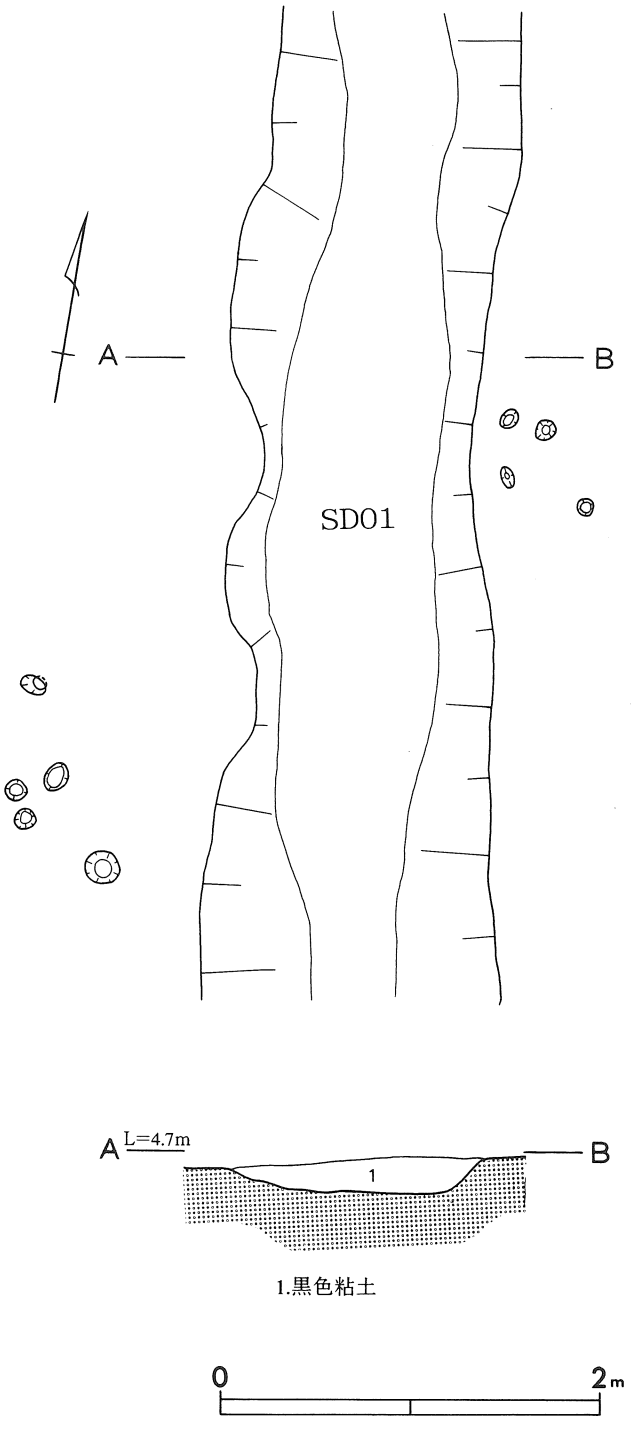
覆土には、上層の黒色粘土が落ち込んだ状態で堆積しており、断面は、西側の肩部からなだらかに落ち、東肩部からはやや鋭角に落ちているが、底面にはやや平坦な面を作り出しており、台形を逆さにしたような形状を呈している。

遺物は、西側から広く堆積している黒色粘土中に多量の木製品を含んでいるように、SD01からも多量の木製品や若干の土器片が認められる（第80図）。

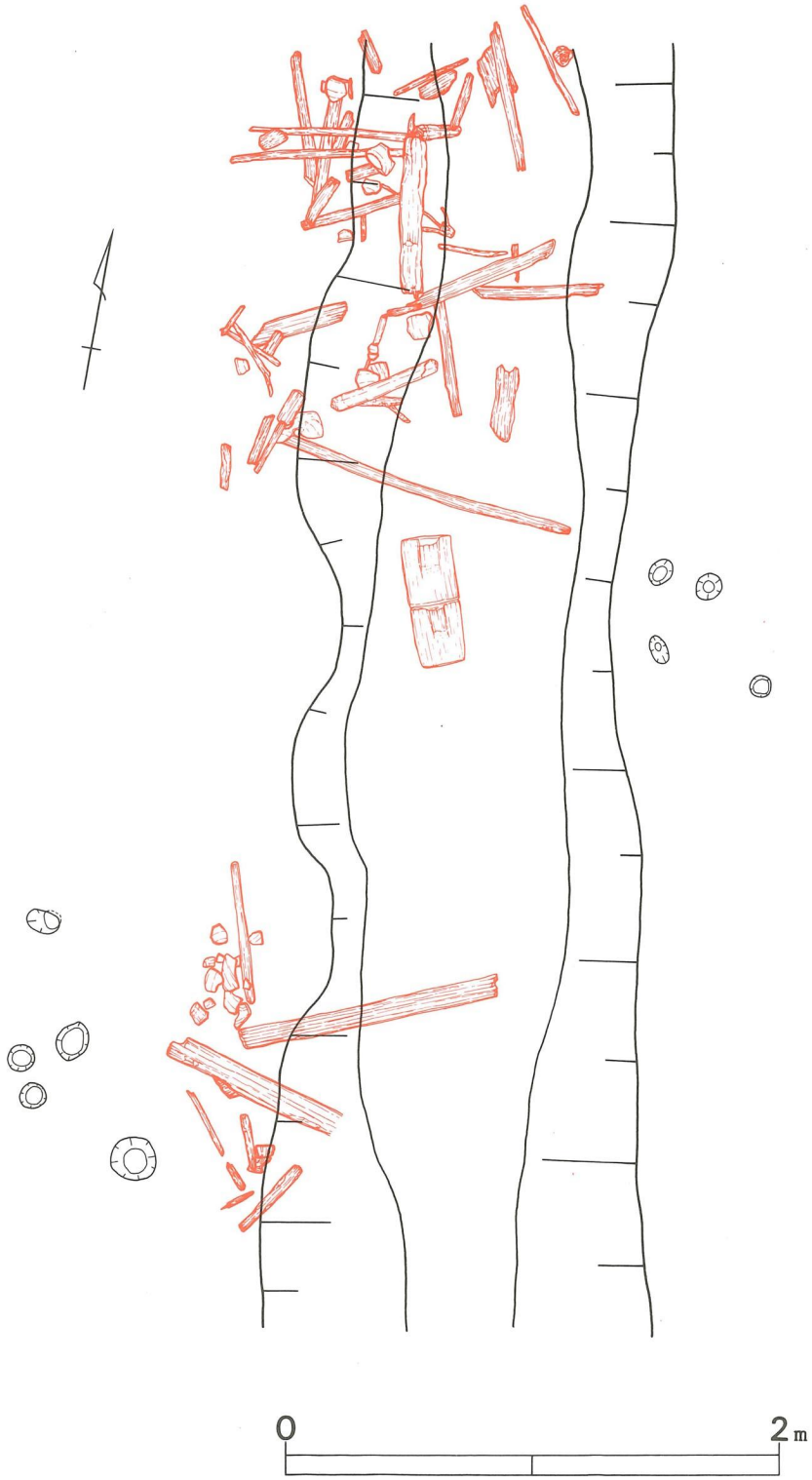
出土した土器片は、松本編年Ⅳ－１様式に相当するものであり、時期的には弥生時代中期後葉にあたるものである。このことから、これら木製品も当該期のものであることは明らかである。なお、出土遺物については後述する。

SD01から出土した木製品の中には、鍬二連結未成品や四分枝木製品などが認められるが、この遺構が木製品を保管する場所であったことも想定できよう。

このような例は、福岡県板付遺跡[1]や、兵庫県玉津田中遺跡[2]のように、溝状遺構の縁に土坑を穿ち、その中に加工途中の木製農耕具を納めた弥生時代の遺構が知られている。



第79図　ＳＤ０１実測図



第80図　ＳＤ０１遺物出土状況実測図

また、SD01の両側には、径10cm未満のピットを数穴確認しているが、この中には杭が打ち込まれていたものもあり、杭跡と考えられる。

松江市西川津遺跡[3]では、加工途中の木製農具を保管した施設と考えられるウッドサークルを多数検出している例があることから、現状では形にはならないが、ウッドサークルのような施設であった可能性がある。

いずれにしても、旧自然流路が徐々に埋まっていく過程にあって、このような湿地帯に木製品を保管していたことは当地方における弥生時代木製品製作工程を具体的に知ることのできる遺構として注目される。

(2)　黒色粘土中からの出土遺物

土器

調査区の西側に堆積している黒色粘土中（一部は灰黄褐色砂層中）からは、多量の木製品や土器片が出土している（第81図）。なお、黒色粘土の堆積している標高は、約4.6m～4.9mのところのある。